飯山市埋蔵文化財調査報告　第７集

太子林・関沢遺跡

TAISHIBAYASHI・SEKIZAWA SITE

1981・3

飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告　第７集

太子林・関沢遺跡

TAISHIBAYASHI・SEKIZAWA SITE

1981・3

飯山市教育委員会

序

飯山市教育委員会
教育長　田 中 清市郎

中野建設事務所が計画した，県道飯山・野沢温泉線改良工事（関沢バイパス）予定地には，先土器・縄文時代の遺跡が推定されており，このため飯山市教育委員会は緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることにしました。

発掘調査にあたっては，飯山北高等学校教諭高橋桂先生に団長をお願いして調査団を編成いたしました。

約40日間にわたるこの調査は，高橋団長はじめ調査員，そして石川伝治作業責任者をはじめとする調査団の献身的努力によって行なわれたものであります。御尽力により数多くの成果が得られましたことは，当地方の古代文化解明にとって朗報であり，誠に同慶の念に耐えないところであります。また，発掘調査に深い御理解と御協力を頂いた中野建設事務所並びに地元関係者，及び発掘調査に御指導いただいた県教育委員会の先生方に対して厚く御礼申し上げます。

最後に，この本報告書が郷土の歴史の解明と生活の糧に広く活用されることを念願するものであります。

例　　言

1．本書は，長野県飯山市大字瑞穂字太子林等に所在する太子林遺跡及び同字畔高等に所在する関沢遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は県道改良工事（関沢バイパス）に伴う緊急発掘であり，中野建設事務所より依頼を受けた飯山市教育委員会が事業主体となって実施したものである。

　なお，調査会・調査団組織は第II章第1節に記載してある。

3．発掘調査は昭和55年7月6日より8月26日まで実施し，補遺調査は9月16日より19日まで行なった。

4．本書は高橋桂団長を中心に調査員全員で共同討議のうえ作成した。なお，執筆者氏名は目次に記した。

5．発掘調査及び本書作成について次の諸先生，諸氏，諸機関より御指導，御協力を賜わった。（敬称略・順不同）

永峰光一，樋口昇一，桐原健，関孝一，宮崎博，中島庄一，中島英子，原川雄二，金井正三，金井晴美，大原正義，宮下健二，大田文雄，広瀬昭弘，西沢隆治，荒牧美枝子，前出耕地遺跡調査会・多摩市遺跡調査会

6．石質の鑑定については大沢進氏より御指導を得た。

7．本書の編集は高橋桂，望月静雄が行なった。

目　　次

第Ⅰ章　遺跡とその環境 ……（望月静雄）……1
第1節　遺跡の地理的位置……1
第2節　周辺遺跡……4
第3節　飯山地方の先土器時代遺跡……4
第Ⅱ章　調査の概要……9
第1節　調査に至る経緯……（望月静雄）……9
第2節　調査の経過……（松沢伸一）……11
第3節　調査の概要……14
1．太子林遺跡……（徳竹雅之）……14
2．関沢遺跡……（青木由美子）……18
第Ⅲ章　太子林遺跡……19
第1節　先土器時代……（望月静雄）……19
1．遺　物……19
2．遺物の出土状態……39
3．接　合……53
第2節　縄文時代……（荒井　宏）……63
1．遺　構……63
2．遺　物……63
第Ⅳ章　関沢遺跡……（望月静雄）……73
第1節　遺　物……73
第2節　遺物の出土状態……80
第Ⅴ章　成果と課題……（望月静雄）……84
第1節　太子林遺跡……84
第2節　関沢遺跡……87
第Ⅵ章　ま と め……（高橋　桂）……91
引用・参考文献……93
図　版

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……2
第２図　地形分類図……3
第３図　周辺遺跡分布図……5
第４図　飯山地方の先土器時代遺跡……6
第５図　太子林・地形図及び発掘区……12
第６図　太子林・発掘区及び深度表……13
第７図　関　沢・グリット設定図及び発掘区……14
第８図　太子林・Ⅳ層の微地形及び遺物分布概念図……15
第９図　太子林・層序……17
第10図　関　沢・層序……17
第11図　太子林・先土器時代の石器 (1) ……21
第12図　太子林・先土器時代の石器 (2) ……22
第13図　太子林・先土器時代の石器 (3) ……23
第14図　太子林・先土器時代の石器 (4) ……24
第15図　太子林・先土器時代の石器 (5) ……25
第16図　太子林・先土器時代の石器 (6) ……26
第17図　太子林・先土器時代の石器 (7) ……27
第18図　太子林・先土器時代の石器 (8) ……28
第19図　太子林・先土器時代の石器 (9) ……29
第20図　太子林・先土器時代の石器 (10) ……30
第21図　太子林・先土器時代の石器 (11) ……31
第22図　太子林・先土器時代の石器 (12) ……32
第23図　太子林・先土器時代の石器 (13) ……33
第24図　太子林・先土器時代の石器 (14) ……34
第25図　太子林・先土器時代の石器 (15) ……35
第26図　太子林・先土器時代の石器 (16) ……36
第27図　太子林・先土器時代の石器 (17) ……37
第28図　太子林・先土器時代の石器 (18) ……38
第29図　太子林・第Ⅰ群遺物分布図……40

第30図　太子林・遺物分布図……41
第31図　太子林・第Ⅰ群（A・B－2グリット）遺物分布図……43
第32図　太子林・第Ⅰ群（C・D－2グリット）遺物分布図……44
第33図　太子林・第Ⅱ群遺物分布図……45
第34図　太子林・第Ⅱ群遺物分布図……46
第35図　太子林・第Ⅲ群遺物分布図……48
第36図　太子林・B－9グリット遺物分布図……49
第37図　太子林・C－2グリット出土同一母岩分布図……50
第38図　太子林・第Ⅰ群個体別資料分布図……51
第39図　太子林・個体別資料（1）……54
第40図　太子林・個体別資料（2）……55
第41図　太子林・個体別資料（3）……56
第42図　太子林・個体別資料（4）……57
第43図　太子林・個体別資料（5）……58
第44図　太子林・個体別資料（6）……59
第45図　太子林・個体別資料（7）……60
第46図　太子林・個体別資料（8）……61
第47図　太子林・縄文時代土坑実測図……64
第48図　太子林・縄文時代前期の土器（1）……65
第49図　太子林・縄文時代前期の土器（2）……66
第50図　太子林・縄文時代前期の土器（3）……67
第51図　太子林・縄文時代の石器……68
第52図　関　沢・先土器時代の石器（1）……75
第53図　関　沢・先土器時代の石器（2）……76
第54図　関　沢・先土器時代の石器（3）……77
第55図　関　沢・先土器時代の石器（4）……78
第56図　関　沢・遺物分布図……79
第57図　関　沢・主要石器分布図……81
第58図　先土器時代刃部磨製石斧出土遺跡とタイプⅡの刃部磨製石斧……86
第59図　関沢ユニット・類別分布概念図……89

表　目　次

第1表　飯山地方の先土器時代遺跡地名表……7
第2表　太子林・先土器時代石器計測表（1）……68
第3表　太子林・先土器時代石器計測表（2）……69
第4表　太子林・先土器時代石器計測表（3）……69
第5表　太子林・先土器時代石器計測表（4）……70
第6表　太子林・先土器時代石器計測表（5）……70
第7表　太子林・先土器時代石器計測表（6）……71
第8表　太子林・先土器時代石器計測表（7）……71
第9表　太子林・先土器時代石器計測表（8）……72
第10表　太子林・先土器時代石器計測表（9）……72
第11表　関　沢・先土器時代石器計測表（1）……82
第12表　関　沢・先土器時代石器計測表（2）……82
第13表　関　沢・先土器時代石器計測表（3）……83

図　版　目　次

図版 一　太子林遺跡　遺跡遠景・調査区
図版 二　太子林遺跡　調査風景・層序
図版 三　太子林遺跡（調査風景）
図版 四　太子林遺跡　第Ⅰ群
図版 五　太子林遺跡（第Ⅰ群）遺物出土状態
図版 六　太子林遺跡　第Ⅱ群・第Ⅲ群
図版 七　太子林遺跡第Ⅰ群・第Ⅱ群・第Ⅲ群　遺物出土状態
図版 八　太子林遺跡（遺物）
図版 九　太子林遺跡（遺物）
図版 十　太子林遺跡（遺物）第Ⅰ群
図版十一　太子林遺跡（遺物）第Ⅱ・Ⅲ群
図版十二　関沢遺跡　遺跡近景・調査風景
図版十三　関沢遺跡　調査風景・A類，B類，礫群出土状態
図版十四　関沢遺跡　関沢ユニット・遺物出土状態

図版十五　関沢遺跡（遺物）

第Ⅰ章　遺跡とその環境

第１節　遺跡の地理的位置

太子林・関沢両遺跡は，長野県飯山市大字瑞穂地区に所在する（第１図）。

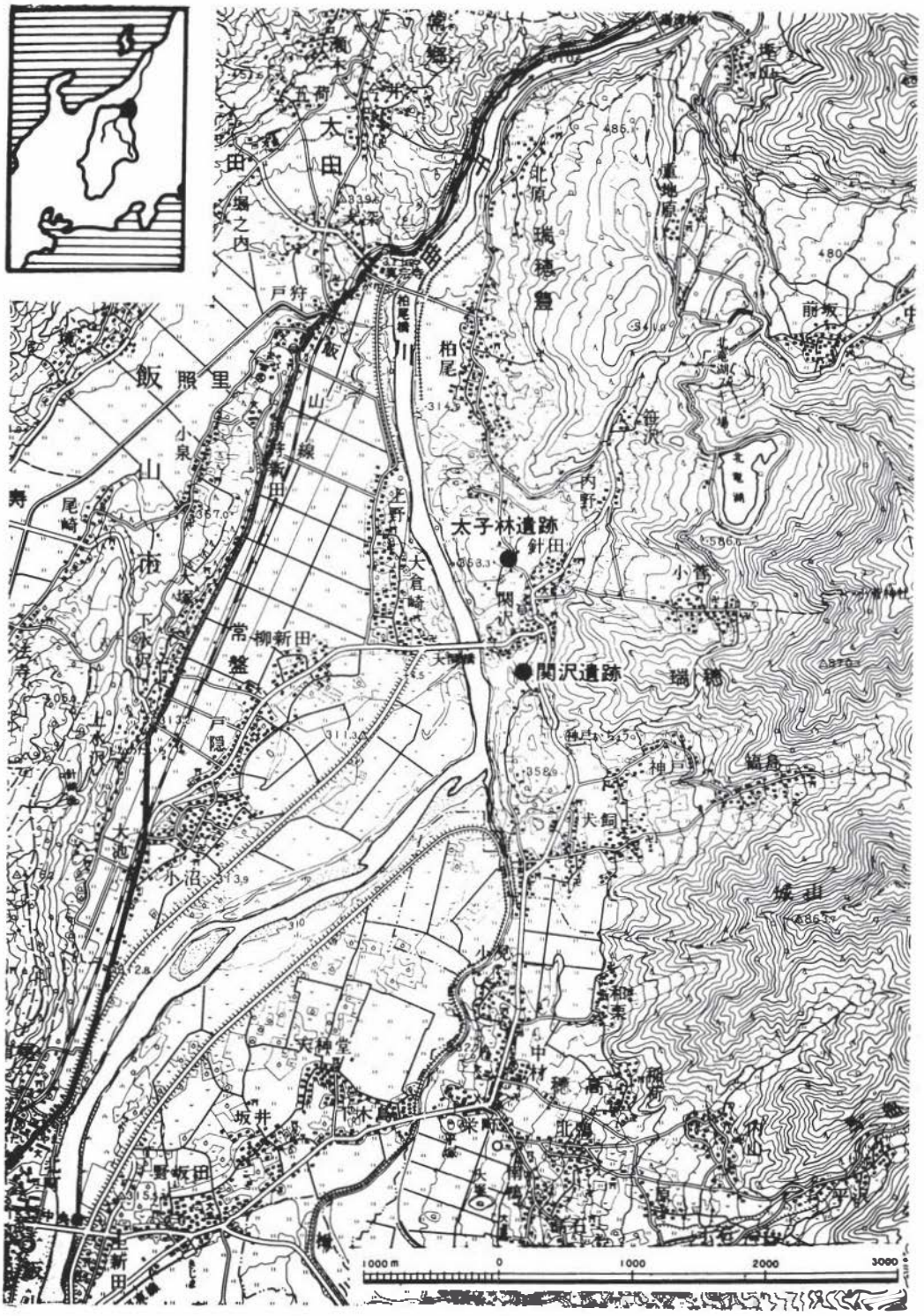
甲信国境に源を発する千曲川が信濃に残す最後の平が飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると千曲川は，信越国境の狭谷地帯を下刻曲流しつつ新潟県津南町に至り，ここで信濃川と名を改めいわゆる津南段丘群を形成しやがて日本海に注ぐ。

飯山盆地西縁は，黒岩山（938.6m），鍋倉山（1288.8m）等比較的低い関田山脈によって画されている。ここには越後へ通ずる幾つかの峠道が存在している。一方，東縁は毛無山（1640.98m）等三国山脈の支脈によって，また断層構造線の横走によって急峻な山地で画されている。平地は，盆地のほぼ中央を流れる千曲川によって東西に二分される。西側は，飯山市街地北方より戸狩地区にいたる長さ７㎞に及ぶ長峰丘陵を介在させて常盤平・外様平が広がり，当地方最大の穀倉地帯となっている。東側は，その南半にかつての千曲川氾濫原である木島平が広がるが，千曲川が東縁に近接するにしたがって，段丘・丘陵等の微高地が開析谷を隔てて連続的に連なるという複雑な地貌を呈している。そしてこれらの微高地上には幾多の遺跡が存在している。太子林・関沢両遺跡もこの微高地上に立地している。

飯山盆地は，第三紀水成層を基盤とし，褶曲構造によって形成されている。すなわち，西側の関田山脈，盆地中央の長峰丘陵が背斜部に相当し，常盤平・外様平が向斜部となる。太子林・関沢両遺跡対岸の上野・大倉崎丘陵も褶曲構造の背斜部に相当し（中村 1962），両遺跡が所在する瑞穂地区とは千曲川の下刻により分断されたと考えられる（第２図）。この褶曲運動によって形成された背斜部は，特に河東地区において逆に侵食され新旧の段丘形成が行なわれている。新期の千曲川河岸段丘面をあわせるとおおよそ３段に分かれる。

太子林遺跡は，千曲川を間において上野・大倉崎丘陵と対応する上位段丘面に立地する。この段丘は，東・南を千曲川に流入する江川によって開析が進み，ほぼ独立した丘陵を呈す。遺跡はこの低湿地を望む丘陵頂部から南傾斜面の広範囲に及ぶものと思われる。ただ頂部付近は，昭和２年の村営グランド造成により削平されてしまっている。

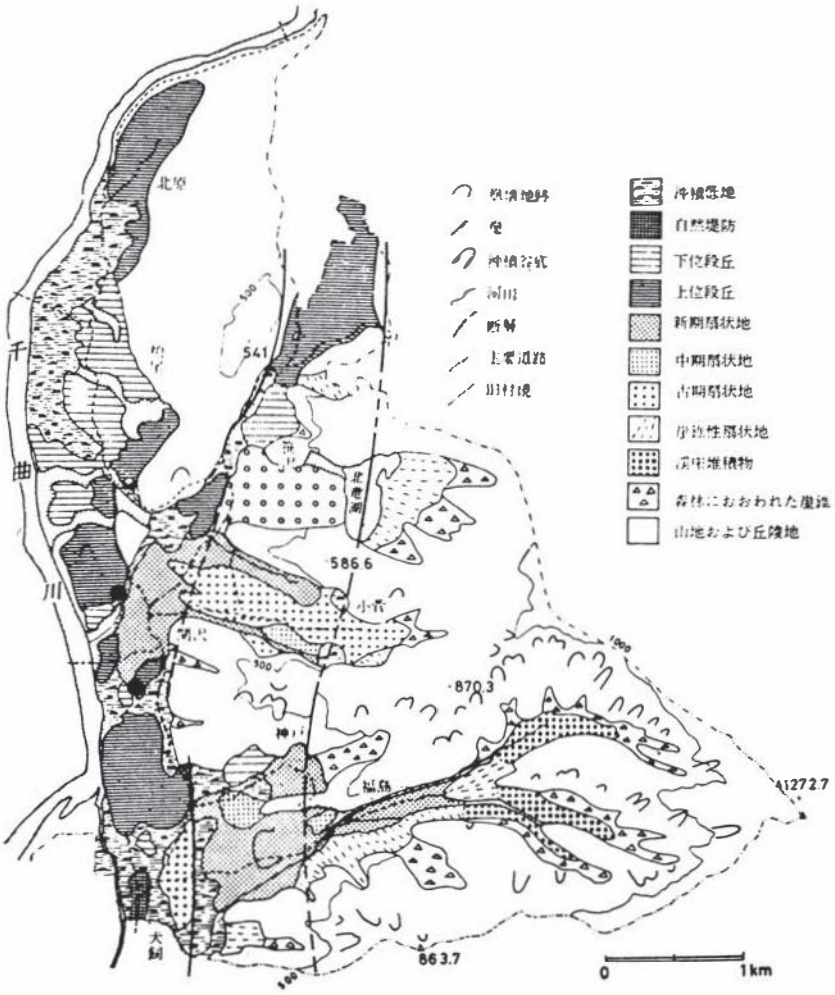
関沢遺跡は，前記太子林遺跡の南方約1.5㎞に位置する。大まかには，南側の宮中丘陵から太子林遺跡の丘陵まで同一面と考えられるが，それぞれ開析されて独立した丘陵とな



第1図　遺跡位置図（1:50,000）

っている。関沢遺跡が所在する丘陵は，西側の千曲川河岸に下位段丘面が形成され，本丘陵間には南北に細長い谷状地が入り込んでいる。さらに，太子林の丘陵と関沢遺跡が立地する丘陵間には，もうひとつの瘤状の残丘が認められる。

この瘤状残丘と大倉崎間には大関橋が架かり，県道小沼～関沢線が通っている。



第２図　地形分類図（小泉・1979より）

第2節　周辺の遺跡

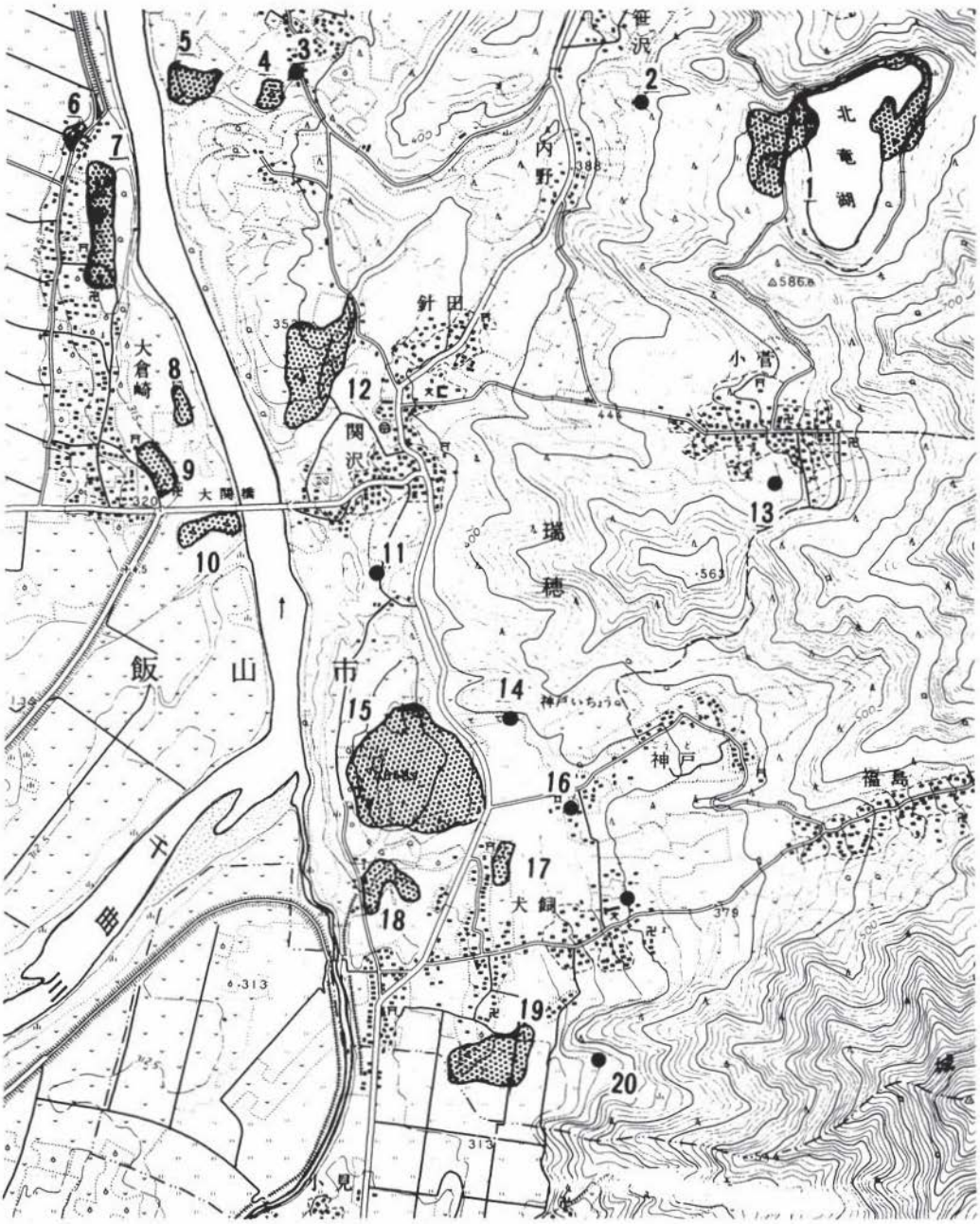
太子林・関沢両遺跡が所在する飯山市瑞穂地区及び対岸の上野・大倉崎丘陵上には先土器時代から縄文時代にかけての遺跡が多く存在する（第3図）。これは当初より恰好の居住環境を呈していたためと思われる（高橋・1980）。東側に山地を控え，湧水を集めたいくつかの小河川が微高地を開析して長流千曲川に注ぐ。この自然環境が先土器時代及び縄文時代遺跡の立地と密接に関係し合ったのであろう。

先土器時代遺跡は上野・瀬付・日焼・内野・北竜湖・千苅・城ノ前等がある。詳細については次節で触れることにする。次の縄文時代には，昭和48年に発掘調査を実施した縄文前期の大倉崎遺跡（高橋・金井・中島・1976），昭和54年発掘調査の縄文後期の宮中遺跡（高橋・1979，1980）等が挙げられる。宮中遺跡は推定90000㎡に及ぶ広大な遺跡であるが，市道開設に伴い2000㎡の部分調査によって石棺状遺構23基，配石等が出土し特に注目を集めた遺跡である。その他，上ノ原遺跡は縄文中期前葉の土器が多量に出土しており，該期の文化を究明するのに欠かせない資料となっている。

このように，先土器時代，縄文時代に密集した遺物分布も弥生時代になると存在が明確でない。これは，初期の水稲耕作を営むに足る地理的条件が充分でなかったためと考えてよいであろう。ただ，弥生中期の特徴的な石器である太型蛤刃石斧が採集されているので全く弥生文化の浸透が認められなかった訳けではない。古墳時代に至ると狐塚古墳が存在しており，古墳文化の浸透が行なわれたことを明確に裏付けている。そしてこの古墳は，今回の調査時における周辺踏査によって古墳が新発見されるまでは飯山盆地東半における古墳の北限とされていた（小野・1953）。新知見の古墳は，太子林遺跡の北方約300ｍの丘陵頂部にある。太子林遺跡の所在する丘陵より一段高い面である。古墳は現在のところ二基発見しているが，形状等については今後の測量調査に待ちたいと思う。

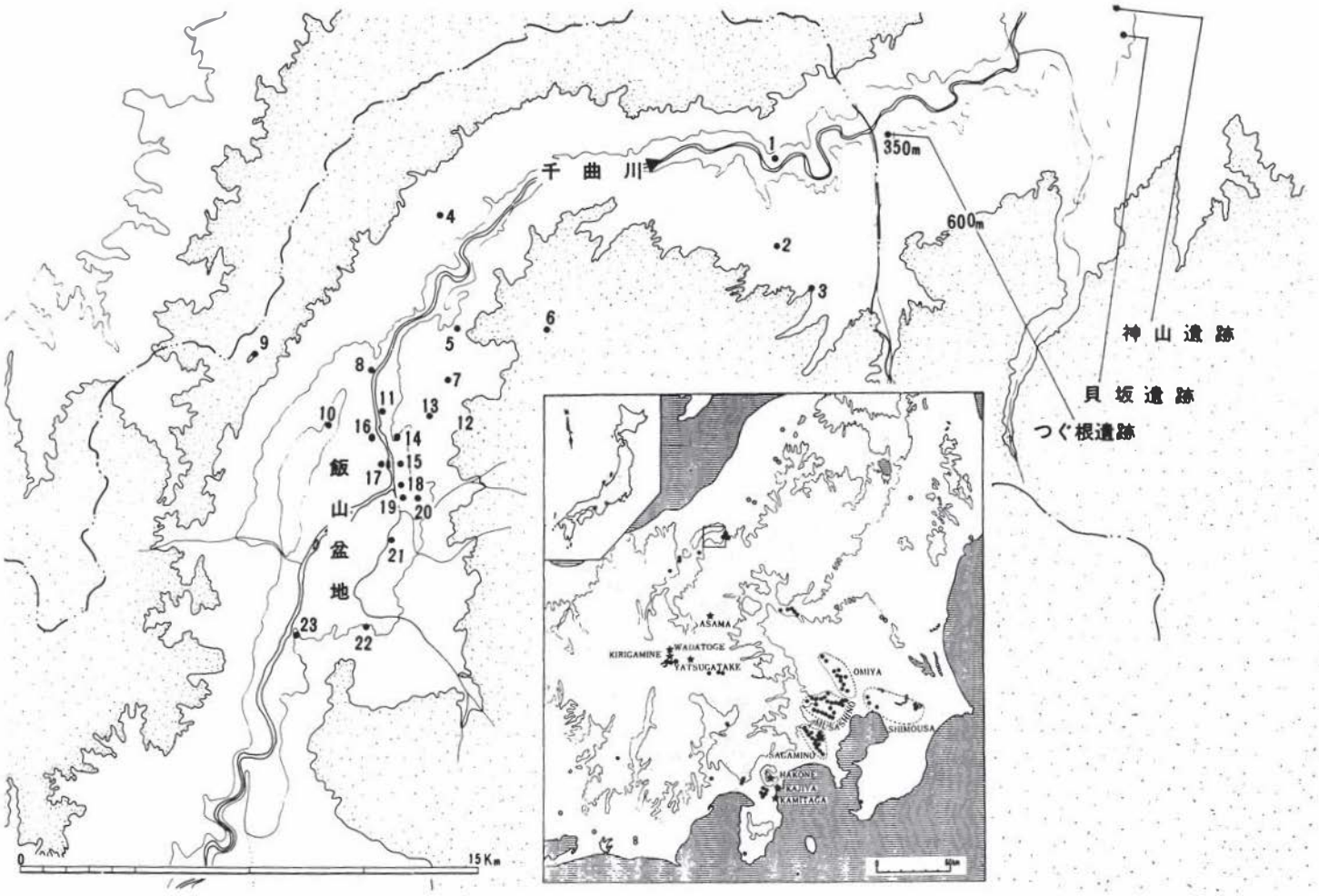
第3節　飯山地方の先土器時代遺跡

当地方における先土器時代遺跡の研究は，昭和32年，故神田五六・永峰光一両氏等によって発掘調査が行なわれた横倉遺跡からである（神田・永峰，1958）。翌33年には栄村小坂遺跡の調査が行なわれ（高橋・1963），いわゆる小坂型彫刻刀のタイプサイトとして脚光を浴びるようになった。さらに隣接する新潟県津南地方における神山・樽ノ木平・貝坂等の遺跡が調査され，先土器時代遺跡の密集地として古くから研究フィールドの対象とされてきた。



第3図　周辺遺跡分布図（1:25,000）

1.北竜湖遺跡　2.内野遺跡　3.堺沢遺跡　4.南原遺跡　5.日焼遺跡　6.上野(II)遺跡　7.上野遺跡　8.大倉崎(II)遺跡　9.大倉崎遺跡　10.瀬付遺跡　11.関沢遺跡　12.太子林遺跡　13.南竜湖遺跡　14.狐塚古墳　15.宮中遺跡　16.猿飼田遺跡　17.城ノ前遺跡　18.千苅遺跡　19.尾崎遺跡　20.北和栗遺跡



第4図　飯山地方の先土器時代遺跡

No.	遺跡名	遺物 ●…発掘 ○…表面採集						主要文献
		ナイフ	彫器	掻器	尖頭器	細石刃	その他	
1	横倉				●			神田・永峰・1958
2	小坂	●	●	●	●		●	高橋・1963 橋ほか・1976
3	天代トド				○			飯山北高等学校地歴部OB会・1977
4	オリハンザ					○		信濃史料
5	坪山				○			〃
6	上ノ平				○			野沢温泉村史・1978
7	重地原						○	飯山北高等学校地歴部OB会・1977
8	真宗寺裏	○					○	〃
9	桂池							〃
10	大塚		○			○	○	〃
11	日焼	○	○	○			○	新編瑞穂村誌・1979
12	北竜湖				○	○	○	〃
13	内野			○			○	
14	太子林	●	●	●			●	本報告
15	関沢			●	●		●	本報告
16	上野		○	○			○	
17	瀬附	○					○	信濃史料
18	宮中					○		新編瑞穂村誌・1979
19	千苅	○	○	○	○	○	○	〃
20	城ノ前				○			〃
21	小見				○		○	木島平村史・1980
22	山岸			○	○			
23	安田神社境内					○		信濃史料

第1表　飯山地方の先土器時代遺跡地名表

また，飯山盆地内については，信濃史料刊行時には安田神社境内，瀬附のみであったのが，昭和45年より開始された飯山北高地歴部の現地踏査によって新発見の遺跡が急増する結果となった（第４図・第１表)。これについては既に触れているとおりであるが（高橋ほか・1976)，各遺跡について若干触れることにする。

すべて表面採集に基づくために各遺跡の性格を解明するには至っていないが，多量の石器類が採集されている遺跡は，大塚・日焼・千苅などが挙げられる。大塚遺跡は飯山盆地の中央に存在する長峰丘陵上に立地し，石刃石核・彫刻刀・石刃などがあり，石材には安山岩，頁岩が主に用いられている（註１)。日焼遺跡は千曲川の河岸段丘上に位置し，ナイフ形石器，掻器，石刃石核などが多量に採集されている。特に石刃石核は黒曜石製で，打面調整の施された円錐形の見事なものである。また，千苅遺跡は前者二遺跡より新しい時期と考えられ，槍先形尖頭器，彫器，掻器，細石刃石核などがある。特に槍先形尖頭器は約50点あり（註２)，興味ある文化内容を含んでいる。その他，山岸遺跡の黒曜石製の尖頭器，掻器，上野遺跡の掻器などは特記すべき遺物である。

註１　大原正義氏の御教示による。

註２　中島庄一氏の御教示による。

第II章　調査の概要

第１節　調査にいたる経緯

太子林遺跡が認知されたのは，昭和29年に刊行された「下高井」以後と思われる。続いて発刊された「信濃史料」第一巻地名表にも「関沢（太子林）」として勝坂式・加曽利E式・石鏃・磨製石斧・石皿等縄文中期の遺物を記載している。その後の踏査で，僅か１点ながら安山岩製の刃器状剥片を採集している（飯山北高地歴部ＯＢ会・1977)。

一方関沢遺跡は，昭和47年に飯山北高地歴部々員の踏査活動により黒曜石の細片を２点採集した事が発見の契機となった。ただこの時には僅かな点数であり，遺跡と認定するには資料不足の感があった。その後，昭和53年に至り地元在住の鈴木勘治氏が当該地籍より採集した３点の石器を高橋桂に提示した。その石器の中には槍先形尖頭器の未製品と思われるような石器も含まれており，いよいよ我々の注目する遺跡となったのである。

ちょうどこの頃，中野建設事務所は県道木島～野沢線の道路改良事業を計画し，両遺跡を通過する関沢バイパス建設が具体化された。市教育委員会は，県教育委員会文化課指導の下に，昭和53年９月28日市教育委員会教育長室において，県文化課関孝一指導主事，中野建設事務所，市教委の三者会談を行なった。この会議において事前に記録保存を行なう事となった。会議終了後現地調査を実施したのであるが，その結果，県文化課より昭和53年10月25日付で800㎡以上を調査することとし，その予算400万円の積算が提示された。

この経過をふまえ，昭和53年12月25日市文化財専門委員会に諮問したところ，調査は行なわなければならないが，昭和54年度は市内鍛冶田・宮中両遺跡の大規模な緊急発掘調査を予定しており日程上不可能であるので，翌55年度に実施するように答申があった。

昭和55年６月３日付で中野建設事務所より発掘調査の依頼があった。市教育委員会は６月20日に市文化財専門委員会を開催して調査会の編成・日程等を協議した結果，昭和56年３月までに全事業を終了させるには一刻も早く開始しなければ間に合わないということで発掘調査は７月６日より８月12日までの約35日間を予定とした。この会議で，団長を飯山北高等学校教諭で市文化財専門委員の高橋桂先生にお願いした。

７月３日，市役所において調査会役員会・結団式を開催し，調査会規約・日程等の説明を行ない了承された。

調査会組織は以下のとおりである。

調査会組織

顧　問	小野沢　静　夫	(飯山市長)
	望　月　　光	(飯山市公民館瑞穂分館長)
会　長	田　中　清市郎	(飯山市教育委員会教育長)
副会長	柳　　公　亨	(飯山市教育委員会教育次長)
理　事	佐　藤　政　男	(飯山市文化財専門委員)
	斉　藤　二　六	(　　〃　　)
	弓　削　春　穏	(　　〃　　)
	上　原　幸　夫	(　　〃　　)
	高　橋　　桂	(　　〃　　)
地区代表	阿　部　武　義	(飯山市議会議員)
	石　川　伝　治	(作業員責任者)
事務局	佐　藤　正　俊	(飯山市教育委員会社会教育係長)
	望　月　静　雄	(飯山市教育委員会嘱託)

○調査団

団　長	高　橋　　桂	(飯山北高等学校教諭)
調査員	松　沢　伸　一	(飯山市静問)
	荒　井　　宏	(長野大学学生)
	徳　竹　雅　之	(奈良大学学生)
	青　木　由美子	(長野経済短期大学学生)
	望　月　静　雄	(飯山市瑞穂豊)
調査補助員	飯山北高等学校地歴部 (黒岩隆・上屋英夫・栗岩良浩・斉藤毅)	

作業協力者・機関

石川伝治 (作業員責任者), 宮沢春信, 畔上信義, 大月孝治, 鷲野秀子, 吉越とみ, 山今朝治, 小林たを, 小林とき, 坂井忠義, 鈴木貞見, 阿藤みよ子, 岡本美由起, 山岸滝沢綾子, 中沢千治, 渡辺すえ

関沢区 (岡本悦区長), 針田区 (山岸今朝治区長), 鈴木勘治

教育委員会事務局 (平野富太郎, 青木剛, 松沢正喜, 木内三千雄, 高橋逸郎, 小林今井吉春, 山室茂孝)

第２節　調査の方法と経過

１．調査の方法

太子林遺跡　関沢バイパスの幅員は平均７ｍであるが，本遺跡を通過する箇所は急斜面であるために，設計図面では約25ｍの幅員が設けられてあった。

調査方法はグリット法とし，道路センター杭No.75，76をＸ軸，No.76杭を基点として直角に振ってＹ軸とし，５×５ｍのグリットを設定したが東隅ではＹ軸が４ｍとなってしまった。この基点はグリット番号のＢ―９西南隅である。Ｘ軸は南側の雑木林との境付近を１とし北側へ12と順次番号を付し，Ｙ軸は東側よりＡ～Ｆとした。

ＡラインはＹ軸が約３ｍで道路建設予定地東境界となるため，５×３ｍの変則グリットとなった。さらに，南側へ拡張することとなり，南側へはイ・ロ・ハ・ニとした。

関沢遺跡　当初は遺跡範囲外とも予測され，十分な計画を立てず，任意に三箇所へトレンチを設定した（第７図)。ところが第三トレンチより遺物が出土したため，改めてグリットを設定することとなった。調査区内にNo.30の建設用の杭が打たれてあり，この杭を基本として磯北にＸ軸を合わせ，直角に振ってＹ軸を設定した。このグリット規模も太子林遺跡同様５×５ ｍとした。

２．調査経過

調査は８月12日を終了の予定日とし，７月６日より着手したが，連日の雨のため思うように作業がはかどらず，７月13日頃よりようやく順調に進渉した。

Ｅ―９，10グリットより調査を進め，７月８日には縄文土器，黒曜石製のナイフ形石器等出土したが，縄文土器片と関係するような遺構の検出は認められなかった。しかし，先土器時代の剥片なども数点出土しているので縄文時代ばかりでなく先土器時代の遺物がかなり検出されるとの予測を得た。

７月13日からはＥ―２・３グリットにも着手し，Ⅲ層まで掘り下げながらＣ・Ｄ―２グリットへ進んだ。７月17日にはＤ―２グリット北西隅より刃部磨製石斧が出土した。さらに，７月24日までにＣ・Ｄ―２グリットよりスクレイパー等を含む約60点の石器が出土した。

このため２～12グリット間の全面を完掘することにした。全面的に掘り下げはじめ，しだいに石器の出土する地点をまとまりとして把えられるようになる。８月上旬に至り，縄文時代の遺構がほとんど認められないため，先土器時代の三箇所のまとまりを中心に調査

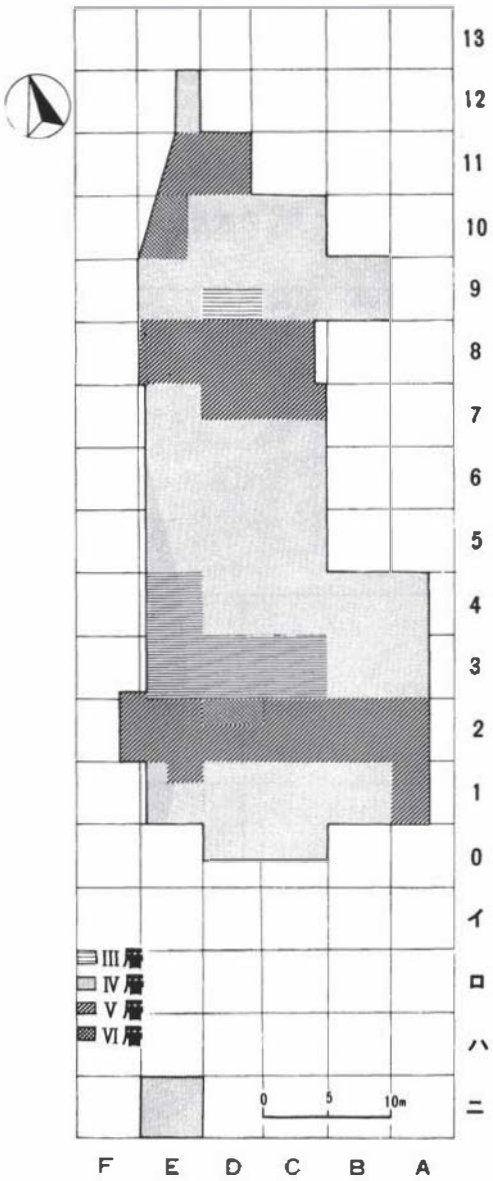
第5図　太子林・地形図及び発掘区

を進めた。この頃より土層実測を開始した。

8月6日より遺物の取り上げに入り，予定の12日までに終了するように努めたが，遺物量の多さと，新たに他のまとまりの箇所からも点数が増え，発掘終了予定日を8月26日に延期変更することにした。

8月13日～17日まで作業を休み，18日より調査区内の清査及び実測を行ない，調査終了に向け鋭意作業を進めた。19日より地形測量に入り，26日には小雨の中全体写真等を撮影し全作業を終了した。

関沢遺跡　本調査地区は昭和53年10月の現地踏査（県文化課・中野建設事務所・市教委）において遺跡地をバイパスが通過すると確認されていたが，昭和55年に入り設計図を実見したところ現地踏査時よりさらに西側の急傾斜となった水田地帯であることが判明した。したがって，遺跡範囲から外れるとの予想を持ち，太子林遺跡調査の目途がつき次第調査に取り掛かることにした。実際に調査に入ったのは8月25日であった。予定地区内において最も平坦な部分に三ヶ所のトレンチを入れた。(休耕)水田のため削平されている部分が多く，午前中は一点の出土もなかった。午後に至り，第三トレンチより槍先形尖頭器を含む先土器時代遺物がまとまって出土したため，一・二日の調



第6図　発掘区及び深度表

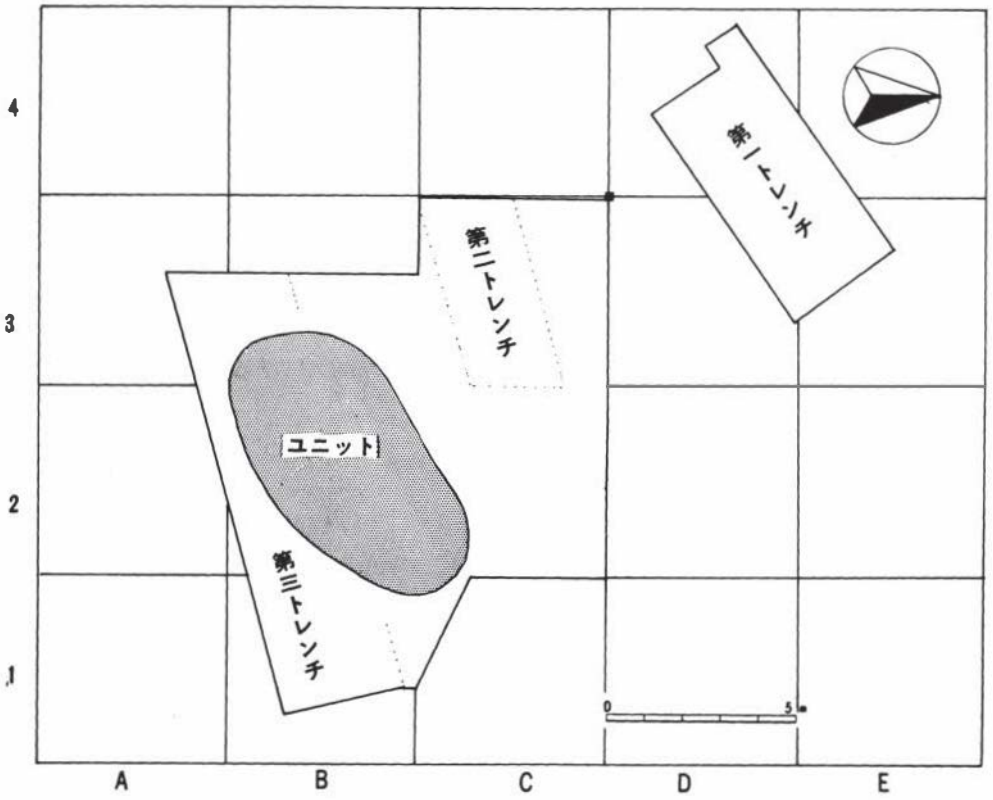
査では無理と考え，９月中旬に改めて調査することにした。すなわち，補遺調査は９月16日より19日まで行ないユニット一箇所を検出した。

以上，太子林・関沢両遺跡の調査は実働約45日で2000㎡以上に及ぶ面積を発掘し，次章に記すように多くの成果を挙げた。

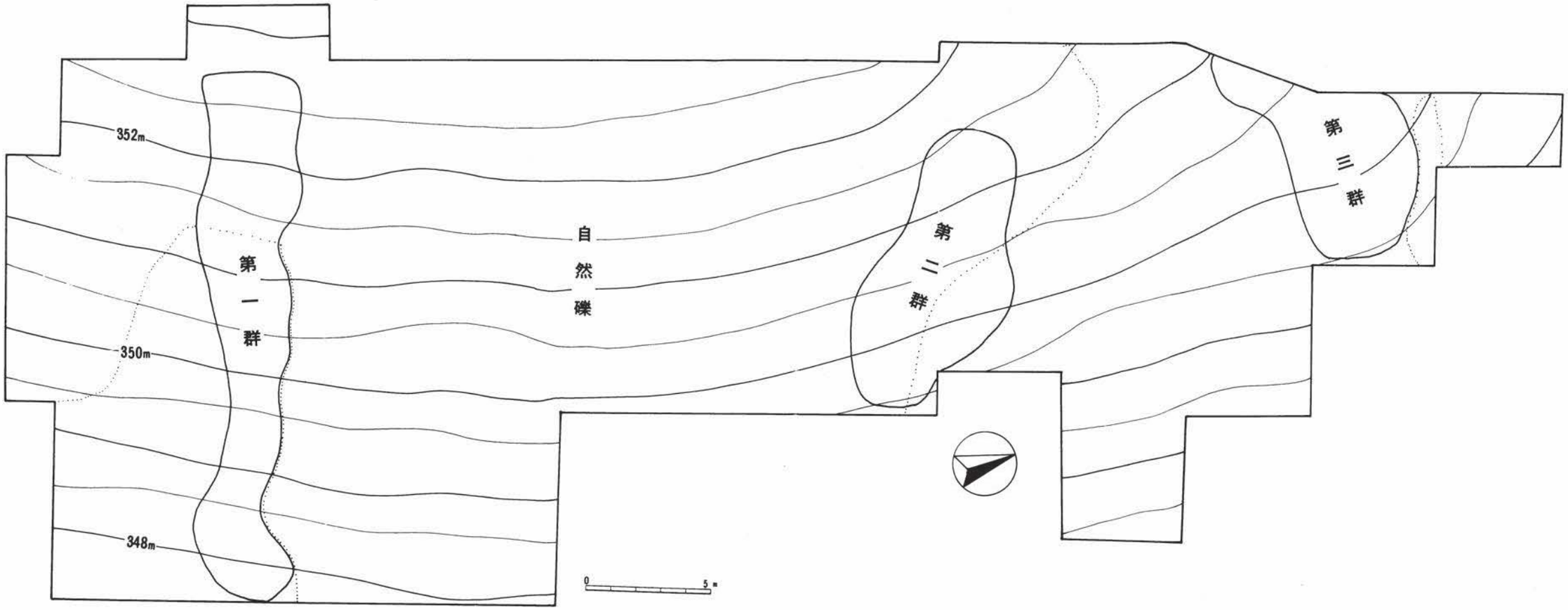
第３節　遺跡概観

１．太子林遺跡

遺跡の状況　丘陵の南半に広がる太子林遺跡は，丘陵頂部部分が既に削平され，遺跡の存在は明確でない。ただ，今回の調査区で遺物の発見があった事は当然丘頂部に存在していたものと考えるのが妥当である（第３図参照)。遺跡範囲は南側の緩斜面一帯に広がって



第７図　関沢・グリット設定図及び発掘区



第8図　太子林・Ⅳ層の微地形及び遺物分布概念図

おり，今回の調査区は中心部より外れ，東限地区と思われる。ただ，先土器時代の範囲は全く不明であって，今回の調査区からどのように拡がるかはわからない。

層序　土層の観察は，調査区西北地点E—10グリット西壁に深さ1.5mのモデルセクションを設けた。同時に土壌サンプルを採集した。

E—10グリットにおける層序は次のように観察された（第9図）。

I層（耕作土）　厚さ約20cm。耕作およびII層中部に達するアスパラの根による攪乱のため非常にもろく粘性の弱い黒褐色土である。

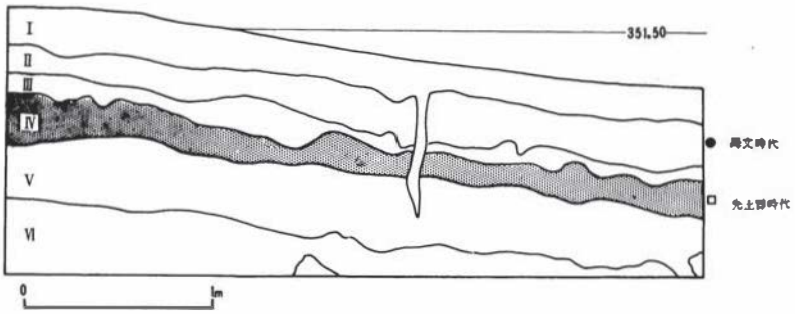
II層　厚さ約20～30cm。I層と同様耕作物のためもろいが，I層に比較して粘性は増す黒色土層。

III層　厚さ約5～10cm。II層とIV層との漸移層である。茶褐色土層。

IV層（ローム層1）　厚さ約20～30cm。粘性に富んだしまった褐色土。上部から下部に至るにしたがって硬度を増す。

V層（ローム層2）　厚さ約40cm以上。3cm程度の小礫と5mm程度の砂粒を含む。非常に粘性に富んだ褐色を呈す。強固でしまりは良好で，乾燥するとクラックが認められる。下部に至っては礫層中の大形礫の上面が入り込んでいる。

当地方におけるテフラ層についてはほとんど解明されていないのが現状である。本遺跡



第9図　太子林・層序（E—10グリット西壁）

第10図　関沢・層序（B—2グリット西壁）

周辺の供給火山は毛無山，飯縄山，妙高山等多くあるが，本地域において分層，堆積時期については一切明らかでない。

文化層

本遺跡からは，有尾式に比定される縄文前期土器片・石器と刃器技法をもつ先土器時代の石器類が多数出土した。両時代を通して遺構はII層中より掘り込まれる縄文前期の土坑が一基発見されたのみであった。まず有尾式に比定される縄文土器については，II層を中心にI・II層から出土し，III層からの出土はなかった。土坑以外からの出土状態は散在的であって集中するような傾向は認められなかった。

先土器時代の遺物については，平面的に三箇所の石器群集中区が確認された。出土層序は，III層からIV層下部にかけてのレベル幅約30cmにかけて出土している。特にIV層中面に最もまとまっており，V層からの出土はなく，III層からの出土も小さな比率である。したがって，IV層を先土器時代の一時期における文化層と考えて差し支えあるまい。さらに，遺物が最も多く集中したIV層中面付近が生活面であると推定することができよう。このことは，三箇所の石器群集中区すべて同様であることから，層序的には同一時期と考えられる。

2．関沢遺跡

遺跡の状況　調査に至る経緯でも触れているように，最近になってようやく確認された遺跡であった。これは，比較的良好に包蔵されていたからにほかならない。なだらかな丘陵頂部付近は畑地，墓地となっており，やや傾斜を増す縁辺は小さな水田が階段状に並ぶ。調査区は丘陵南側斜面で，南側へは緩く，西側には急崖となって小規模な開析地に臨む地区であって，先土器時代遺跡立地には最も適している場所である。現況は休耕田であり，遺物の散布は認められなかった。遺跡の範囲は，前記状況のため不明確であるが，この調査区を中心として拡がるものであろう。

層序・文化層

関沢遺跡の土層堆積状況は，大局的には太子林遺跡と同様である（第10図）。

ただ，水田であったためにIII層が消失している箇所もあり遺物分布に多少の影響があったのかもしれない。文化層はIV層最上部からIII層にかけて一枚のものと思われる。礫群はIV層最上部において同一レベルの出土であって in stiu の状態と考えて良いだろう。なおI′層は水田床土であり，褐色を呈している。

第Ⅲ章　太子林遺跡

第１節　先土器時代

太子林遺跡の先土器時代資料は第Ⅳ層を中心とする一枚の文化層より検出された。

１．遺物

遺物は総数約600点である。種類は，原石（母岩），石核，剥片，二次加工を施した石器，加工を施さない礫石器に大分類される。剥片には石核調整にかかわる剥片と目的剥片に分類されるが，分類が難しい資料もある。二次加工を施した石器にも幾つかの形態がある。さらに礫石器には，ハンマー・台石・焼け石等の形式がある。本稿では二次加工を施した石器をA，原石・加工を施さない礫石器をB，石核をC，剥片をDとして以下に概述したい。なお，計測は第２表～第10表に示した。

A

ナイフ形石器（第11図１～６）

僅か６点ながら形態差によってさらに分類される。

ａ形……中形の刃器状剥片を用い，素材を大きく変形させることなく，基部・先端部に細部調整を施すもの（１，２，３，６）。いずれも両設打面を有する石核より得られた縦長剥片を素材とする。

ｂ形……比較的小形の縦長剥片を素材とし，斜めに折断するようにブランティングを施して，先端を尖頭状に仕上げたもの（４，５）。４は，正面左側縁には鋭い縁辺をそのまま残し，基部側には細部調整が施される。さらに離面側には平坦な調整剥離を施して薄くしている。第一次剥離のバルブは先端側にあり，約半分ほど折り取られている。５は，４とほぼ同様の形態であるがやや小形である。

掻器（第11図７，８，10．第12図11）

本石器も数量的には少ないが形態によって二形式に分かれる。

ａ形……円形で，一端のみでなく周縁にも刃部が作出するもの（７）。素材は目的外の剥片を用いている可能性がある。また，８は折損品であり全形を窺い得ないが，本形式に属するものかもしれない。

ｂ形……縦長剥片の先端部に刃部を作出したいわゆるエンド・スクレイパーである（10・11）。10は刃部が三回の細部調整によって作出されているが，ナイフ形石器のブランティ

ングと技術的に変わりなく，掻器として良いのか若干の疑問を残す。11は先端部に自然面を残すが，簡単な細部加工により掻器に仕上げている。

彫器（第11図9，第12図12，第39図114A）

石器の一端にファシットを有するものを一括した。9は細部調整が先端部のみに施される。加工方法は，離側より二・三回行なった後，正面側より急斜な加工が施される。さらに離面には数回の細部調整が施され，そのうちの一条の剥離が縁辺を約45°の角度でファシット状に走っている。当初は掻器として考えたが，刃部作出過程とは考えられないので本石器に含めた。12も一般的なグレイバーと異なる。ファシットは図中上部より縁辺に直交する角度で作出される。両縁辺にはブランティングに近い手法で調整が施されている。114Aは残核を利用した石器と思われる。本例も9例と同様分類が難しかった資料である。二次加工の工程は，正面左側縁に細部加工を施し，スクレイパーの刃部を作出したように見受けられるが，離面下端より縁辺中央付近までファシットが入っており，スクレイパー様刃部が半分除去されている。形状は角状彫器に類似する。

錐（第12図13・14）

二点出土している。13は不定形な剥片を利用している。刃部は両縁辺よりノッチ状に二次加工を施して作出する。14は縦長剥片を素材とし，先端部に細部調整を施して刃部を作出している。左縁辺には小剥離痕が認められる。

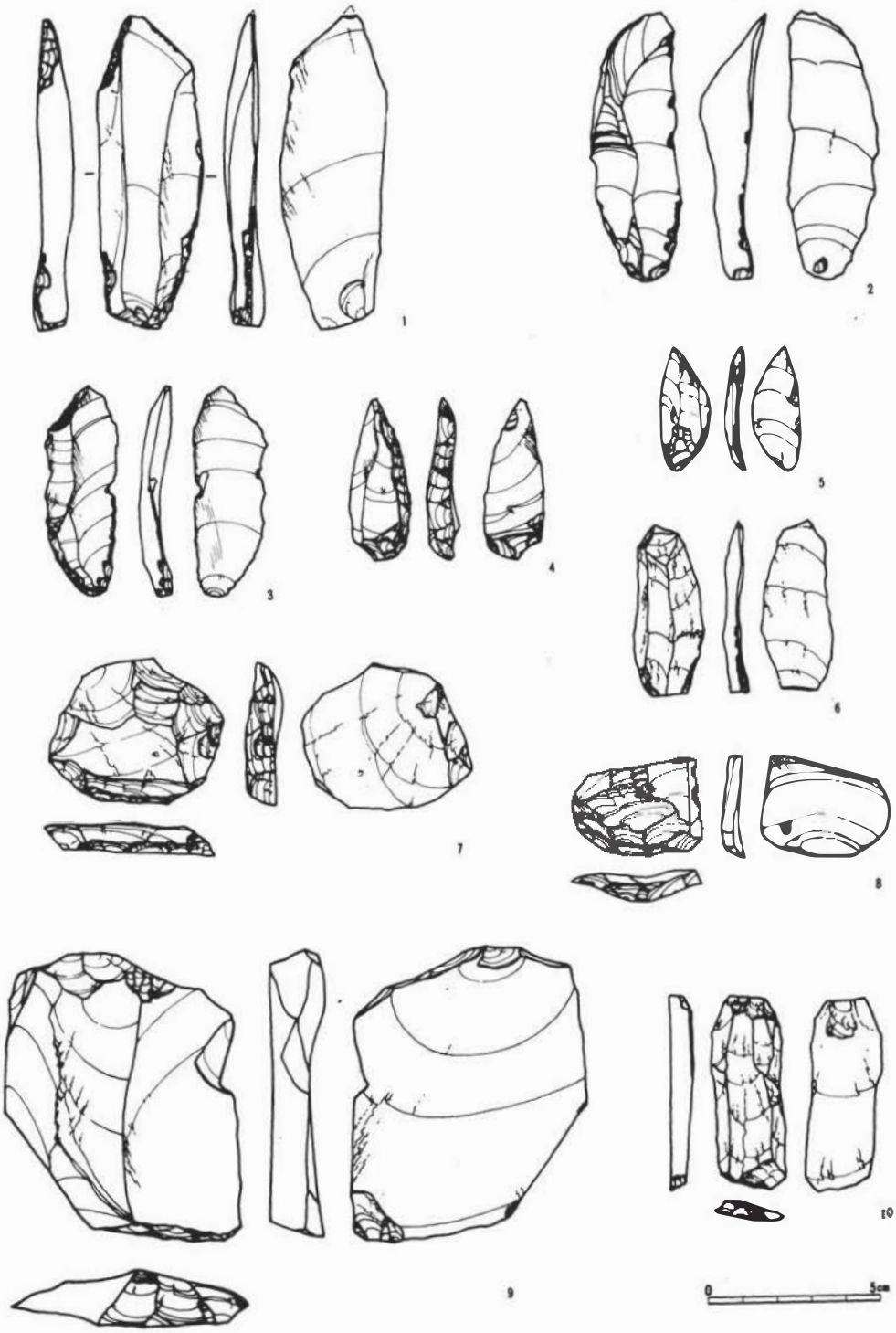
石斧（第13図15・16）

a．刃部磨製石斧（15）　刃部が丁寧に磨かれるいわゆる局部磨製石斧である。正面頭部に僅かな自然面を残すが，他は全面に調整が施される。刃部は両刃で，やや丸味を帯びる刃部形態をとる。表・離面ともに平坦な加工が施され，偏平な面となっている。磨製部分は刃部を中心として行なわれているが，離面は若干高まった中央部分にもわずかに認められる。

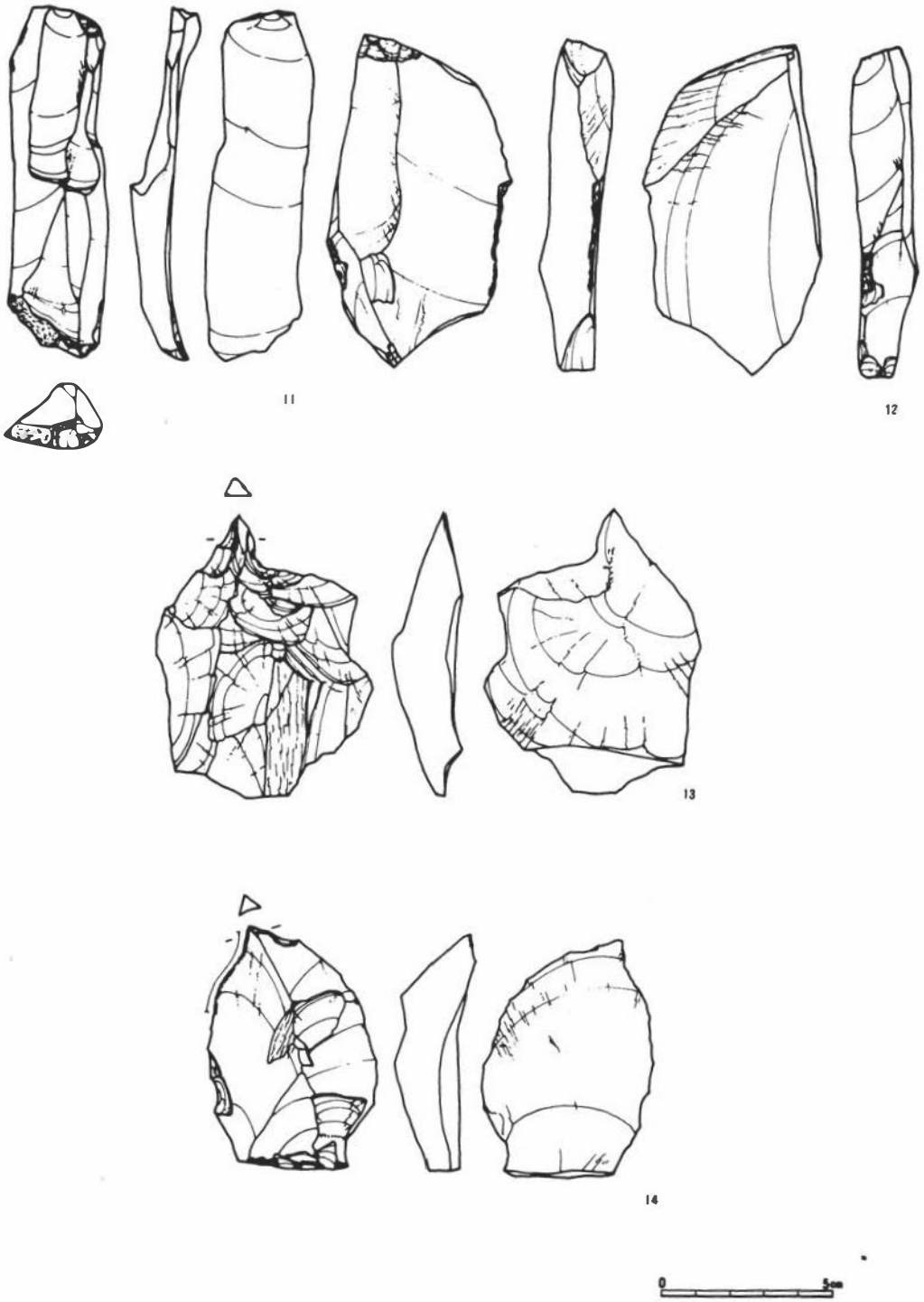
b形，打製石斧（16）　15例と同様に蛇紋岩を素材とするが，同一母岩ではない。正面側にはほとんど二次加工を施されず，もっぱら離面に集中する。正面左縁辺には節離面があり折損も考えられるが，離面の二次加工を観察する限りには，ほぼ完形品と思われる。刃部は使用のためか潰れている。

B（第14図～第16図）

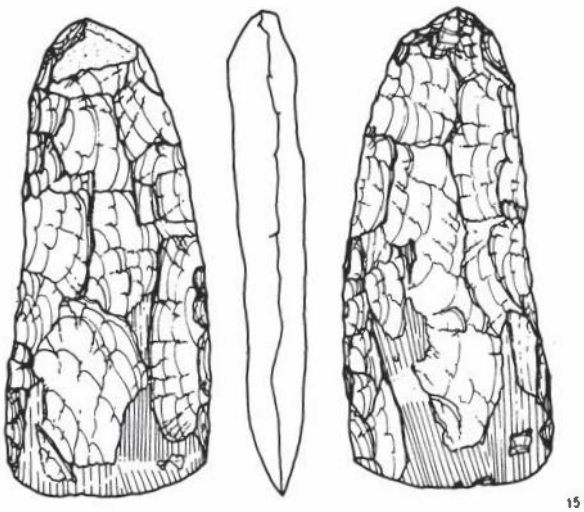
B種類には台石（17），ハンマー（18，21，22），搬入石材（19，20），焼け石（23，24）の形式がある。台石には図示し得なかったが大形の扁平礫が2点出土している。焼け石とし

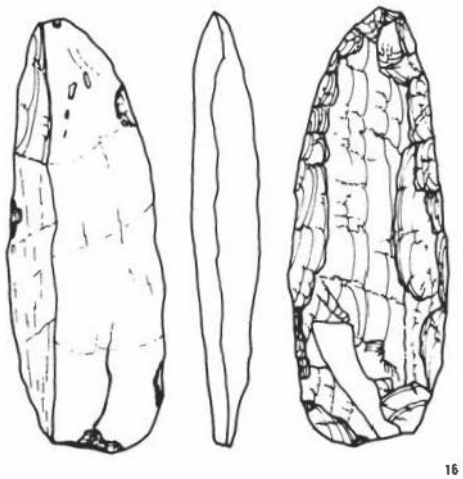


第11図　太子林・先土器時代の石器 (1) 1/2



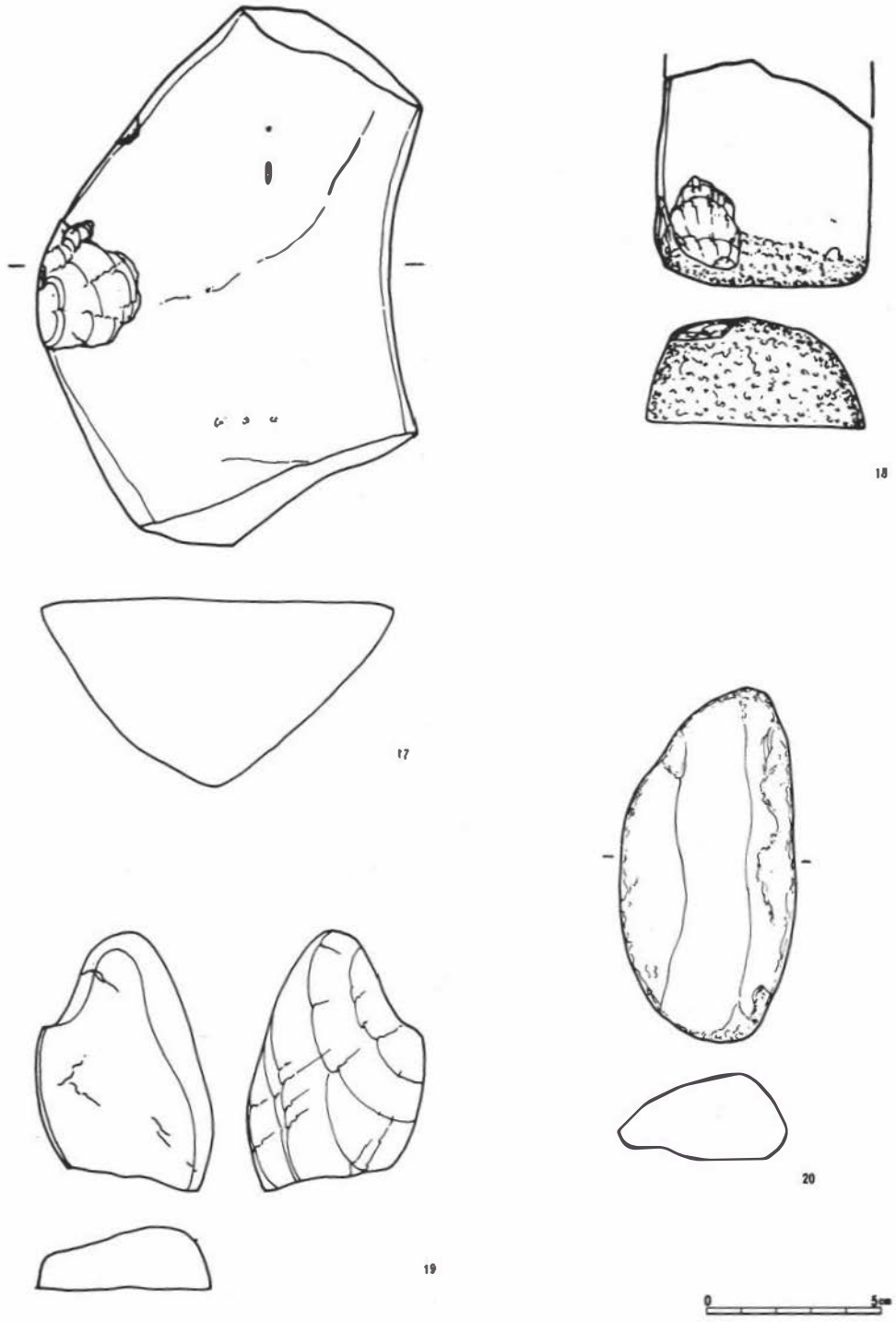
第12図　太子林・先土器時代の石器 (2) 1/2



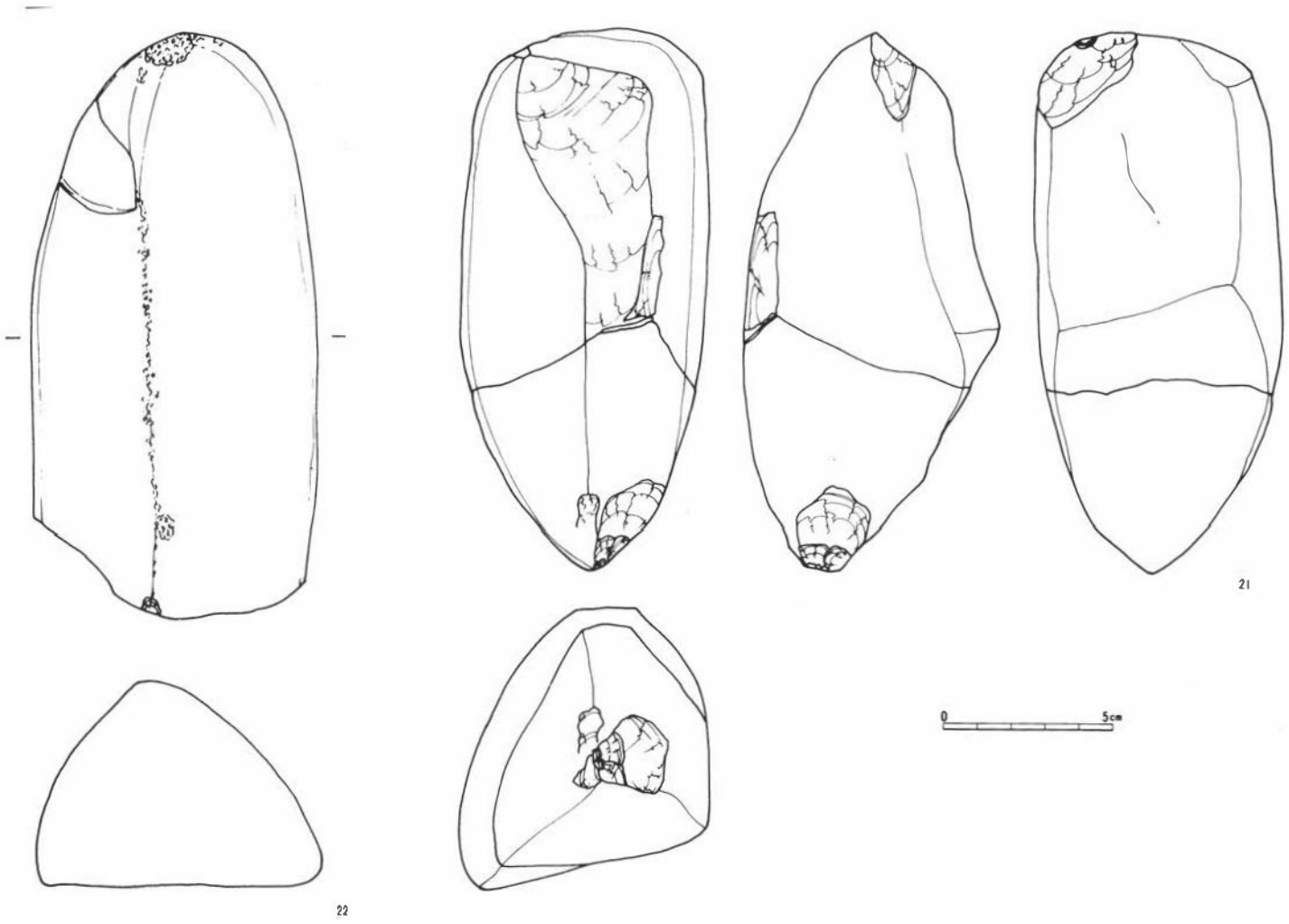


第13図　太子林・先土器時代の石器 (3) 1/2

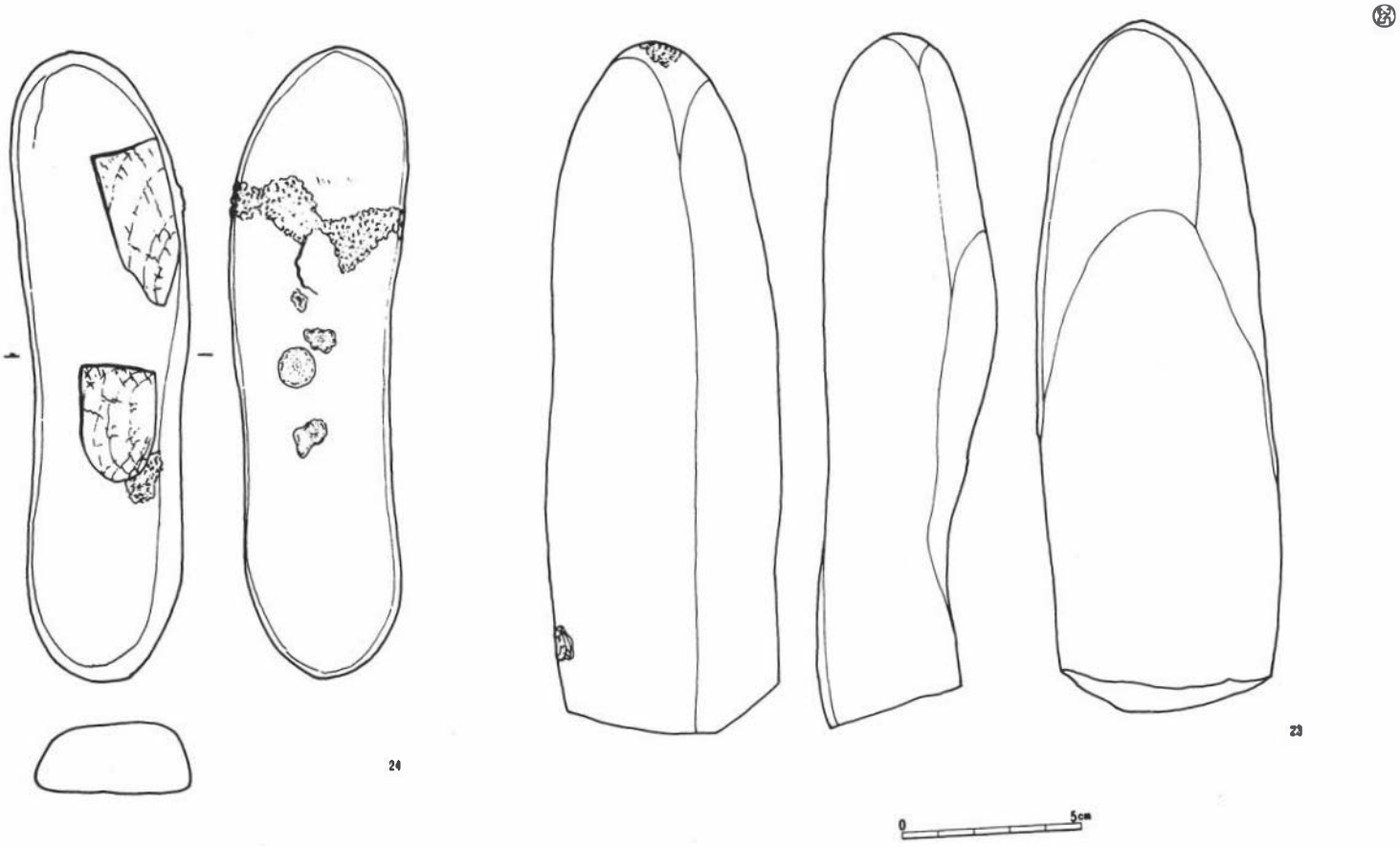
㉔



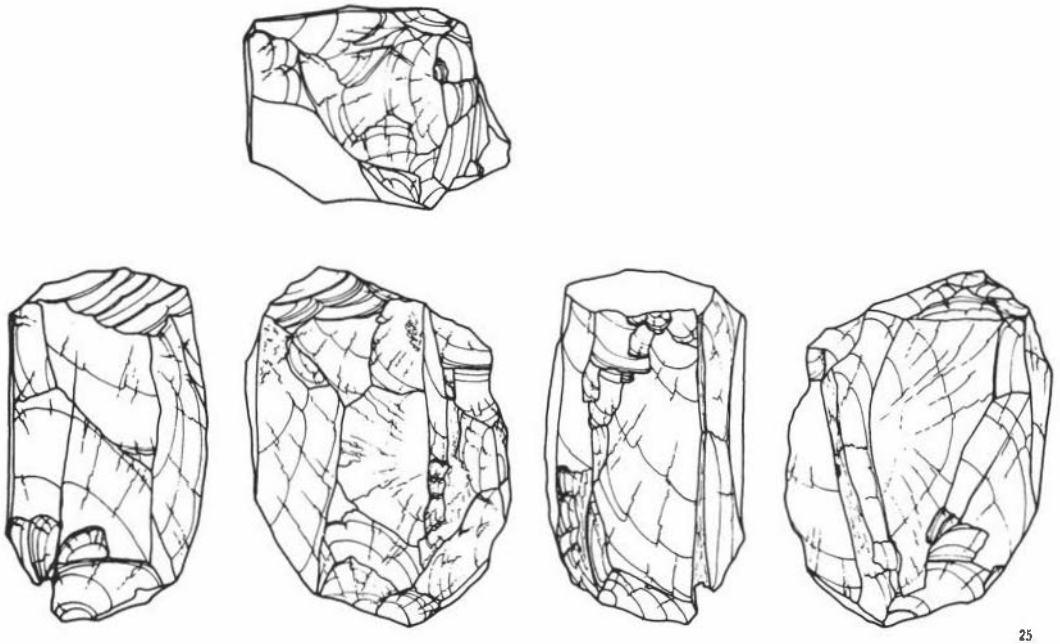
第14図　太子林・先土器時代の石器 (4) 1/2

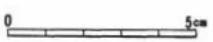


第15図　太子林・先土器時代の石器 (5) 1/2

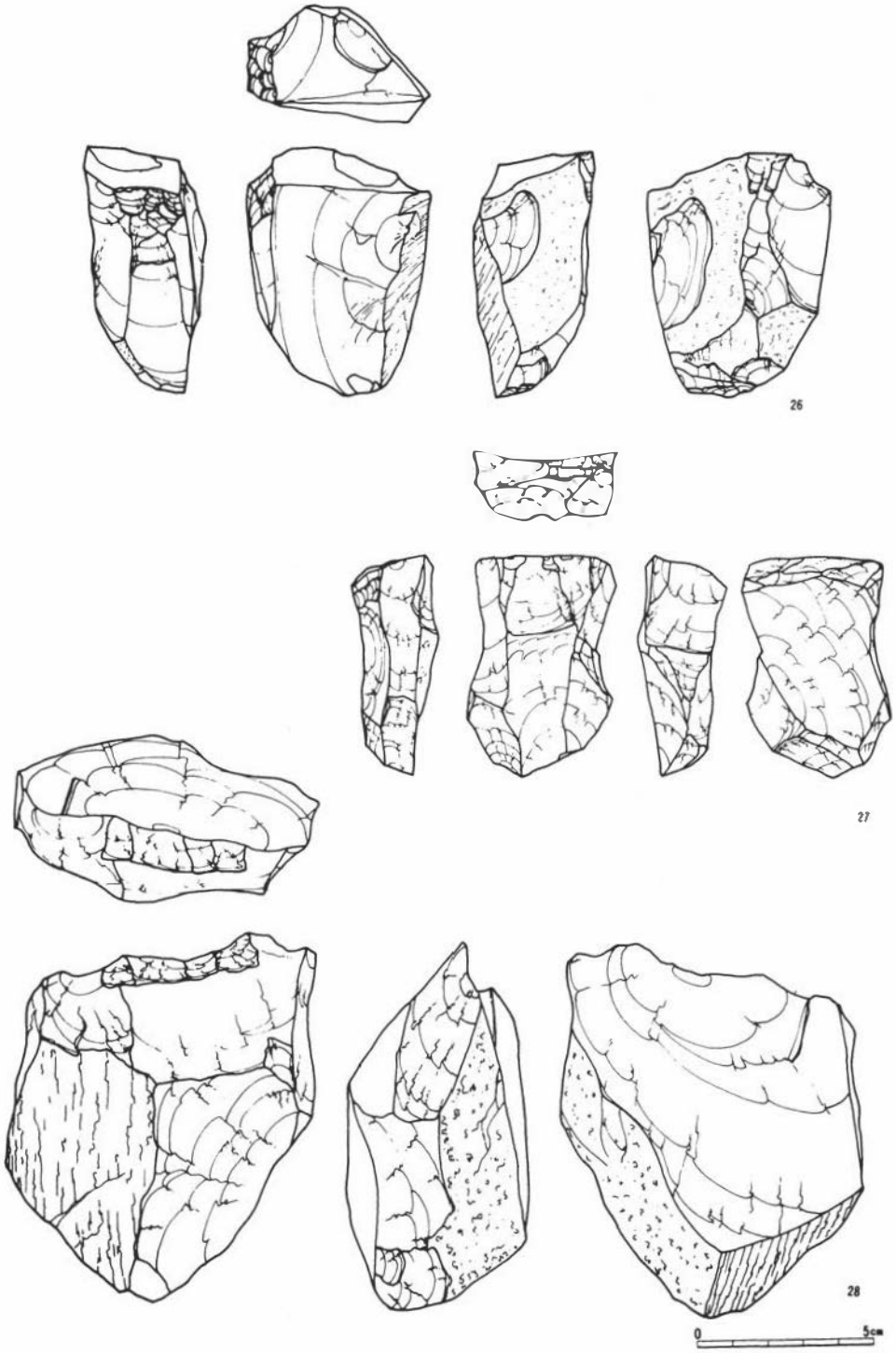


第16図　太子林・先土器時代の石器 (6) 1/2

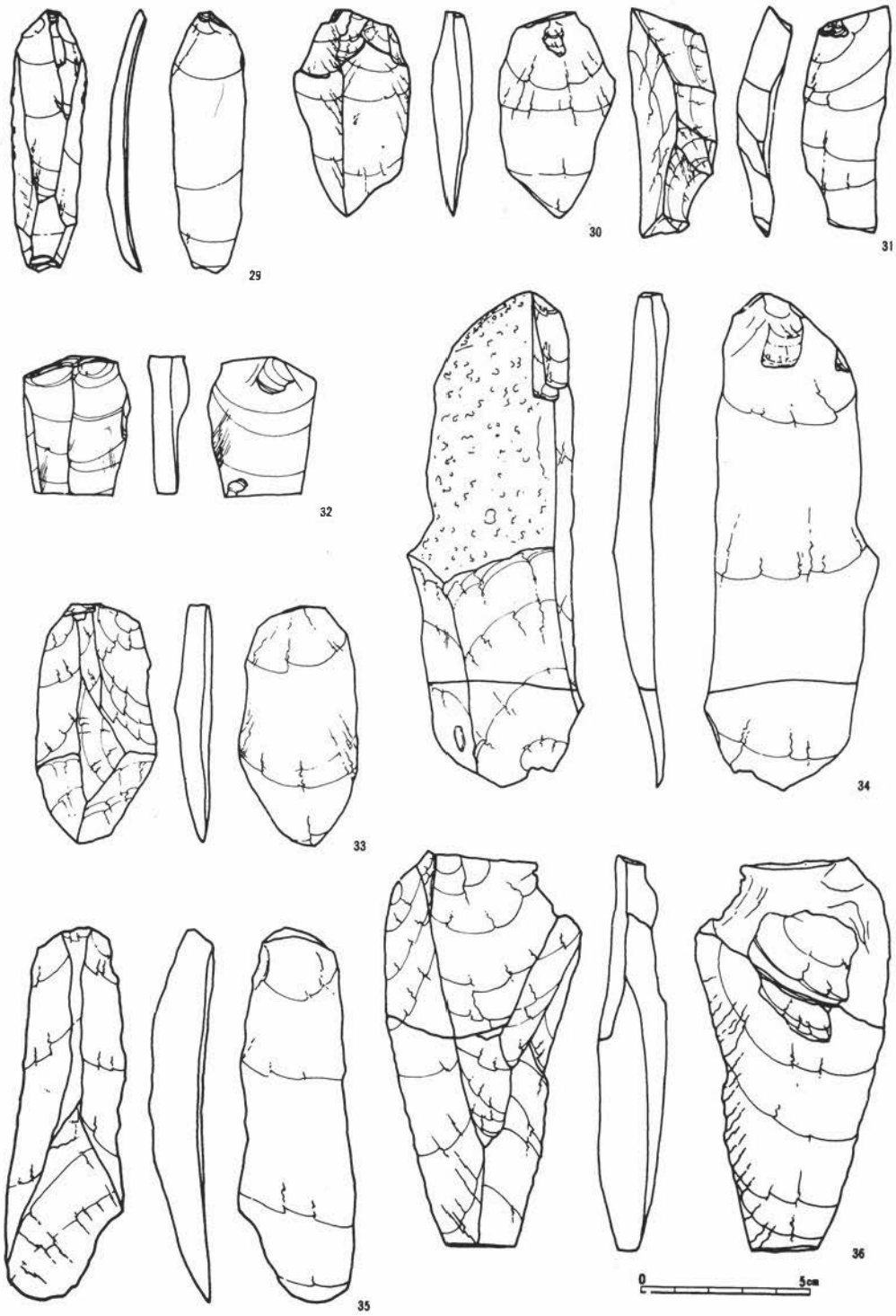




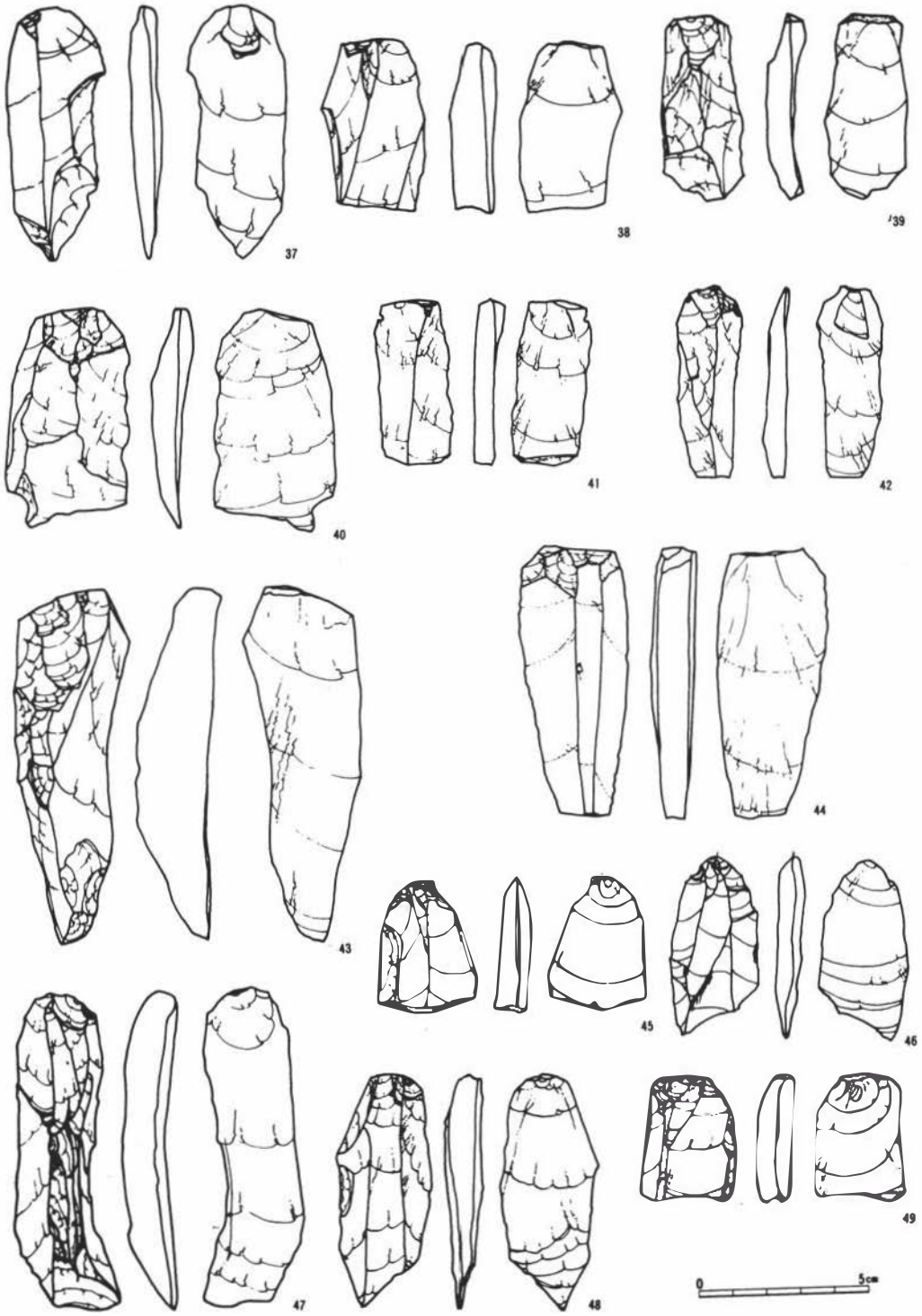
第17図　太子林・先土器時代の石器 (7) 1/2



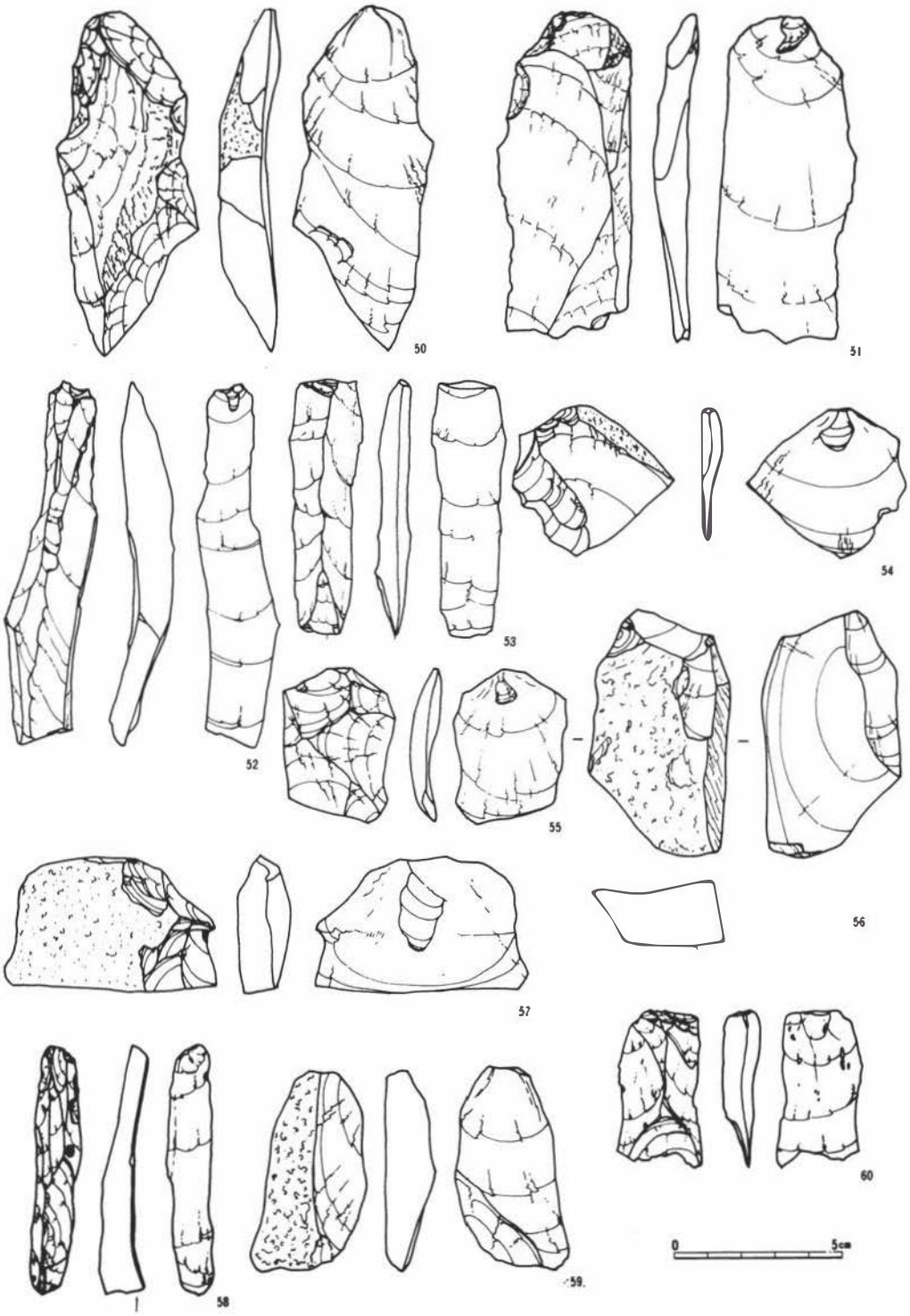
第18図　太子林・先土器時代の石器 (8) 1/2



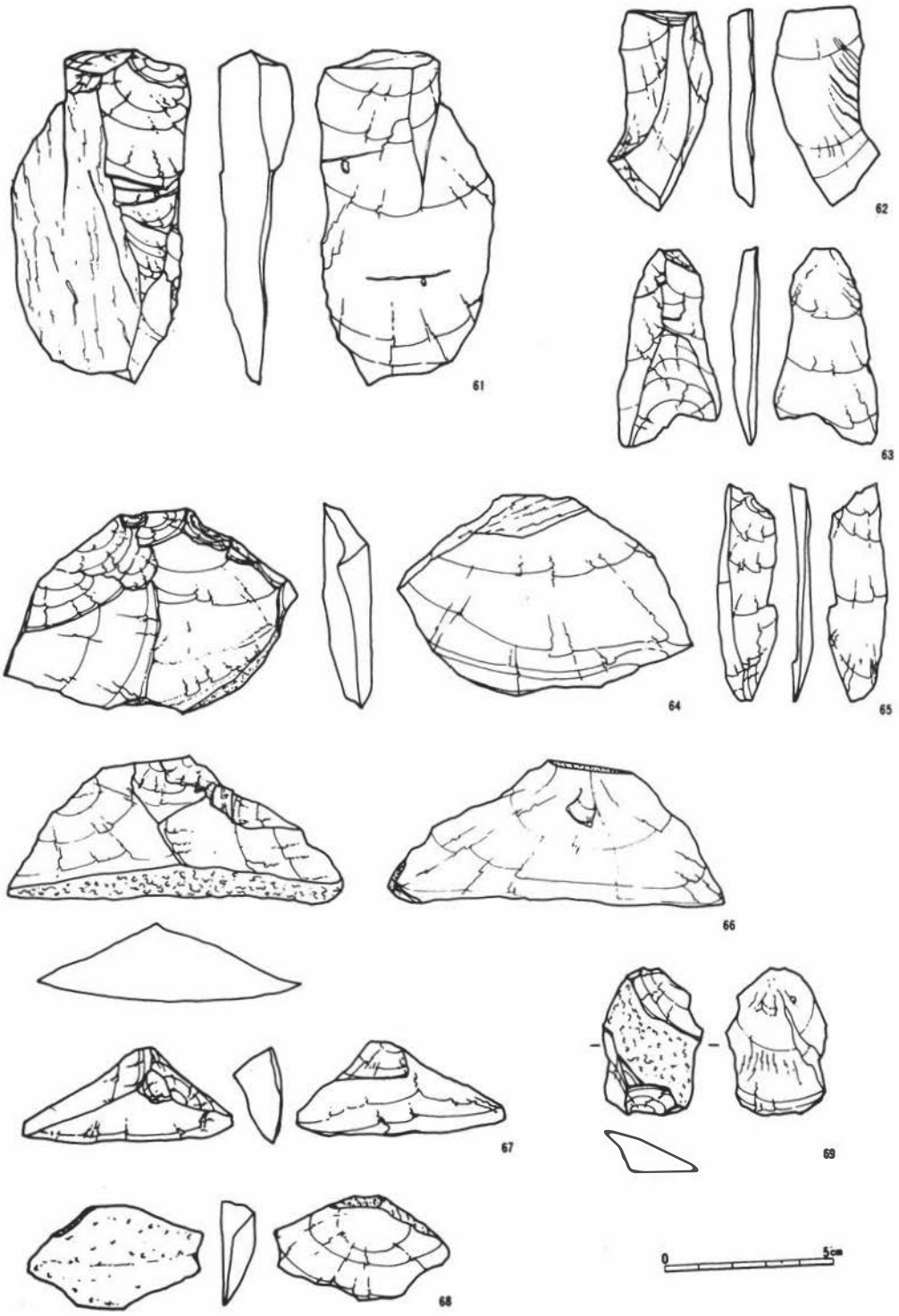
第19図　太子林・先土器時代の石器 (9) 1/2



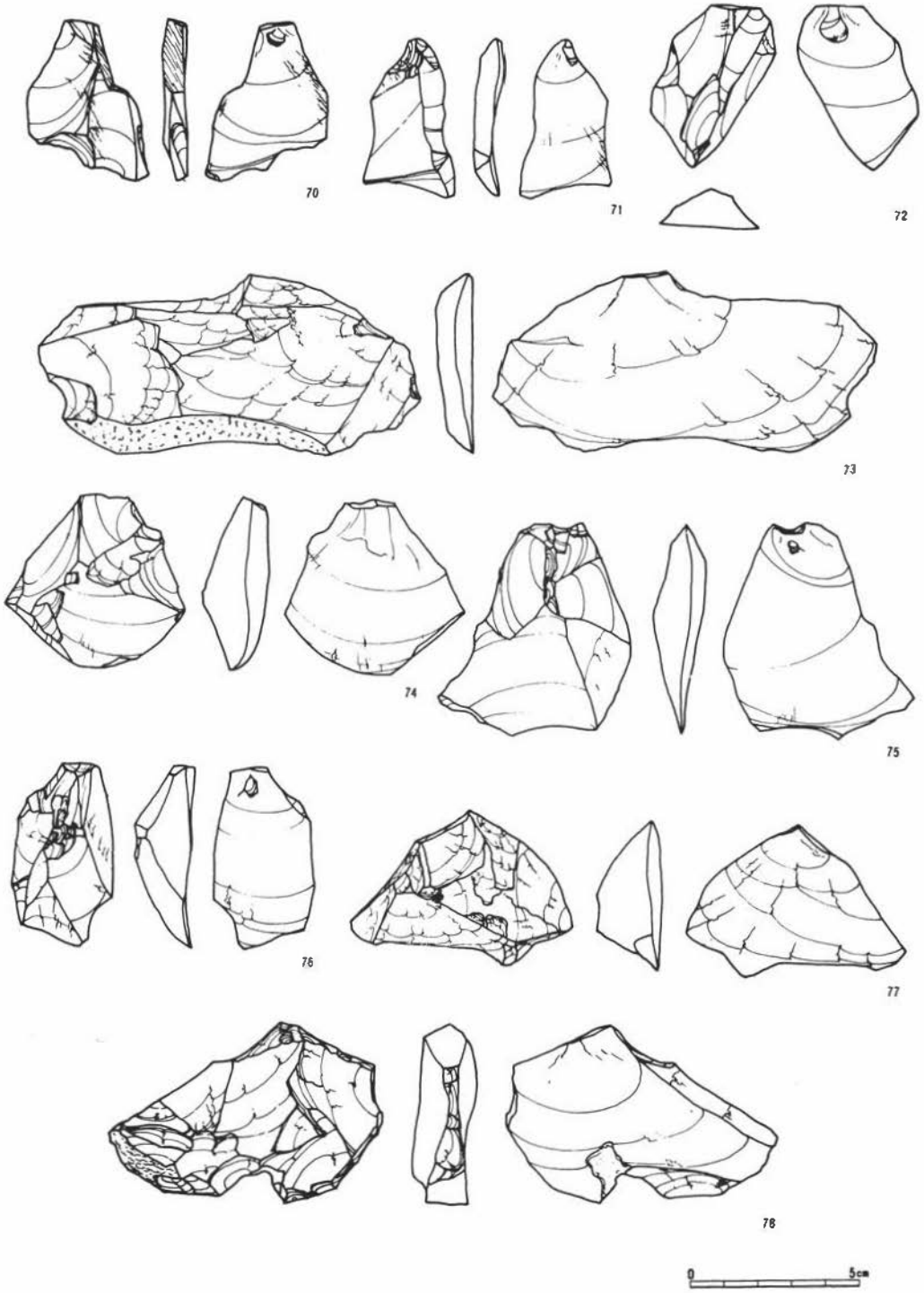
第20図　太子林・先土器時代の石器 (10) 1/2



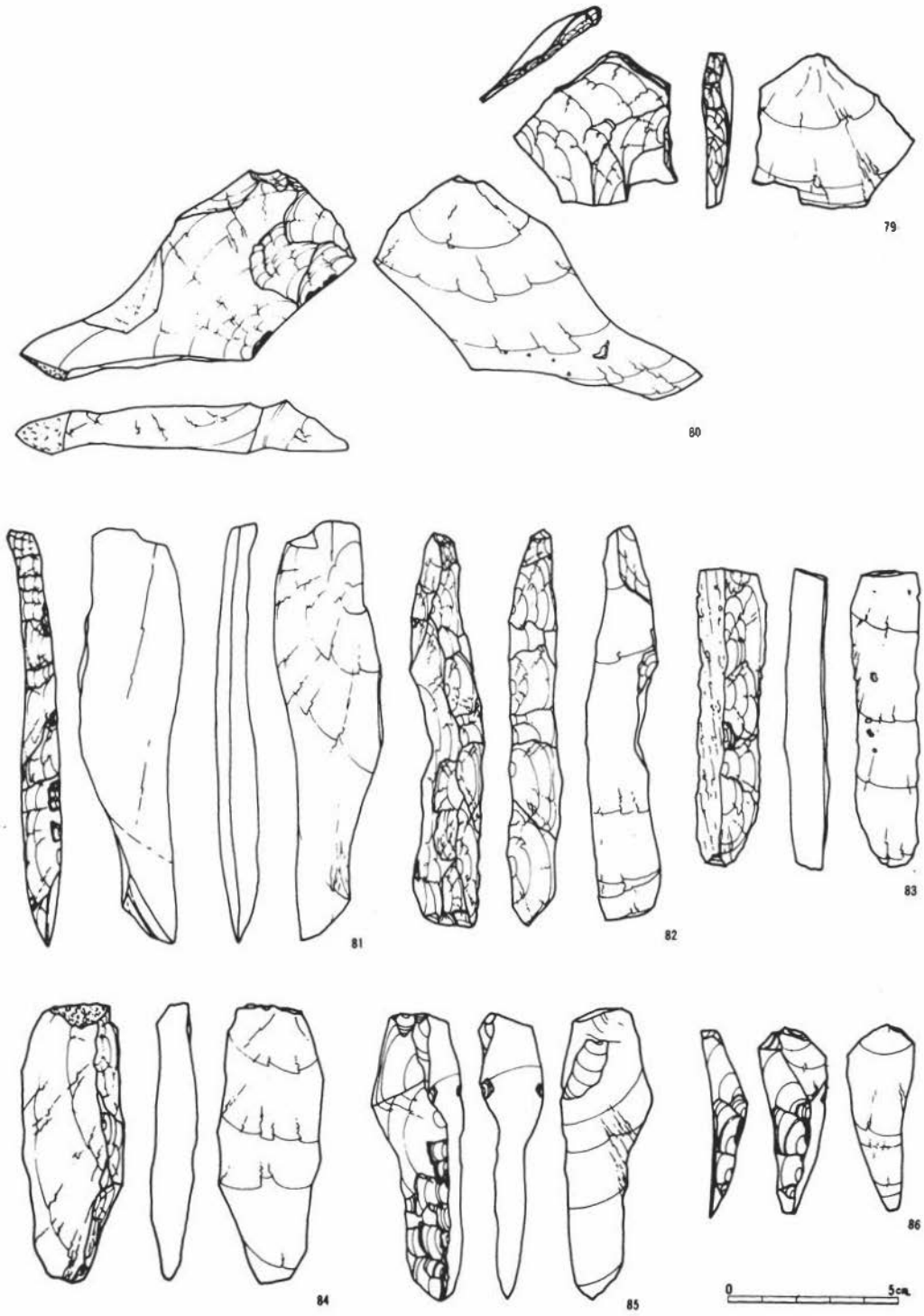
第21図　太子林・先土器時代の石器 (11) 1/2



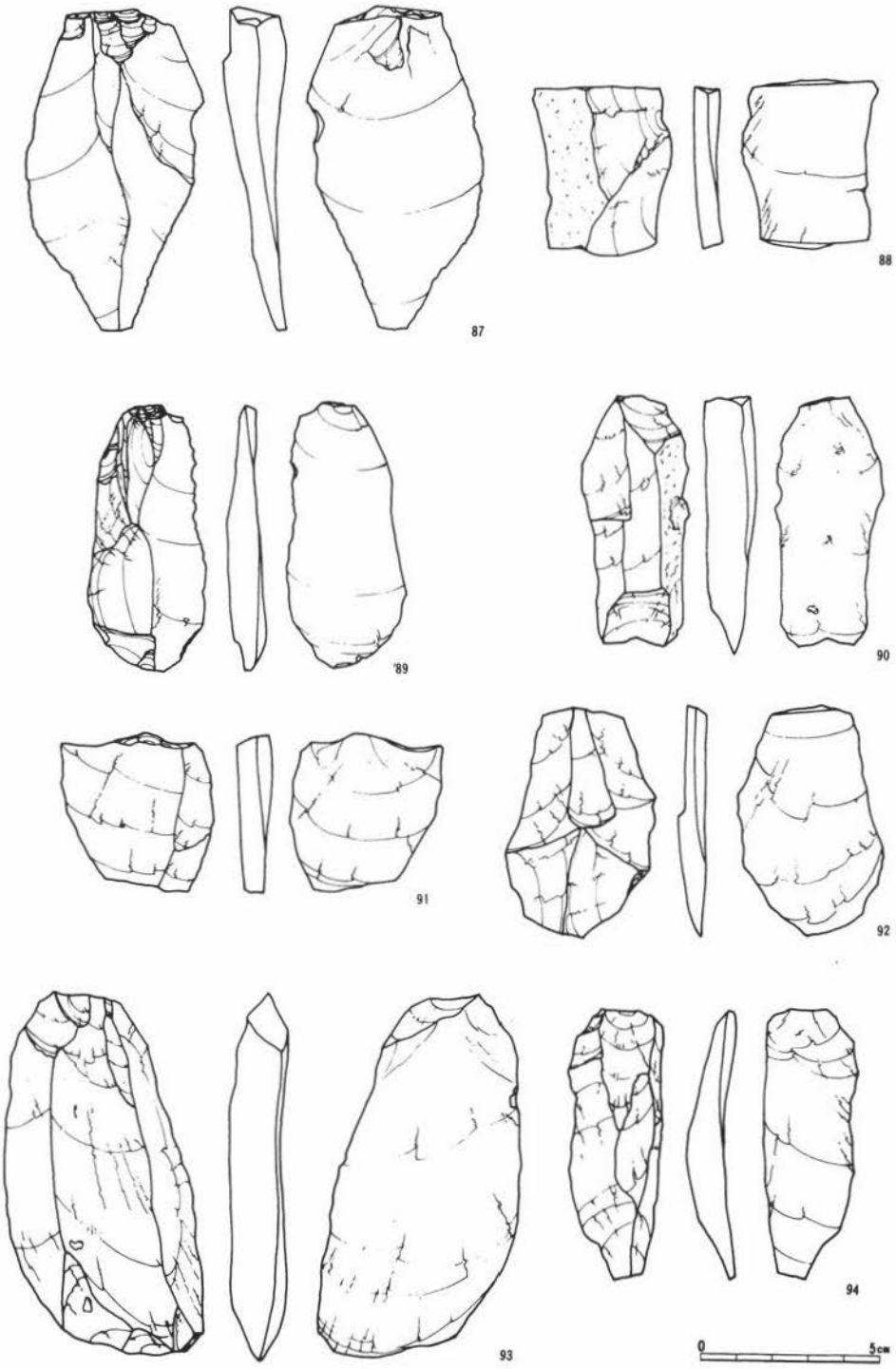
第22図　太子林・先土器時代の石器(12) 1/2



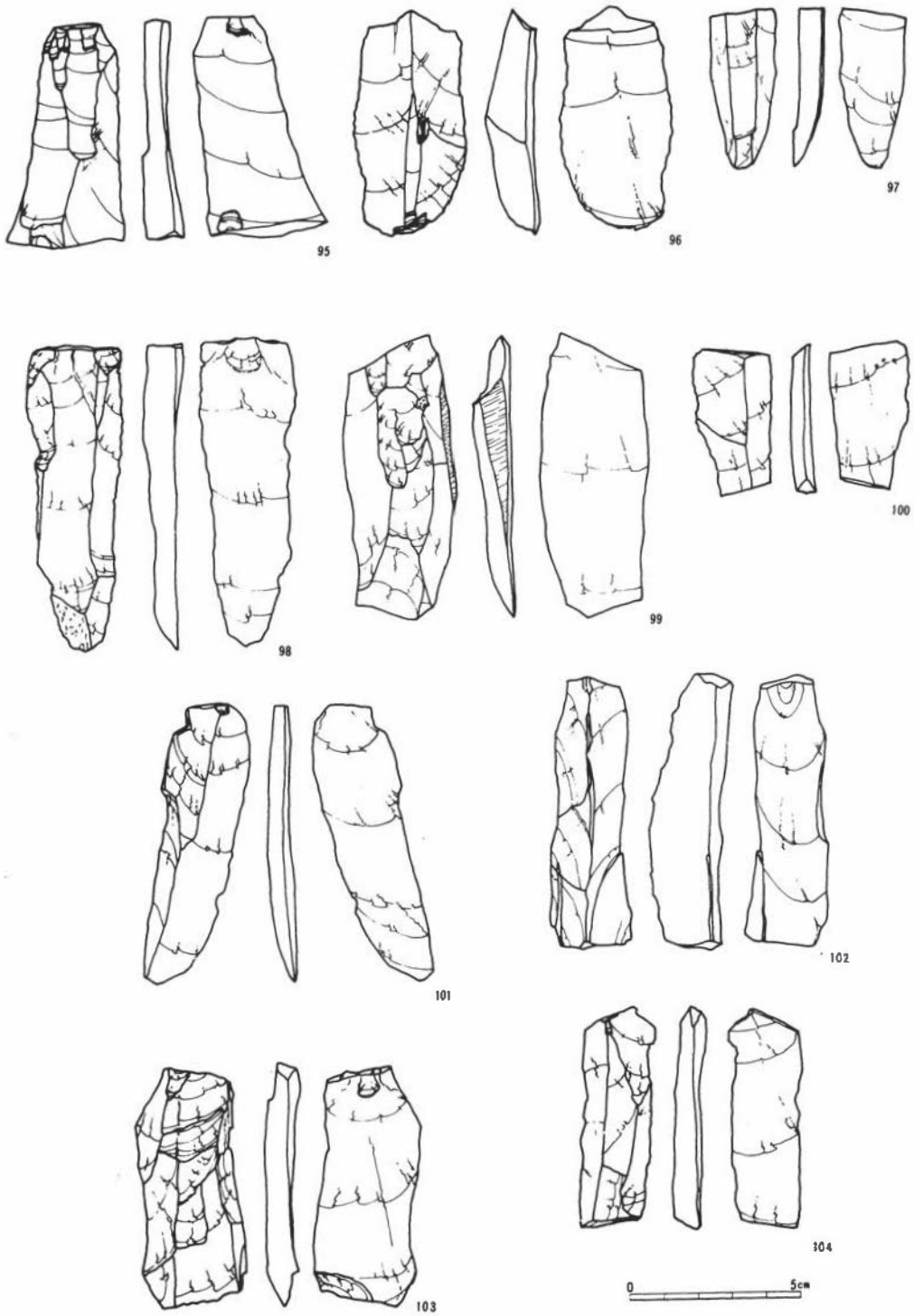
第23図　太子林・先土器時代の石器 (13) 1/2



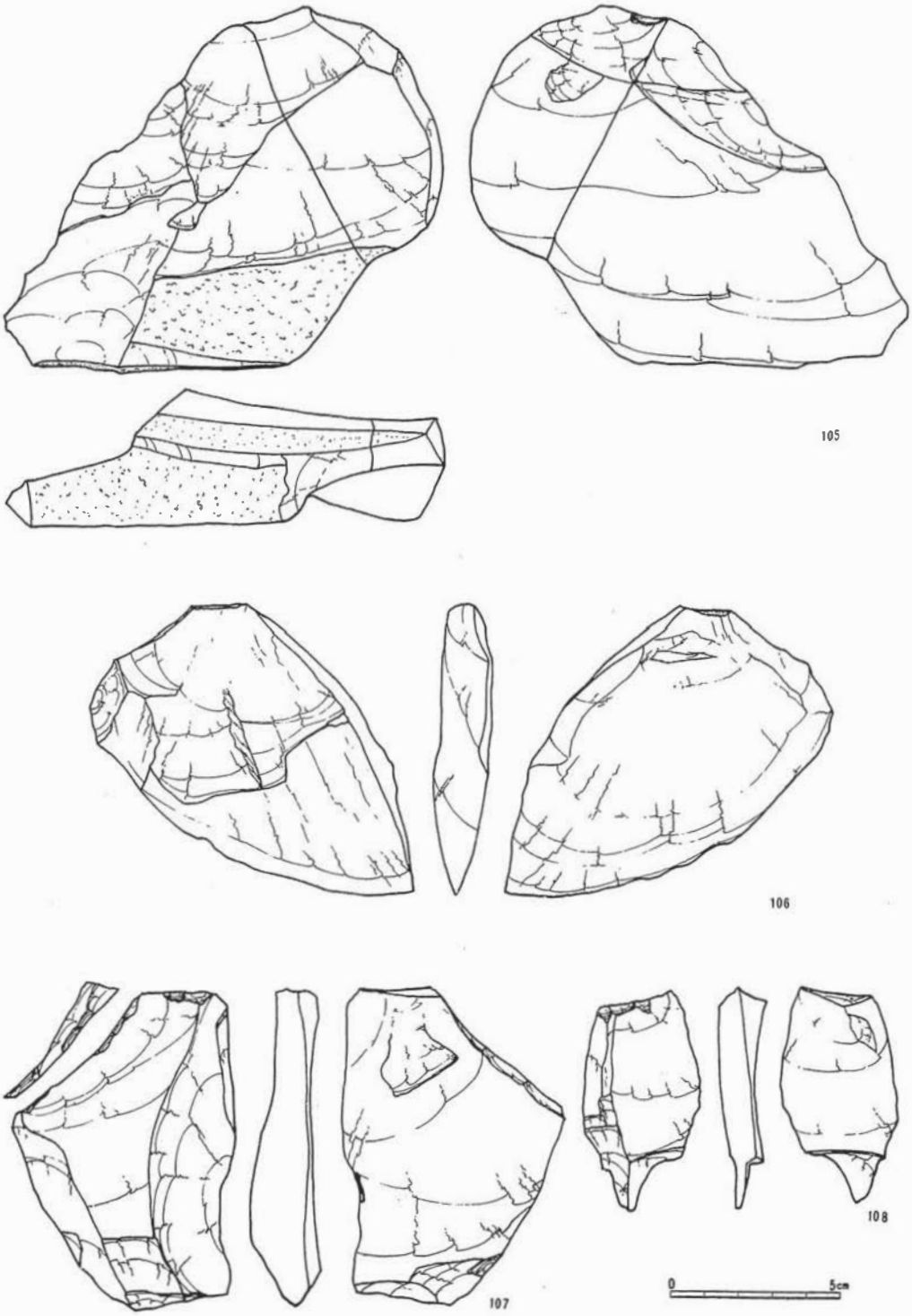
第24図　太子林・先土器時代の石器 (14) 1/2



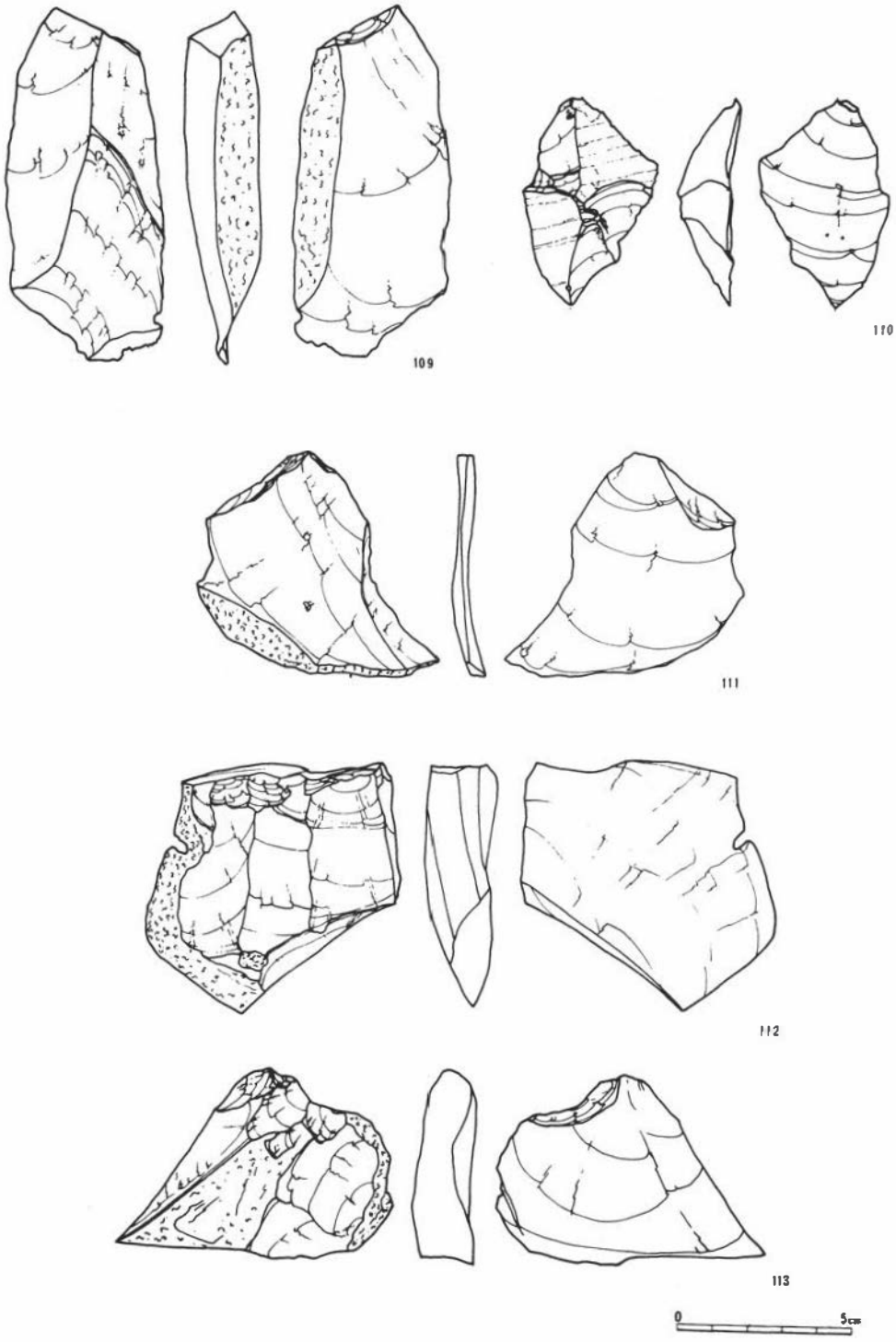
第25図　太子林・先土器時代の石器 (15) 1/2



第26図　太子林・先土器時代の石器 (16) 1/2



第27図　太子林・先土器時代の石器 (17) 1/2



第28図　太子林・先土器時代の石器 (18) 1/2

た24は離面にくぼみ部分が3ヶ所ある他，タール状付着物が明瞭に認められる。

C（第17図～第18図，第40図115A）

石核は5点出土している。25は節理面の多い石核で，目的剥片はうまく得られなかったと考えられる。また下端からの作出も試みられており，両設打面を有する石核である。26・115Aはともに打面より90°の角度から加撃して剥片を作出する手法がみられる。これは石核調整の一環として行なわれるのか，または114例のように残核を石器に利用する目的なのか興味ある。28はチョッパー状の石核である。幅広の剥片を得るために用意されたのかもしれない。

D（第19図～28図）

前記したように，剥片には目的剥片と石核調整剥片とがあり，さらには両者の中よりトュールとしてそのまま利用された剥片も考えられる。ただ，これ等の分類は明確でない場合が多く，我々も十分な分析も行なっていないため，次節で述べる遺物群集中箇所別に触れることにする。

第Ⅰ群（第19図～第24図）……本群では安山岩を主体として頁岩，黒曜石が利用されている。なお，黒曜石製は僅か1点（32）であった。大形の剥片は最大で147㎜のものもあるが，多くは50～80㎜の中形剥片である。刃器状剥片の多くは打面と反対からの剥離面を持ち，両設打面を有する石核から剥がされたことが理解される。また，横長剥片も若干出土している（64～68）。73～83の多くは石核調整剥片と思われる。79は最も典型的な打面再生剥片である。81～86は石核稜つき剥片，石核縁つき剥片であろう。

第Ⅱ・Ⅲ群（25図～第28図）

石材はⅠ群と同様である。

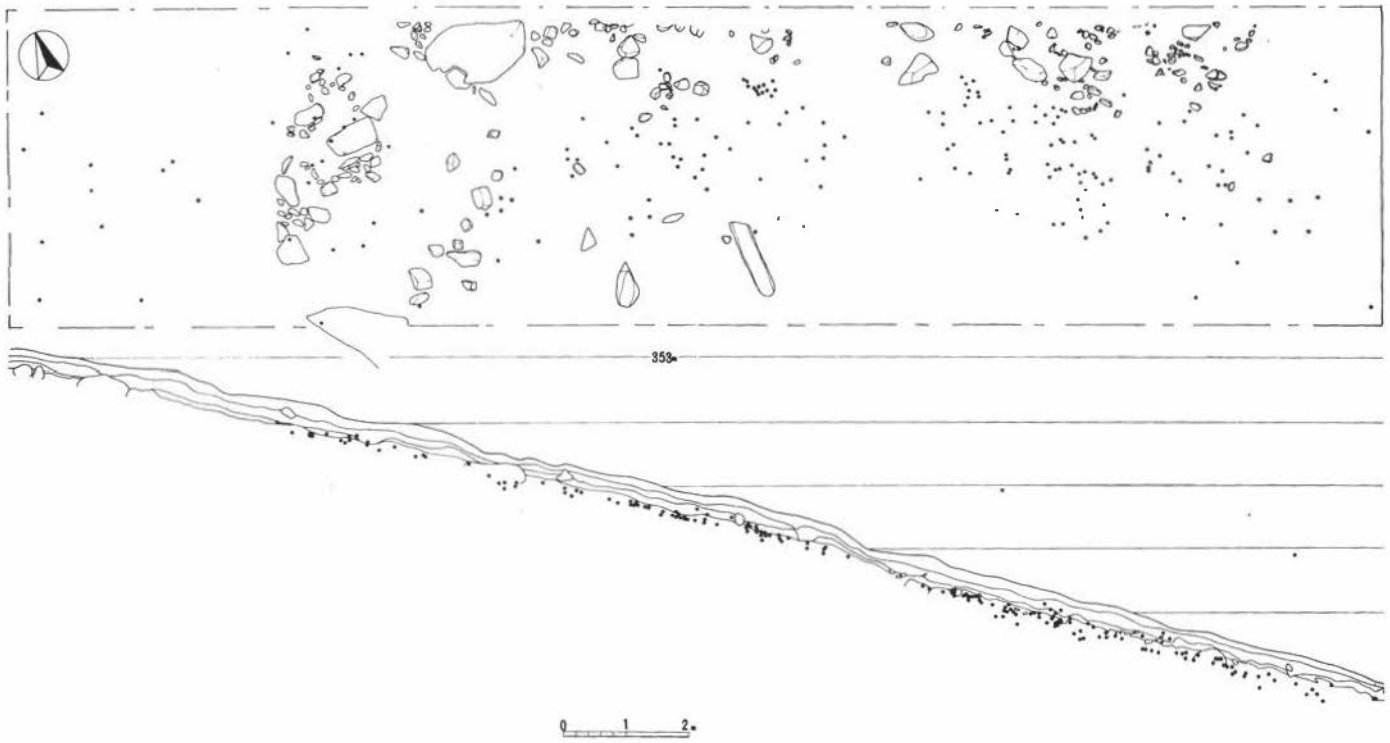
2．遺物の出土状態

丘陵東斜面に位置する本調査区は，平均斜度13°という急斜面であった。また，自然礫が群集し，およそ占居地としてはふさわしくない場所である。

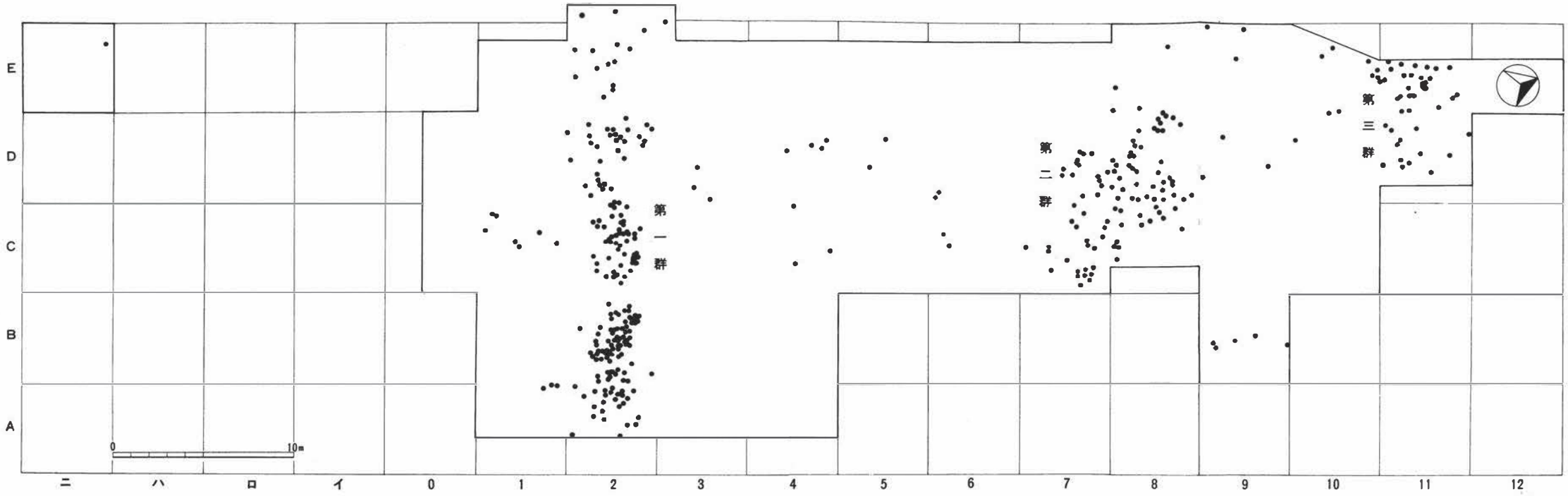
総面積約1700㎡の発掘によって，おおよそ3ヶ所に遺物が集中する傾向が認められた（第29図）。この集中箇所を第Ⅰ～Ⅲ群と呼称することにした。以下，各群について説明を加えたい。

第Ⅰ群（第30図～第33図）

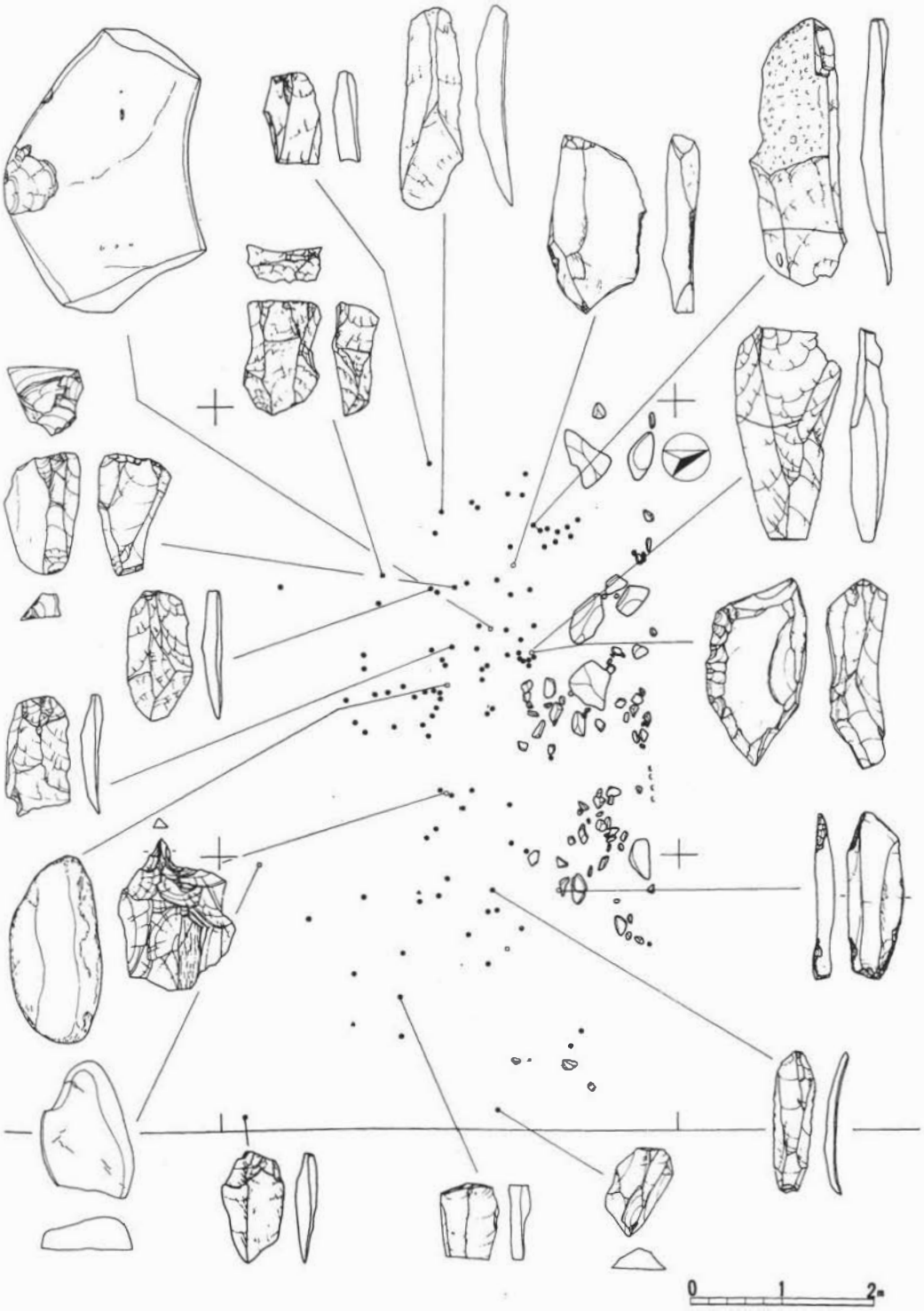
本群はA・B・C・D・E―2グリットに位置し，斜面に沿って約20×4mの規模を持つ。本地区は自然礫の分布が最も少ない地点であり，北側は自然礫が群集しており本群が



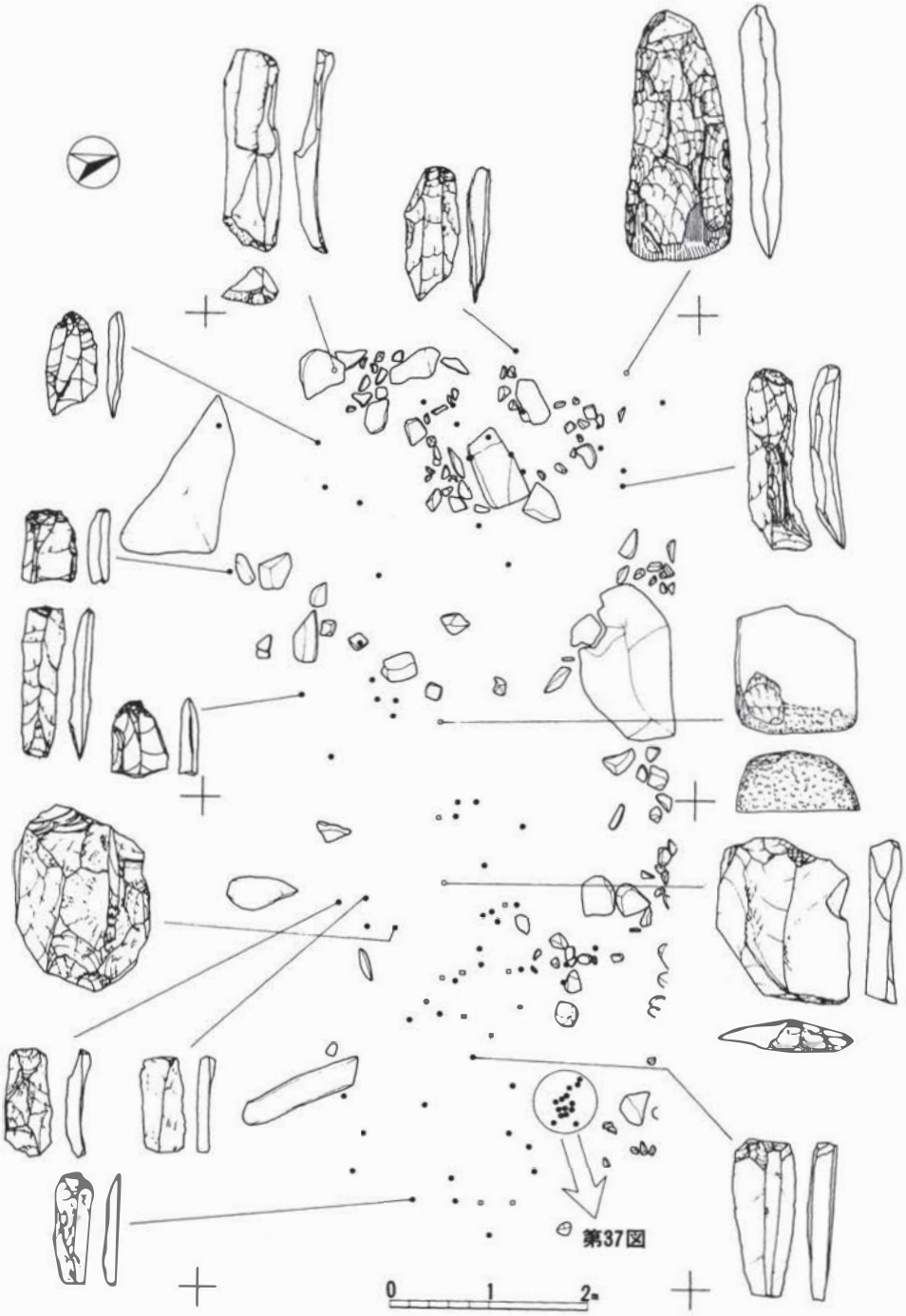
第29図　太子林・第Ⅰ群遺物分布図



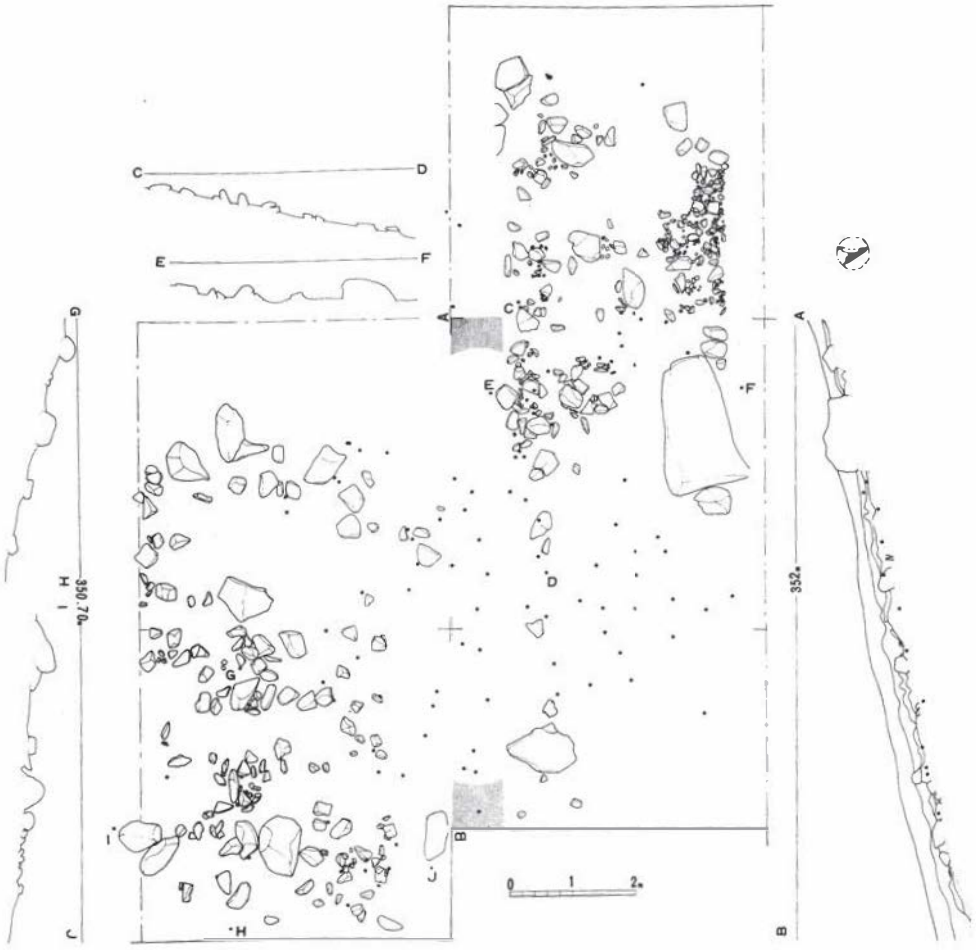
第30図　太子林・遺物分布図（1/200）



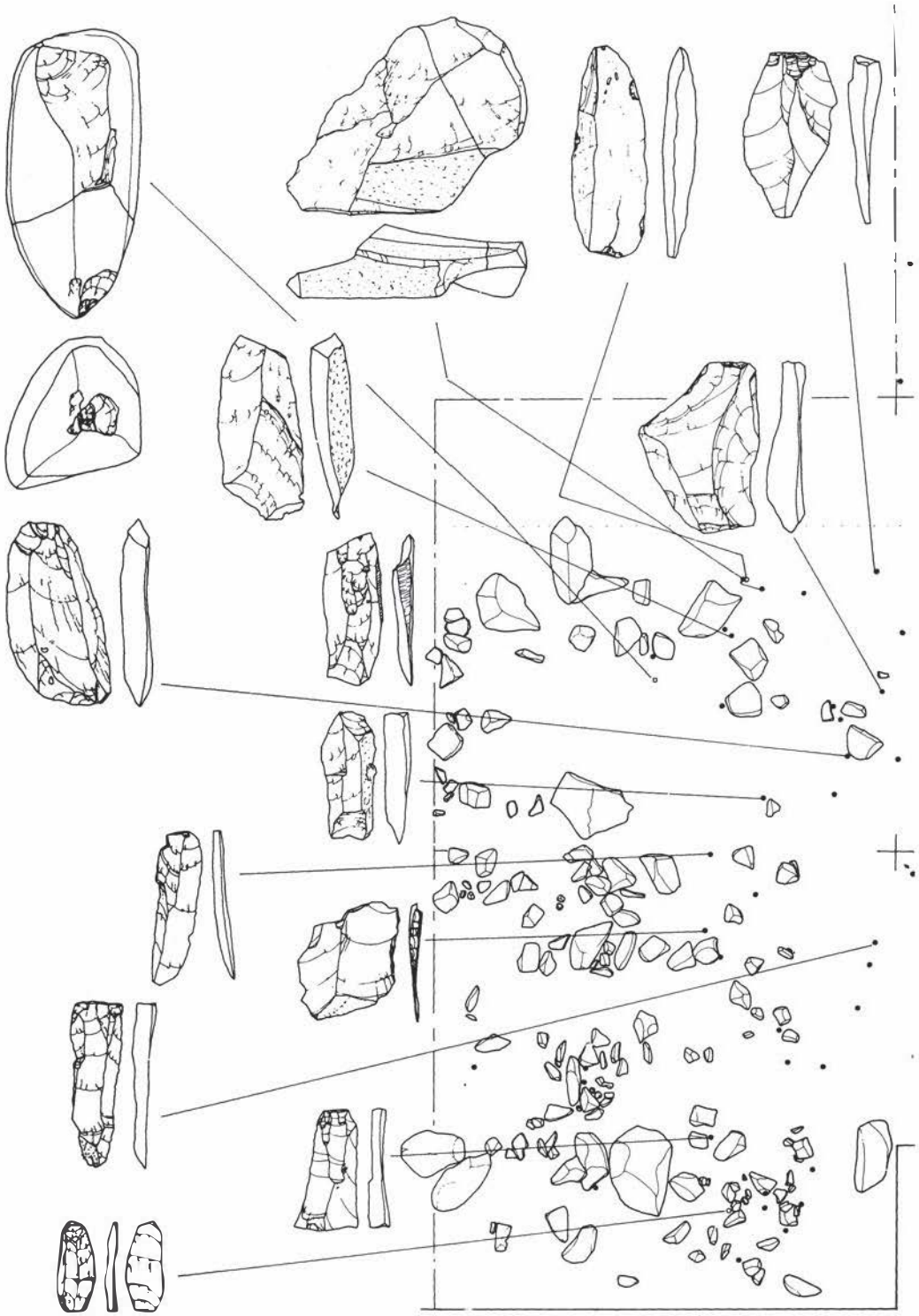
第31図　太子林・第Ⅰ群（A・B—2グリット）遺物分布図 1/80



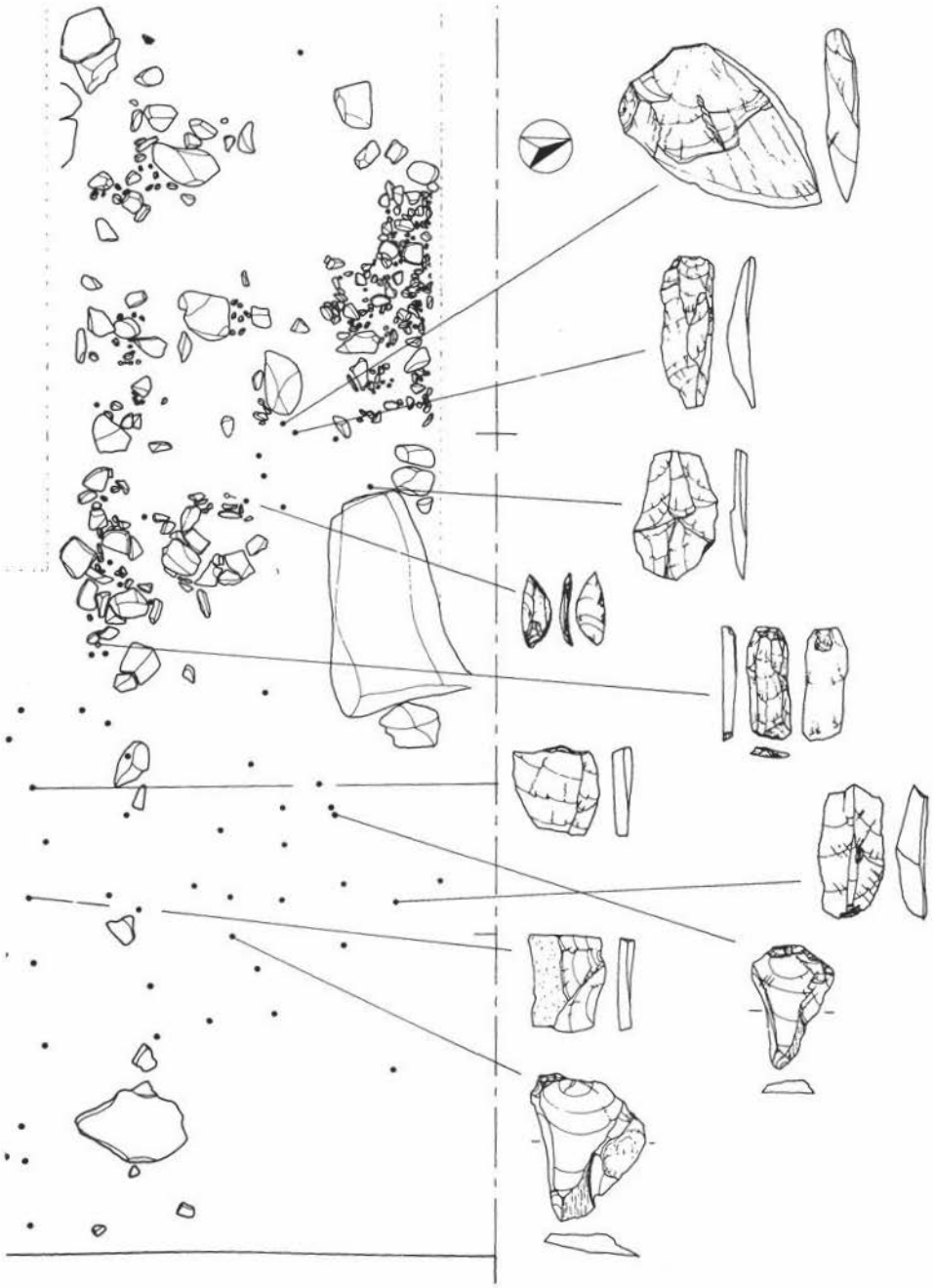
第32図　太子林・第Ⅰ群（C・D—2グリット）遺物分布図 1/80



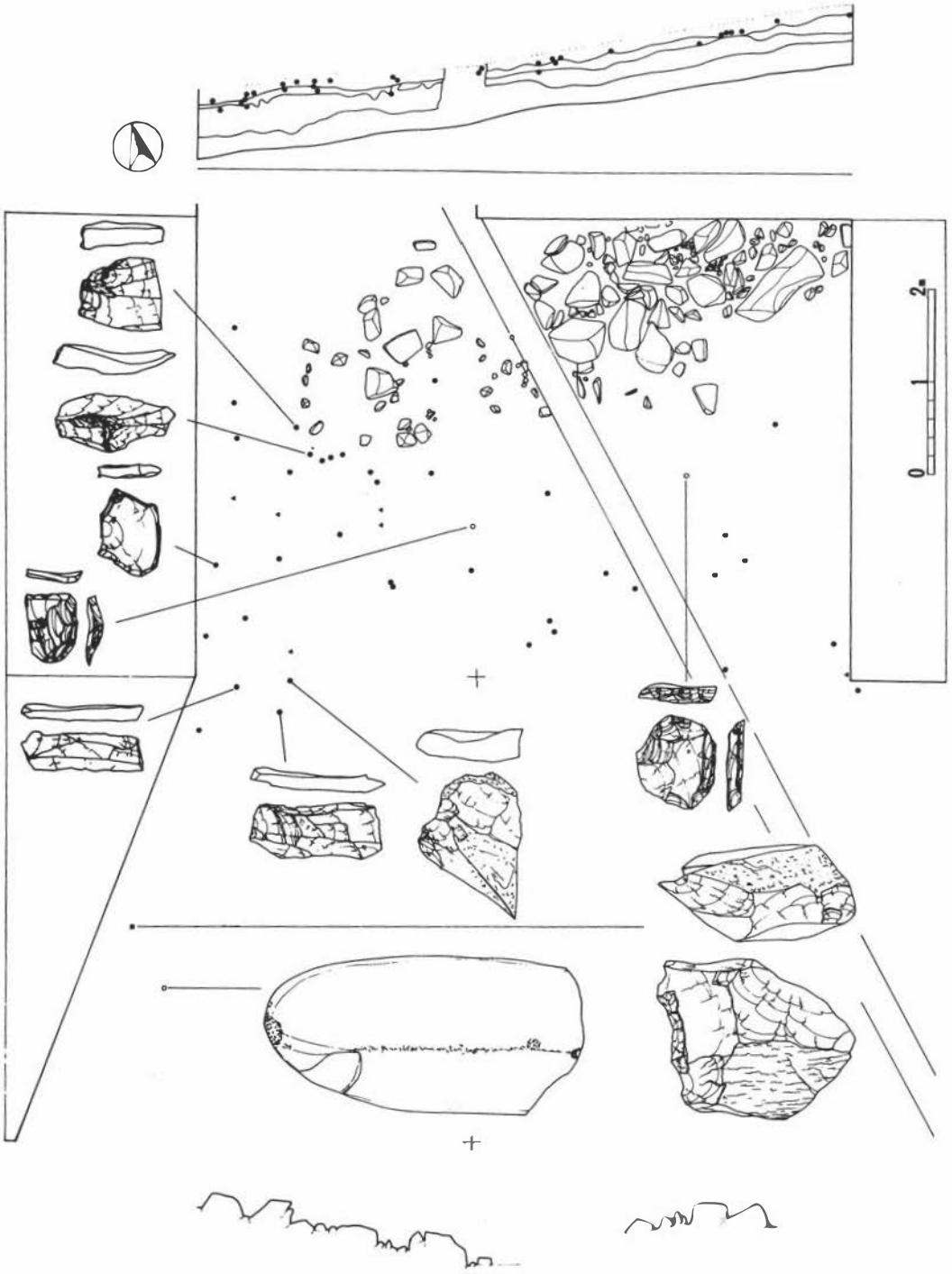
第33図　太子林・第II群遺物分布図

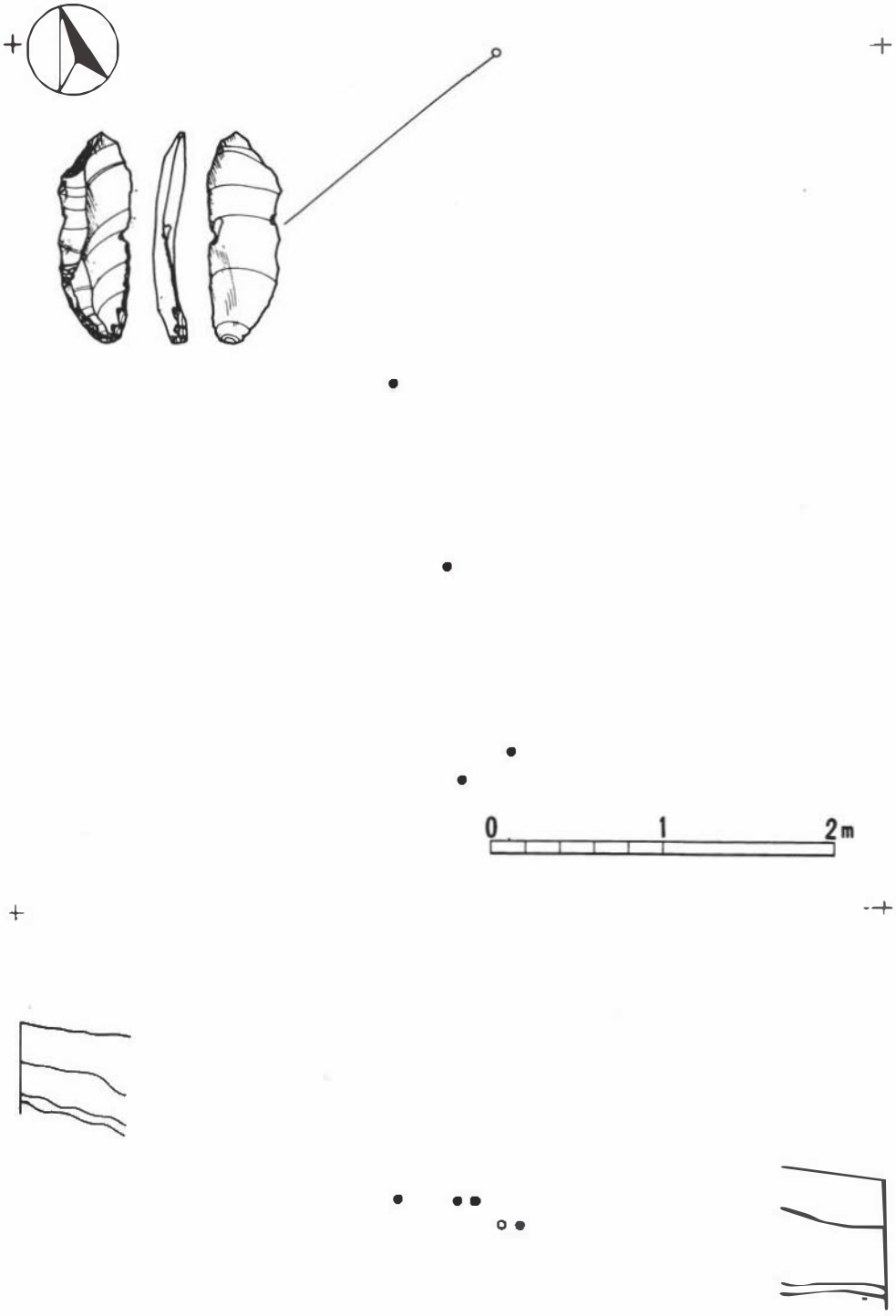


第34図　太子林・第II群遺物分布図



0 1 2m


0
1
2m

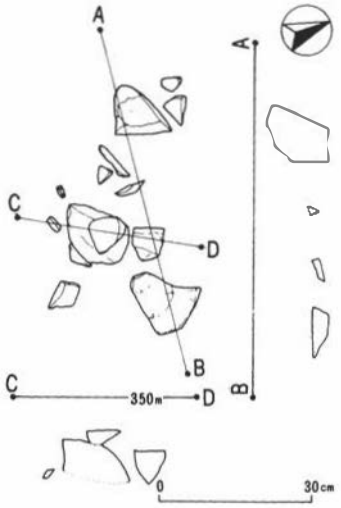


第36図　太子林・B－9グリット遺物分布図 1/80

位置する地区とは非常に対照的である。この相異は恐らく自然的要因に起因するものと思われるが，遺物が明確に分離して出土していることは何らかの人為的要因も加わっているものと思われる。

出土遺物は総数210点である。最も集中する箇所はB—2グリットであるが，群内においてもさらに分離する傾向が認められる。すなわち，A・B—2グリット，C・D—2グリットというように二分され，A・B—2グリットのまとまりもさらに二分される様相を呈している。

A・B—2グリットからは剥片が最も多く出土したが，二次加工が施される石器も4点出土している。さらに台石，石核も出土している。



第37図　太子林・C—2グリット出土間一母岩分布図（第Ⅰ群）1/15

C・D—2グリットのまとまりは，A・B—2グリットほど集中する傾向は認められないが，ハンマー・刃部磨製石斧・掻器などが出土している。C—2グリットでは，小範囲で同一母岩の石核・剥片がまとまって出土し，急斜面でありながらほとんど移動していないと考えられる出土状態を示していた（第37図）。また，自然礫が目立つがこれらの多くはⅣ層以下に入り込んでおり，少なくともⅣ層堆積以前の礫である。

第Ⅱ群（第34図～第35図）

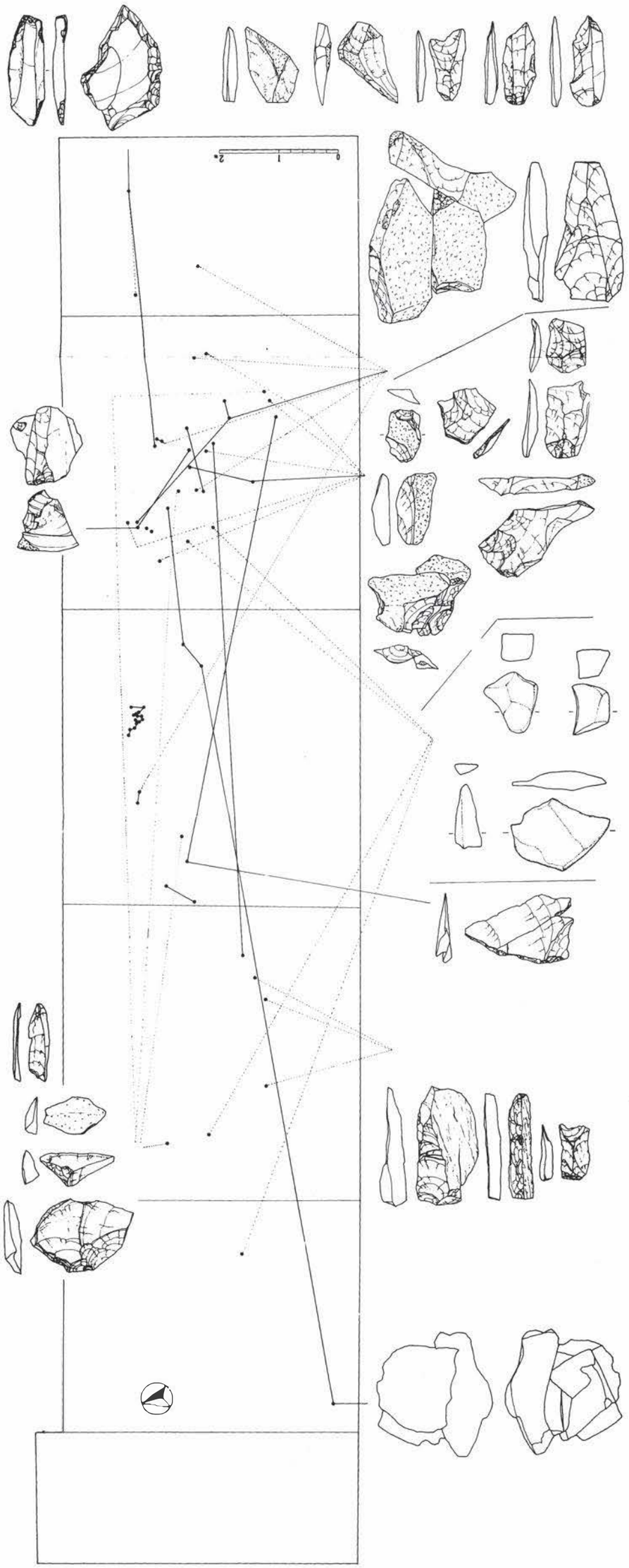
本群はC・D—7，C・D・E—8グリットに位置する。遺物総数は102点で，第Ⅰ群よりかなりまばらな出土状態である。また自然礫の分布も広く認められ，遺物の多くはこれら自然礫に混って出土している。自然礫はⅡ層からも出土しているため，自然営力により動いた形跡が窺える。したがって石器も礫とともに多少の動きはあったと考えられる。

遺物は，打製石斧・ナイフ形石器・ハンマーなどが出土している。石材は安山岩を主体として頁岩・黒曜石があり，第Ⅰ群と同様である。

第Ⅲ群（第36図）

まとまりの全体を検出出来なかったが，E10，D・E—11グリットを中心に分布する。本地区は調査区の中で比較的平坦である。

遺物は，剥片を中心として掻器が出土している。また，他では顕著でなかったが，本地区では砕片が比較的多く出土している。



第38図　大子林・第Ⅰ群個体別資料分布図

その他いくつかのグリットで単独あるいは数点の石器がまとまって出土している（第37図）。

3．遺物の接合状態について

石器の接合は，石器製作技術の復元，石器の移動の把握を目的とするものである。本遺跡でもこの作業を試みたが，同一石材が多いため識別が困難であった。また，多分に豊富な経験と長期間の作業に基づかねばならず，現報告段階では中途半端のまま記さねばならない。

その中で第Ⅰ群については接合作業と並行して同一母岩別に分類を行なった（第38図）。

地点接合

第38図は第Ⅰ群における地点接合である。実線で結んだものが接合する石器であり，破線は同一母岩に識別したものである。接合する石器はほぼ十分な作業に基づいているが，母岩別に分類した例については中途段階である。

接合する例はほとんどB－2グリット出土石器と関係する。移動の状況はほぼ斜面に沿っている。最大距離は約15mである。多くの接合例は2～3点のみの接合であり，それらの石器の動きを分析するに足る資料ではないが，全接合石器が1ヶ所においてまとまって出土したのが1例あり，本群を考えるにあたり単に自然営力のみで石器の移動が行なわれたのではないことを示している。

なお，Ⅰ～Ⅲ群間の接合については不十分のため本稿では割愛した。

接合資料

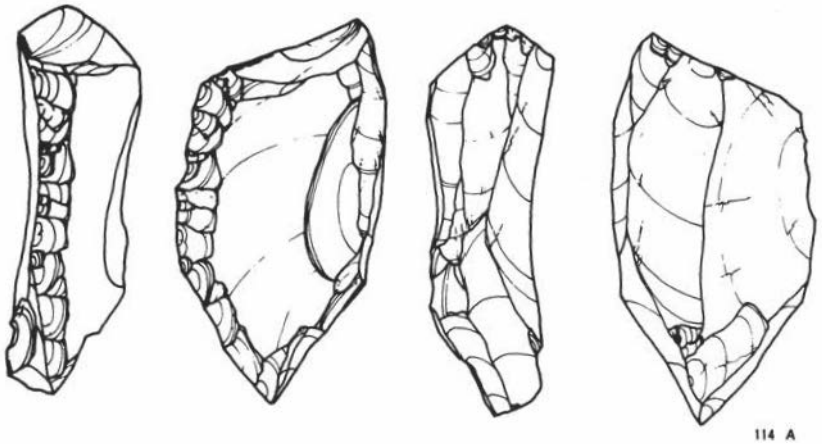
不充分ながら，現段階で接合し得た資料について説明してみたい。

第1接合資料（114）グレイバーと呼称した石器と横長剥片である。114Aの右側縁の剥離は，114Bの剥片剥離後の作業である。これらの剥片は検出し得なかった。なお，1のナイフ形石器とは同一母岩である。

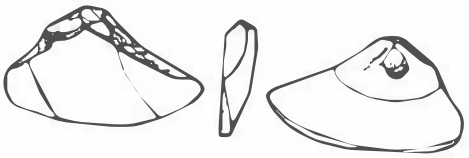
第2接合資料（115）石核と剥片1点の接合である。石核の形態がかなり変化した事が窺える。すなわち，剥片115Bの右縁辺には細部調整が施されており，この面が本来下端部分と考えられる。図中▼面は，石核打面でなく，刃器状剥片剥離面である。残核は以前の石核打面より約45°起き上がった状態となっている。

第3接合資料（116）刃器状剥片2点の接合である。116B剥片が最初に剥がされ，打面調整された後116A剥片が剥がされている。

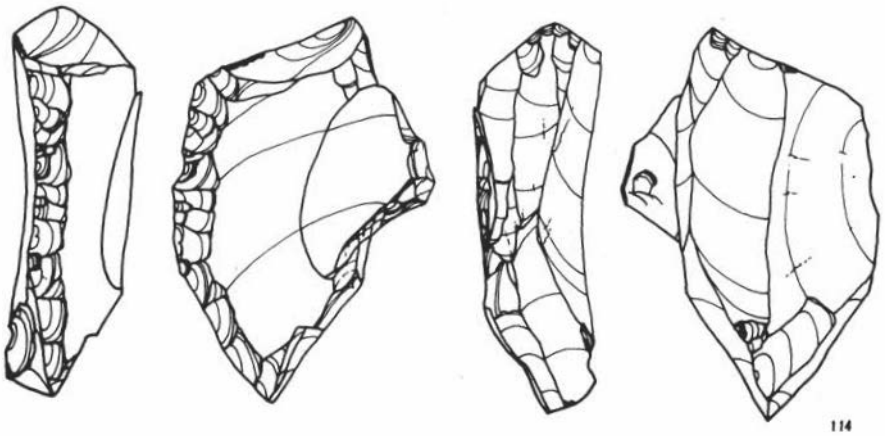
第4接合資料（117）3点が接合する。接合状態からかなり大きな角礫を母岩としてい



114 A

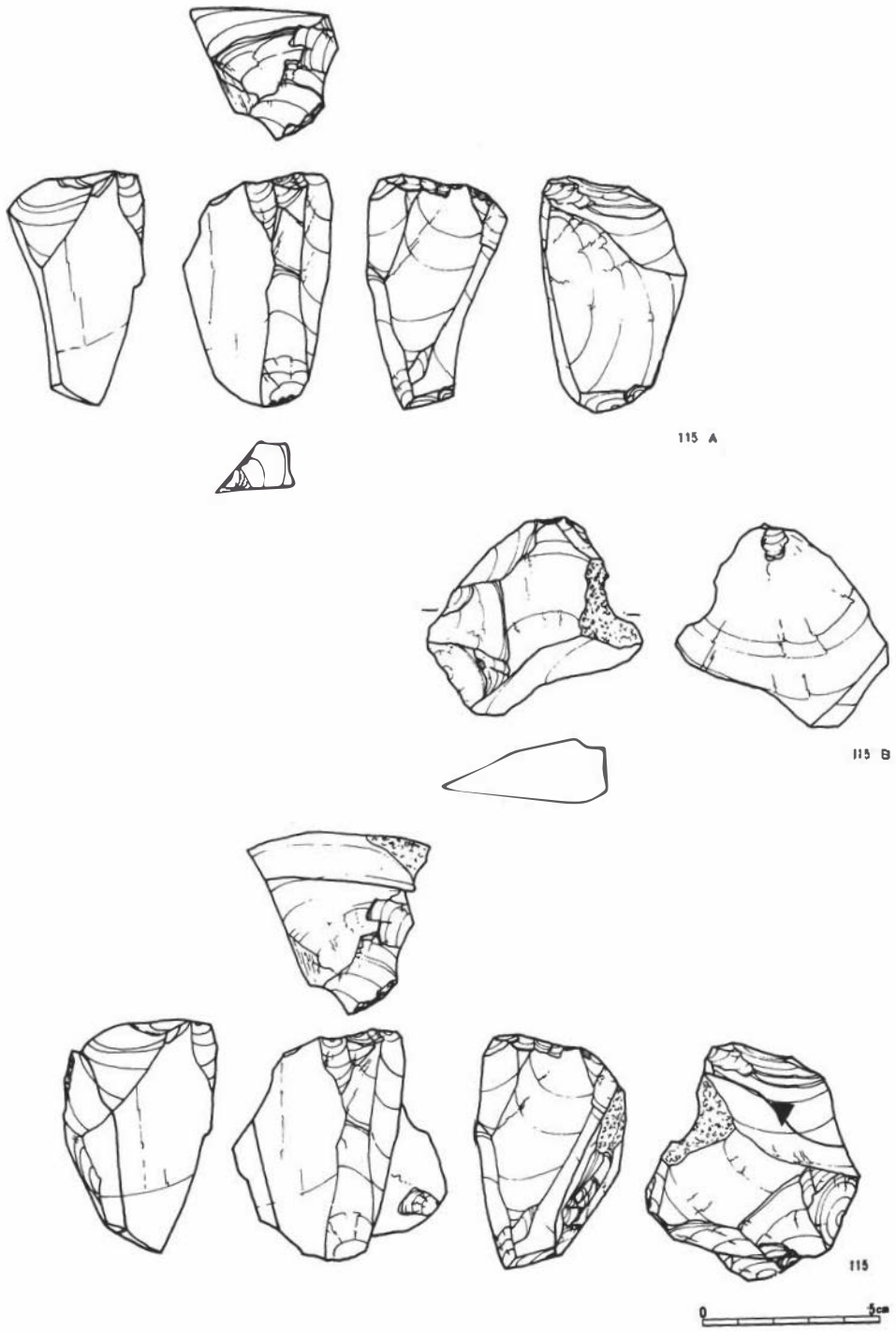


114 B

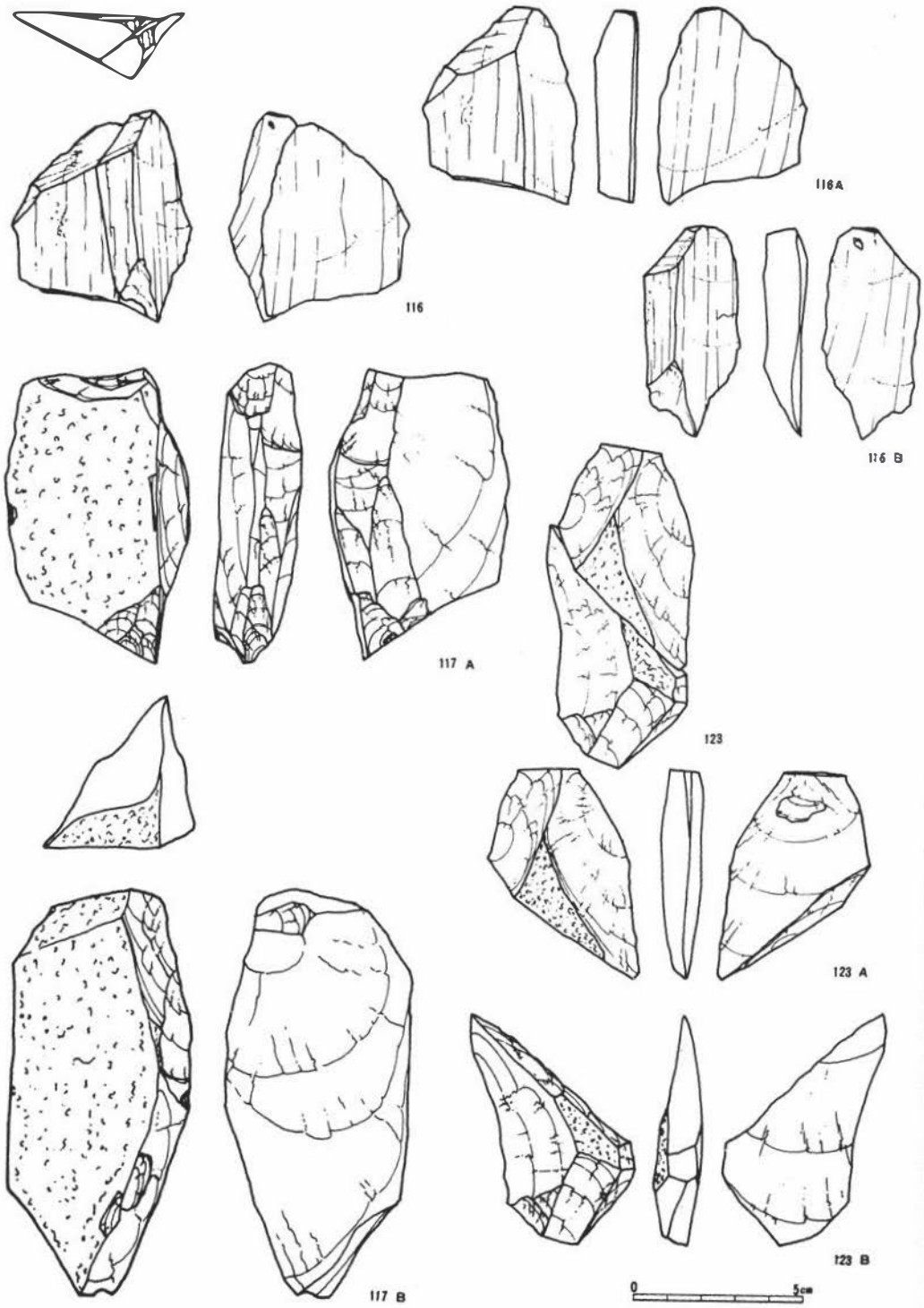


114

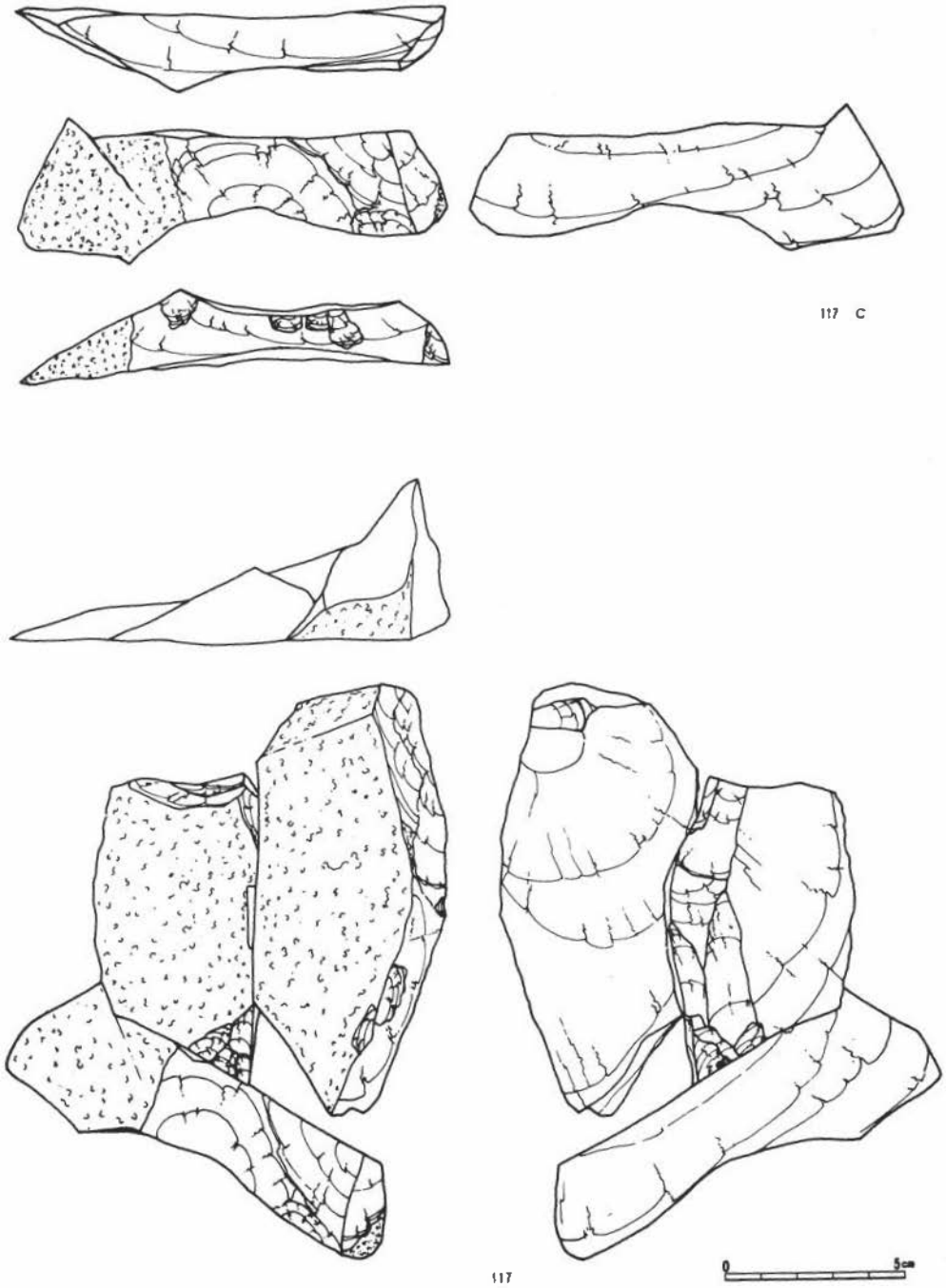
第39図　太子林・個体別資料（1）



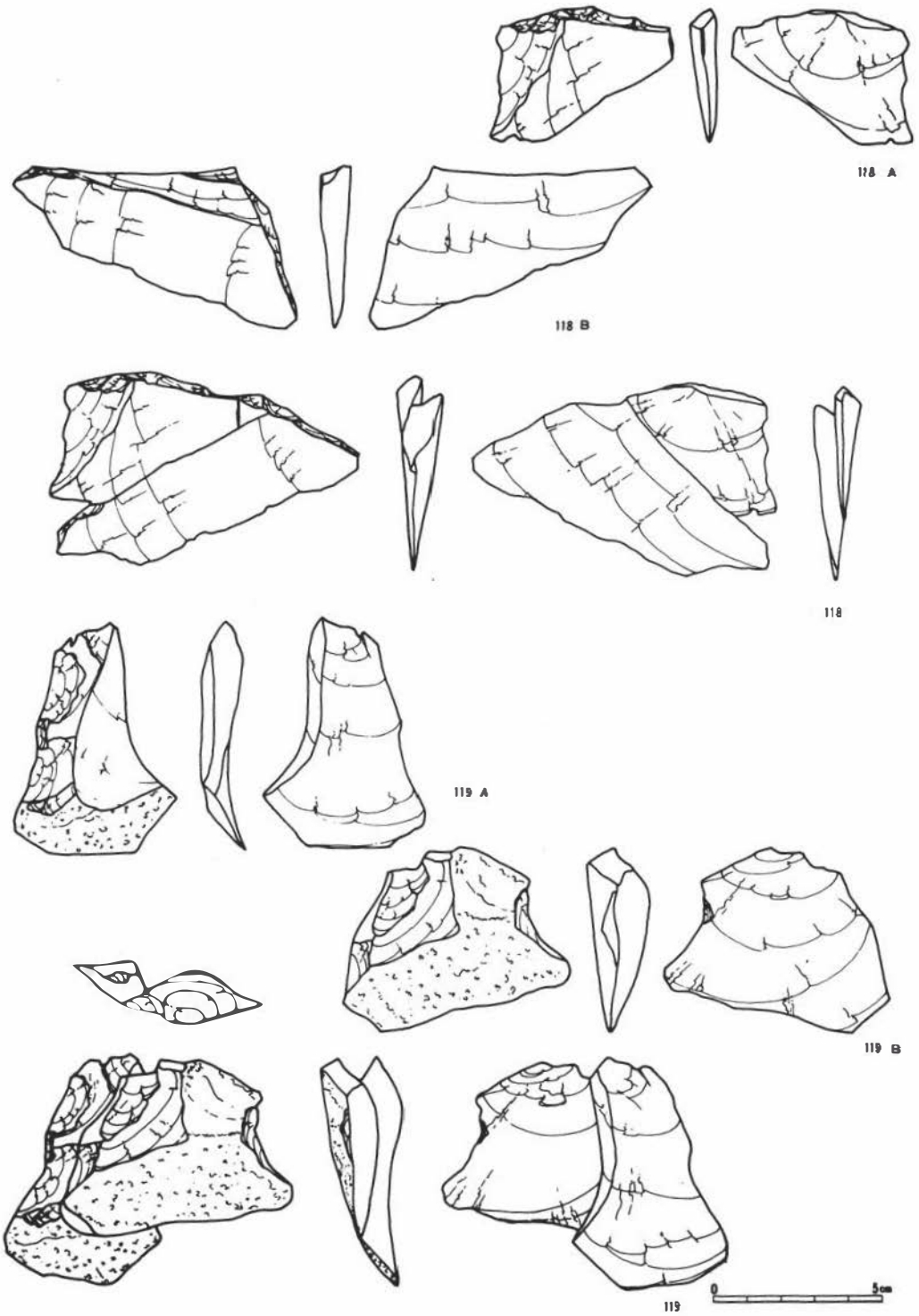
第40図　太子林・個体別資料 (1)



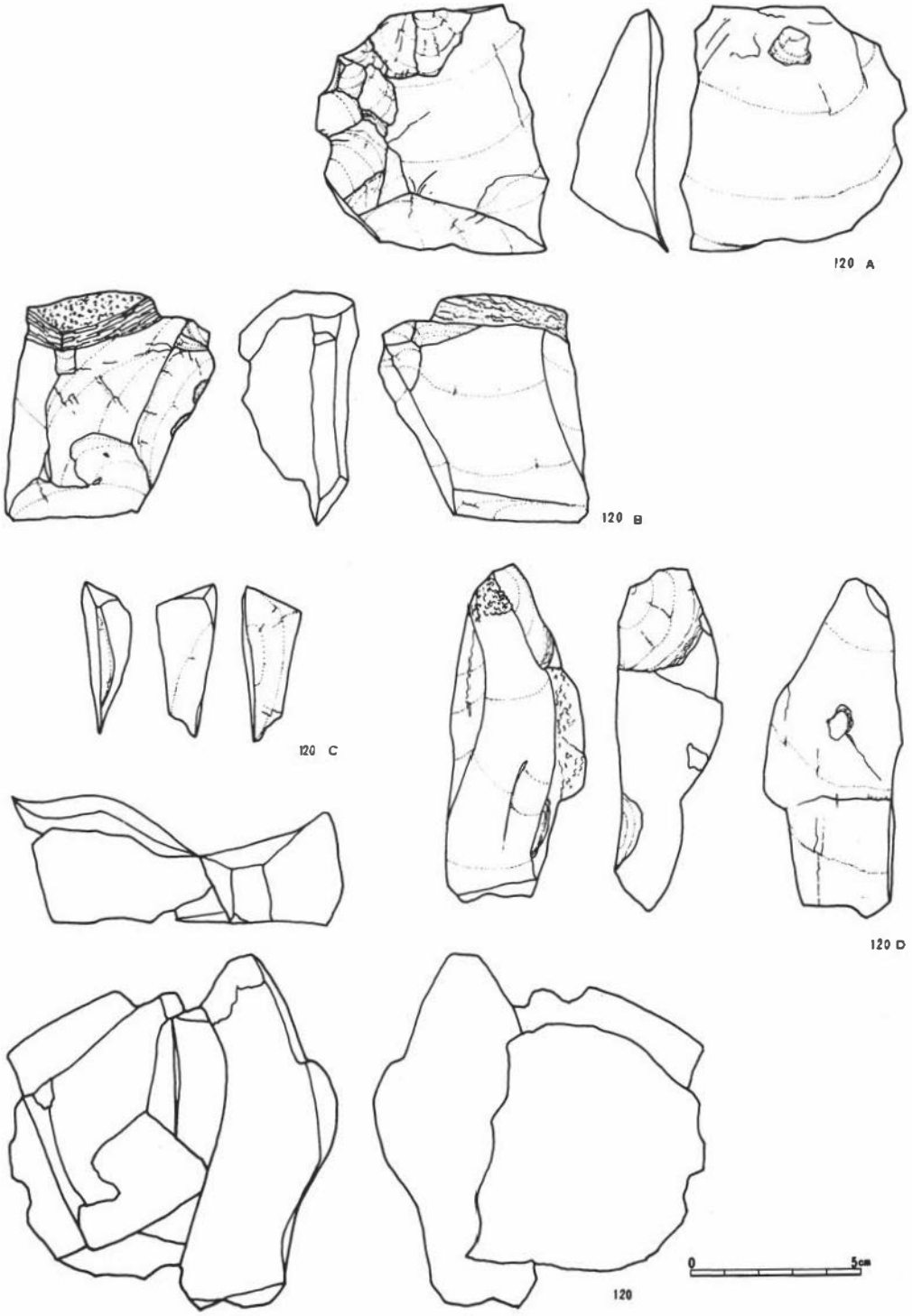
第41図　太子林・個体別資料（3）



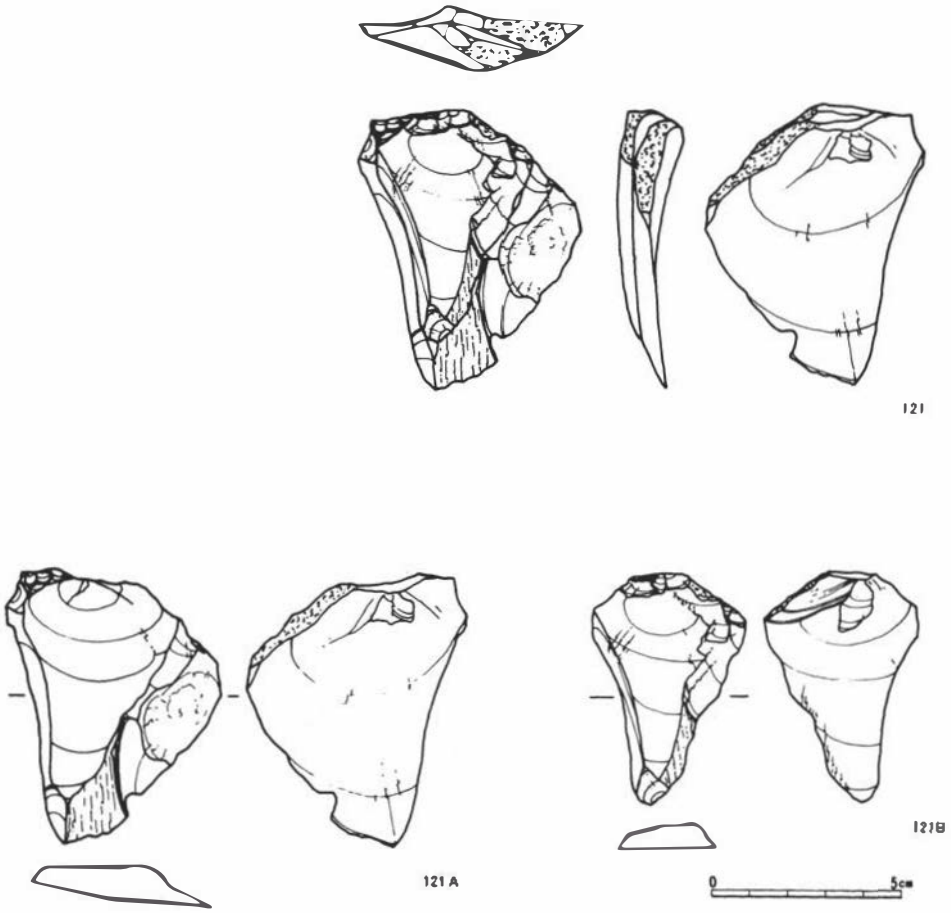
第42図　太子林・個体別資料 (4)



第43図　太子林・個体別資料 (5)



第44図　太子林・個体別資料 (6)



第45図　太子林・個体別資料 (7)

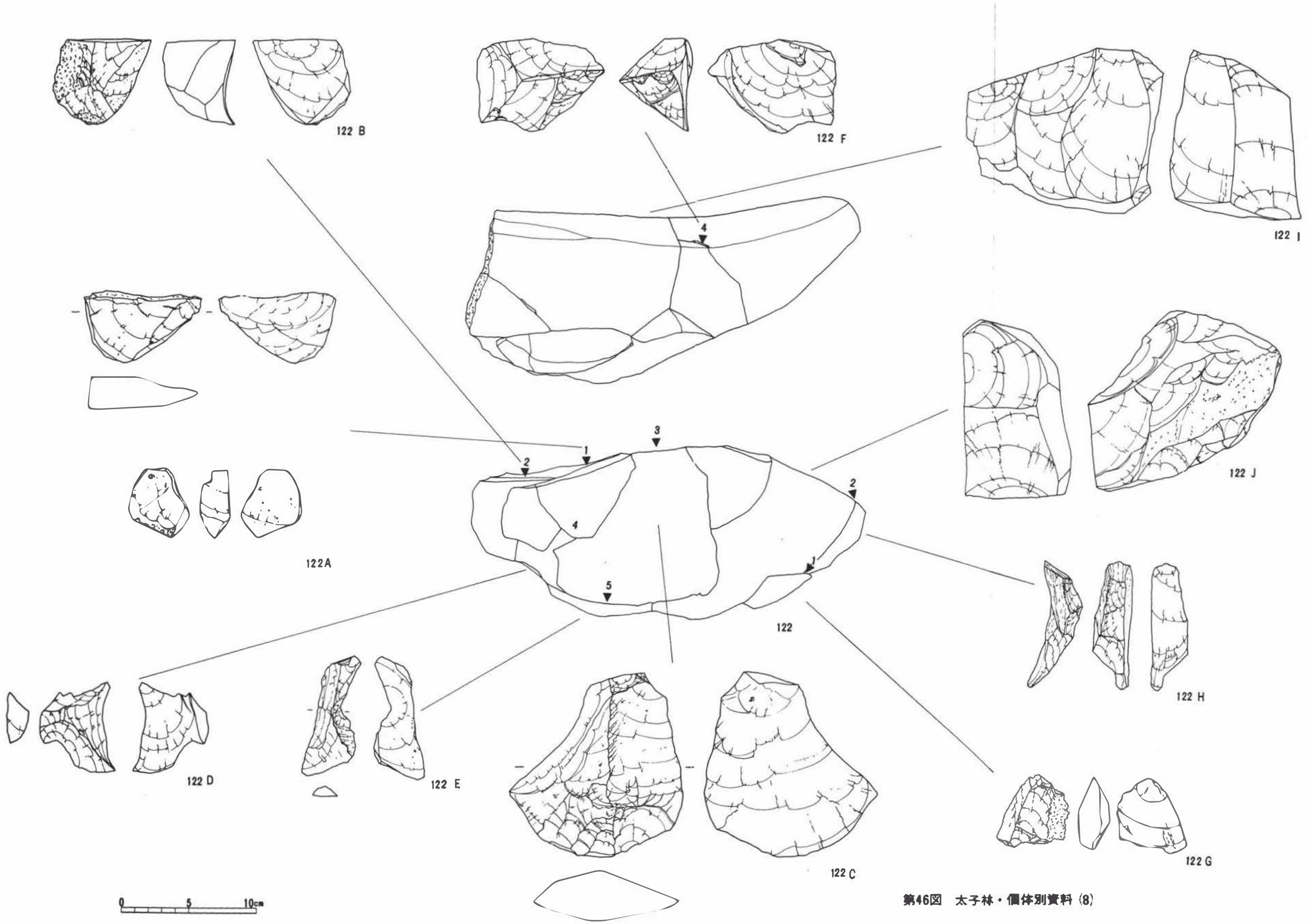
ることが窺える。剥離順序はB→A・Cである。Aは上・下端を打面とする石核となっている。

第5接合資料（118）　2点の剥片よりなる。A剥片剥離の際の打面とB剥片剥離の打面とは約90°の差がある。接合正面は，A・Bとも右方向からの同一剥離面に覆われていることから，A剥片が石核調整剥片と考えられる。

第6接合資料（119）　剥片2点の接合である。打面作出工程の剥片であろうか。

第7接合資料（120）　石材は安山岩であるが，風化のためか剥離面の観察が困難であった。剥離順序はD→C→B→Aである。D・B石器に自然面を残しており，比較的初期の剥片剥離作業であることが窺える。

第7接合資料（121）　打面を同じくする接合例である。B剥片はA剥片より約1cm短く



第46図　太子林・個体別資料 (8)

正面を観察するともう一枚の剥片が概に作出されていることが窺える。目的剥片を作出するための面取りと思われる剥片である。

第8接合資料（第46図122） 10点の剥片・石核よりなる。原石のほぼ全形に復元された。製作工程は，扁平な自然面を打面としてA剥片を作出する。A剥片は後に破損し，二個体となっている。次に石核の隅のB剥片を作出するが，これは打面を広くしており，目的剥片の作出のためではなく，石核の分割か調整のための剥離であろう。幅広なC剥片を作出した後，本石核は下端より二分割されている。これは一種のアクシデントと見做した方が良いのかもしれない。F剥片はその後離面より打撃を加えて作出している。

本例は接合した結果，長さ30cm近い礫に復元されたが，目的とすべき剥片は作出していない事が判明した。これは，所謂中途段階であるのか，石核に出来ず破棄したものか明確でない。

第9接合資料（第41図123） 刃器状剥片が分割した例であり，本来の接合ではない。A・B両剥片とも分割後に剥離された面が認められる。

第2節 縄文時代

縄文時代の遺構・遺物は，前期有尾式土器片と土坑1基である。遺物は調査区全体から出土し，特にまとまって出土した地区はD・C・E—3グリット，D・E—8グリットである。E—8グリットで検出された土坑より出土した土器片以外はすべてII層乃至I層より出土したものである。

遺構（第47図）

わずか1基であるが，E—8グリットより土坑を検出した。平面形は160×80cmの不整楕円形を呈す。自然礫の密集する地区に構築されている。坑底は凹凸があり，地山自然礫が認められる。深さは22cmを測る。遺物は北壁側に縄文施文の土器片が出土している。

遺物

土坑および調査区より出土した遺物は縄文前期有尾式に比定される土器片および石器3点である。

土器

有尾式土器は，飯山市有尾遺跡出土土器を標準として設定されたものであり，関東地方の黒浜式土器と併行する。

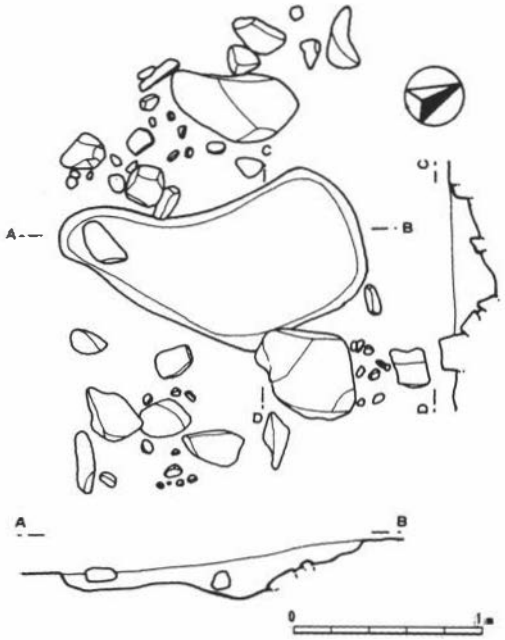
文様構成の相異によって，以下のように分類できる。

A類―沈線文が施されたもの（第48図1，2，3）

1は沈線を斜状に施し，口縁部は無文である。また，小突起状口縁を有する。2は横走する沈線および斜走する沈線が放される。3は口縁に平行な沈線とそれに直交する二条の沈線が施されている。口唇はやや内彎する。2は繊維を少量含む。

B類―沈線文・連点刺突文が施されたもの（第48図4，5）

4は口唇上および口縁部に連点刺突文が施されている。5は数条の沈線文とその内側に連点刺突文が施されている。



第47図　太子林・縄紋時代土坑実測図（1/20）

C類―半截竹管による平行沈線・斜走文が施されたもの（第48図6～14，第49図15，16）

6～11・13，14は数条の沈線が施され有尾式特有の斜走した三角文がみられる。9，14は小突起状の口縁を有する。12は縦位・横位の沈線が施される。

D類―半截竹管による爪形文・波状文が施されたもの（第49図17～25）

17は口縁がやや内彎し，爪形文が施されている。18は17同様爪形文が施されている。19～23は爪形文と波状文が施されている。23は口縁がやや内彎する。24～25は沈線と波状文が施され19～23と比較して，波状文が強調されている。19，22，25は繊維を少量含む。

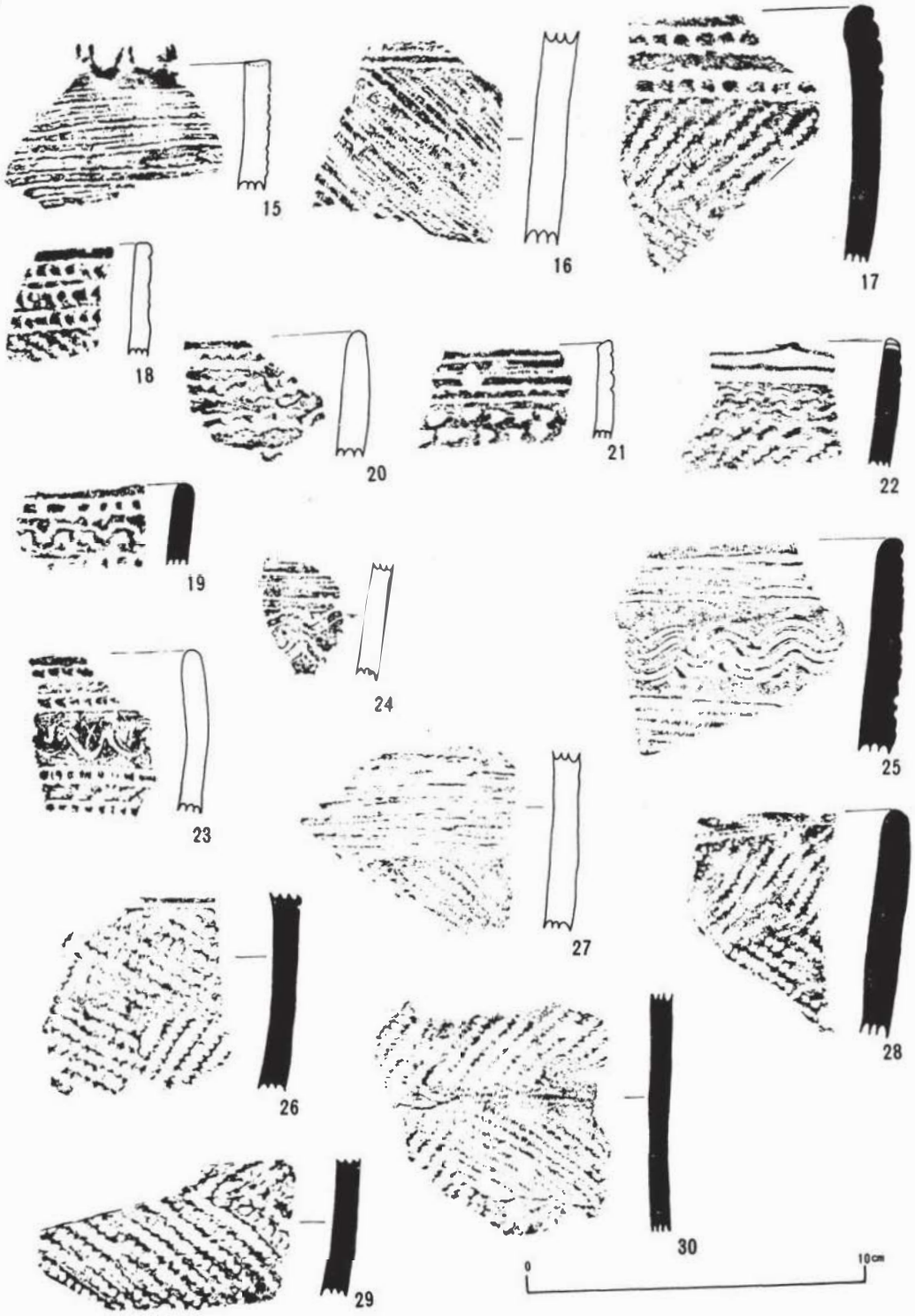
E類―縄文のみ施されたもの（第49図28）

縄文のみによる口縁部破片で，繊維を少量含む。単節斜縄文の組み合わせにより羽状縄文を施している。

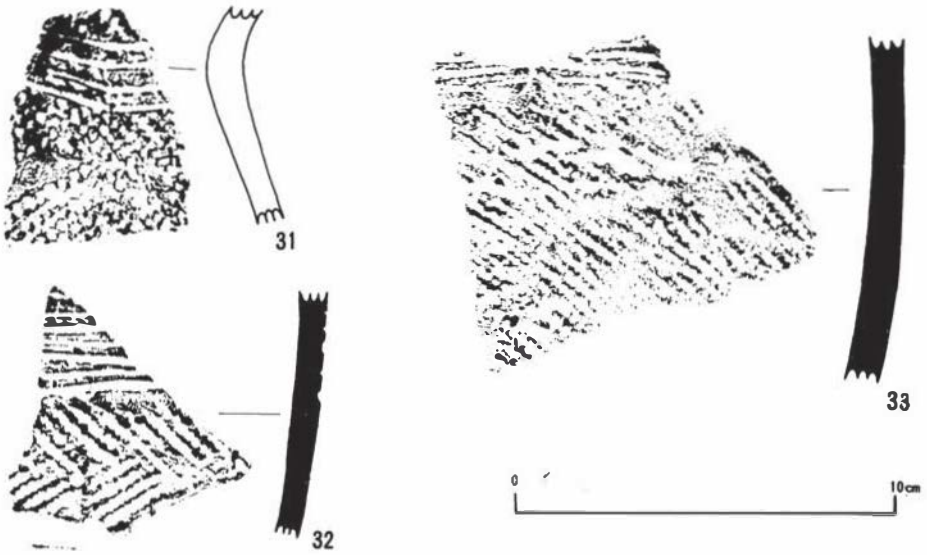
F類―胴部以下縄文が施されるもの（第49図26～30，第50図31～33）

単節斜縄文の組み合わせによって羽状縄文を呈するもの（29，32）と，同じく菱形を呈するもの（26，30）がある。27は恐らく菱形を呈すると思われる。また，33は羽状縄文とならない単節斜縄文しRであろうと思われる。26・28，29，30，32，33は繊維を少量含み

第48図　太子林・縄紋時代前期の土器 (1)



第49図　太子林・縄紋時代前期の土器 (2)



第50図　太子林・縄紋時代前期の土器（3）

33は表面に繊維束の痕跡らしいものが見られる。

（―なお含繊維土器は拓影図中の断面を黒く塗り潰した。―）

石器（第51図）

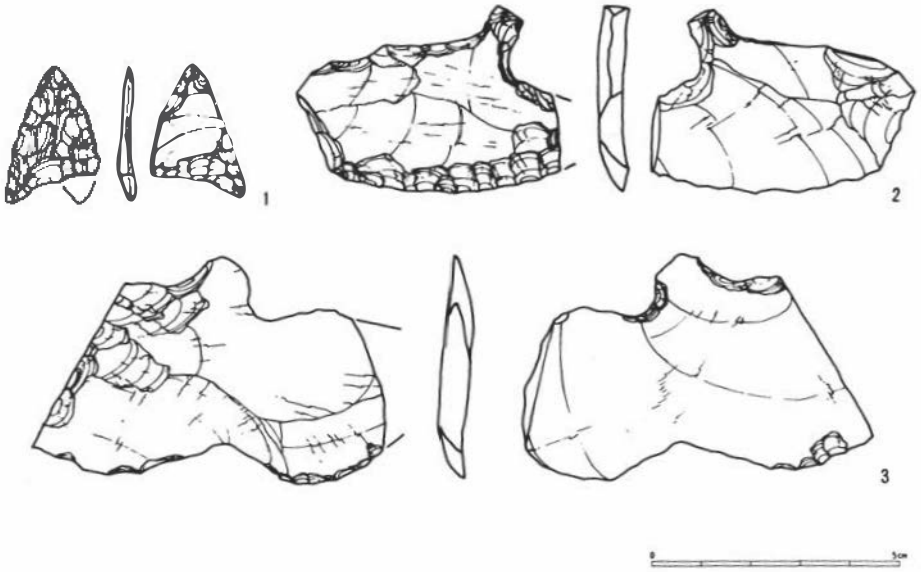
縄文時代の石器は，表採資料を含め僅か3点のみであった。

1は石鏃である。石材は黒曜石が用いられ基部が欠損している。また，無茎で長さは28㎜であった。石鏃基部の抉り込みは全長に比して小さい。加工は裏面に主要剥離面を多く残すが，周縁および正面全面には入念な二次加工が施されている。

2は横形の石匙である。石材は粘板岩が用いられ一部は欠損している。刃部は入念に調整剥離して作出している。また，つまみ部分およびその周縁にも二次加工が施されている。

3は石匙である。石材は安山岩が用いられ一部欠損している。2同様に横長剥片を利用しているが，顕著な調整剥離は見受けられない。つまみは簡単な加工を施して作出している。刃部は直刃ではなく彎曲し，両面に小剥離を残している。

以上3点の石器は遺構内から出土したものでないが，縄文前期有尾式土器に伴う石器としてよいであろう。



第51図　太子林・縄紋時代前期の土器（2/3）

図—No.	出土群グリット	名称	計測値 長さ	幅	厚	重量	石質	備考
			mm	mm	mm	g		
11—1	I 群	ナイフ形石器	91	30	10	29	頁岩	先端部一部欠損
11—2	II 群	ナイフ形石器	78	26	19	22	頁岩	I 層
11—3	B—9	ナイフ形石器	61	21	10	8	黒曜石	
11—4	E—9	ナイフ形石器	47	23	10	6	黒曜石	
11—5	II 群	ナイフ形石器	37	14	4	2	黒曜石	
11—6	II 群	ナイフ形石器	50	20	6	6	安山岩	先端部一部欠損
11—7	III 群	掻器	(43)	51	11	27	安山岩	
11—8	III 群	掻器	(29)	38	8	8	黒曜石	基部側欠損
11—9	I 群	彫器	84	68	15	102	頁岩	
11—10	II 群	掻器	51	22	7	9	安山岩	
12—11	I 群	掻器	104	29	17	30	頁岩	
12—12	I 群	彫器	98	53	22	90	頁岩	
12—13	I 群	錐	84	64	22	75	安山岩	基部欠損
12—14	II 群	錐	69	50	19	48	頁岩	
13—15	I 群	刃部磨製石斧	129	53	19	158	蛇紋岩	
13—16	II 群	打製石斧	116	41	18	93	蛇紋岩	

第2表　太子林・先土器時代石器計測表

図—No.	出土群グリット	名称	計測値 長さ	幅	厚	重量	石質	備考
			mm	mm	mm	g		
14—17	I 群	台石	156	110	54	970	安山岩	ストーンリターチャー?
14—18	I 群	ハンマー	(65)	61	(31)	165	砂岩	欠損
14—19	I 群	搬入石材	76	51	18	90	チャート	欠損
14—20	I 群	搬入石材	103	51	24	187	チャート	
15—21	II 群	ハンマー	158	74	83	360	砂岩	
15—22	III 群	ハンマー	171	84	61	1050	砂岩	欠損
16—23	I 群	焼け礫	191	66	52	830	砂岩	欠損
16—24	I 群	焼け礫	173	50	20	230	砂岩	タール状付着物あり
17—25	I 群	石核	95	54	54	405	安山岩	
18—26	I 群	石核	71	52	35	130	頁岩	1層
18—27	I 群	石核	64	42	25	65	安山岩	
18—28	III 群	石核	106	88	51	4 90	安山岩	
19—29	I 群	刃器状剥片	78	32	6	9	頁岩	小剥離痕あり
19—30	I 群	刃器状剥片	62	35	7	15	安山岩	
19—31	I 群	刃器状剥片	68	26	27	18	安山岩	
19—32	I 群	刃器状剥片	(42)	32	8	12	黒耀石	小剥離痕あり

第3表　太子林・先土器時代石器計測表

図—No.	出土群グリット	名称	計測値 長さ	幅	厚	重量	石質	備考
			mm	mm	mm	g		
19—33	I 群	刃器状剥片	71	36	11	26	安山岩	
19—34	I 群	刃器状剥片	147	43	12	80	安山岩	
19—35	I 群	刃器状剥片	110	36	16	46	安山岩	
19—36	I 群	刃器状剥片	117	57	21	99	安山岩	欠損
20—37	I 群	刃器状剥片	75	29	9	18	安山岩	
20—38	I 群	刃器状剥片	50	30	19	21	安山岩	欠損
20—39	I 群	刃器状剥片	55	24	12	12	安山岩	欠損
20—40	I 群	刃器状剥片	64	36	13	25	安山岩	
20—41	I 群	刃器状剥片	50	23	9	8	安山岩	欠損
20—42	I 群	刃器状剥片	56	19	8	6	安山岩	欠損
20—43	I 群	刃器状剥片	104	34	22	57	安山岩	
20—44	I 群	刃器状剥片	81	33	13	32	安山岩	欠損
20—45	I 群	刃器状剥片	(39)	30	10	11	頁岩	欠損
20—46	I 群	刃器状剥片	54	25	7	10	頁岩	
20—47	I 群	刃器状剥片	95	30	14	36	安山岩	
20—48	I 群	刃器状剥片	70	28	11	20	安山岩	

第4表　太子林・先土器時代石器計測表

図—No.	出土群グリット	名称	計測値 長さ	幅	厚	重量	石質	備考
			mm	mm	mm	g		
20—49	I 群	刃器状剥片	(38)	28	11	11	頁岩	欠損
21—50	I 群	剥片	130	42	16	56	安山岩	
21—51	I 群	剥片	98	40	11	56	安山岩	
21—52	I 群	剥片	140	28	21	30	安山岩	
21—53	I 群	剥片	76	21	11	15	安山岩	
21—54	I 群	剥片	98	40	11	11	頁岩	
21—55	I 群	剥片	46	33	6	11	安山岩	
21—56	I 群	剥片	78	43	20	61	頁岩	
21—57	I 群	剥片	40	64	16	39	頁岩	欠損
21—58	I 群	剥片	74	14	14	10	安山岩	
21—59	I 群	剥片	61	35	16	24	安山岩	
21—60	I 群	剥片	46	25	13	11	安山岩	
22—61	I 群	剥片	100	52	22	69	安山岩	
22—62	I 群	剥片	59	22	7	14	安山岩	欠損
22—63	I 群	剥片	60	31	8	10	安山岩	
22—64	I 群	剥片	61	88	15	69	安山岩	

第5表　太子林・先土器時代石器計測表

図—No.	出土群グリット	名称	計測値 長さ	幅	厚	重量	石質	備考
			mm	mm	mm	g		
22—65	I 群	剥片	66	18	6	5	安山岩	
22—66	I 群	剥片	43	78	23	64	安山岩	
22—67	I 群	剥片	28	62	15	17	安山岩	
22—68	I 群	剥片	31	52	10	14	安山岩	
22—69	I 群	剥片	44	30	12	11	安山岩	
23—70	I 群	剥片	49	36	8	10	頁岩	
23—71	I 群	剥片	47	28	8	7	頁岩	
23—72	I 群	剥片	48	37	11	16	頁岩	
23—73	I 群	剥片	54	113	11	83	安山岩	
23—74	I 群	剥片	52	53	20	41	頁岩	
23—75	I 群	石核陵付剥片	63	57	15	30	頁岩	
23—76	I 群	剥片	54	30	18	24	頁岩	
23—77	I 群	打面調整剥片	45	65	20	50	安山岩	
23—78	I 群	打面調整剥片	53	80	17	78	安山岩	
24—79	I 群	打面調整剥片	46	48	9	17	安山岩	
24—80	I 群	打面調整剥片	63	98	17	74	安山岩	

第6表　太子林・先土器時代石器計測表

図—No.	出土群グリット	名称	計測値 長さ	幅	厚	重量	石質	備考
			mm	mm	mm	g		
24—81	I 群	石核陵付剥片	124	31	12	31	安山岩	
24—82	I 群	石核陵付剥片	116	22	17	28	安山岩	
24—83	I 群	石核陵付剥片	87	22	19	22	安山岩	
24—84	I 群	石核陵付剥片	82	30	14	35	安山岩	
24—85	I 群	石核陵付剥片	84	28	19	21	頁岩	
24—86	I 群	石核陵付剥片	55	21	15	7	頁岩	
25—87	II 群	刃器状剥片	190	142	17	39	頁岩	
25—88	II 群	刃器状剥片	47	35	7	15	頁岩	
25—89	II 群	刃器状剥片	75	32	9	19	頁岩	
25—90	II 群	刃器状剥片	69	30	14	27	安山岩	
25—91	II 群	刃器状剥片	43	40	12	16	安山岩	
25—92	II 群	刃器状剥片	64	40	8	15	安山岩	
25—93	II 群	刃器状剥片	99	52	15	108	安山岩	
25—94	II 群	刃器状剥片	75	21	11	22	安山岩	
26—95	II 群	刃器状剥片	65	35	11	18	頁岩	

第7表　太子林・先土器時代石器計測表

図—No.	出土群グリット	名称	計測値 長さ	幅	厚	重量	石質	備考
			mm	mm	mm	g		
26-96	II 群	刃器状剥片	65	33	14	27	安山岩	欠損
26-97	II 群	刃器状剥片	45	19	7	6	安山岩	欠損
26-98	II 群	刃器状剥片	90	27	11	23	安山岩	
26-99	II 群	刃器状剥片	81	32	11	27	安山岩	欠損
26-100	II 群	刃器状剥片	44	27	6	5	安山岩	
26-101	II 群	刃器状剥片	84	24	7	14	安山岩	
26-102	II 群	刃器状剥片	80	24	22	38	安山岩	欠損
26-103	III 群	刃器状剥片	71	31	10	23	安山岩	欠損
26-104	III 群	刃器状剥片	63	20	7	13	安山岩	欠損
27-105	II 群	剥片	105	130	40	390	安山岩	
27-106	II 群	剥片	87	98	11	109	安山岩	
27-107	II 群	打面調整剥片	94	65	20	99	安山岩	
27-108	II 群	剥片	65	35	15	20	安山岩	
28-109	II 群	剥片	103	44	21	78	安山岩	
28-110	III 群	剥片	60	38	16	15	安山岩	
28-111	II 群	剥片	65	68	5	20	安山岩	

第8表　太子林・先土器時代石器計測表

図—No.	出土群グリット	名称	計測値 長さ	幅	厚	重量	石質	備考
			mm	mm	mm	g		
28- 112	II 群	剥片	72	74	18	105	安山岩	
28- 113	III 群	剥片	54	77	16	70	安山岩	
39-114A	I 群	彫器	104	55	35	146	頁岩	
39-114B	I 群	剥片	31	52	9	6	頁岩	
40-115A	I 群	石核	66	41	39	92	頁岩	
40-115B	I 群	剥片	57	61	19	46	頁岩	
41-116A	I 群	刃器状剥片	57	45	12	33	安山岩	
41-116B	I 群	刃器状剥片	62	28	12	16	安山岩	
41-117A	I 群	石核	89	53	28	120	安山岩	
41-117B	I 群	剥片	121	55	45	300	安山岩	
42-117C	I 群	剥片	42	120	26	82	安山岩	
43-118A	I 群	剥片	41	54	8	16	安山岩	
43-118B	I 群	剥片	49	84	13	31	安山岩	
43-119A	I 群	剥片	70	48	13	27	安山岩	
43-119B	I 群	剥片	55	68	19	47	安山岩	
44-120A	I 群	剥片	73	66	25	108	安山岩	

第9表　太子林・先土器時代石器計測表

図—No.	出土群グリット	名称	計測値 長さ	幅	厚	重量	石質	備考
			mm	mm	mm	g		
44-120B	I 群	剥片	69	61	35	124	安山岩	
44-120C	I 群	剥片	46	15	18	7	安山岩	
44-120C	I 群	剥片	99	40	29	114	安山岩	
45-121A	II 群	剥片	72	58	10	29	頁岩	
45- B	II 群	剥片	62	41	6	15	頁岩	
46-122A	I 群	剥片	54	87	24	180	安山岩	
46-122B	I 群	剥片	63	70	52	175	安山岩	
46-122C	I 群	剥片	135	129	38	635	安山岩	
46-122D	I 群	剥片	67	57	16	48	安山岩	
46-122E	I 群	剥片	91	41	8	27	安山岩	
46-122F	I 群	剥片	69	94	51	280	安山岩	
46-122G	I 群	剥片	54	52	24	25	安山岩	
46-122H	I 群	剥片	95	27	24	40	安山岩	
46-122 I	I 群	石核	123	146	97	1970	安山岩	
46-122 J	I 群	石核	134	143	79	1555	安山岩	
41-123A	I 群	刃器状剥片	60	45	11	24	安山岩	
41-123B	I 群	刃器状剥片	68	49	14	23	安山岩	

第10表　太子林・先土器時代石器計測表

第Ⅳ章　関沢遺跡

第1節　遺　物

関沢遺跡における先土器時代の石器群はⅣ層最上部あるいはⅢ層を生活面とする一枚の文化層より集中して出土したものである。出土点数は台帳に記載したもので182点，他に無記録のもの数点であった。石器組成，石質の統計は第11表～13表に示した。以下石器群の分類とその概要について記述する。

分類

本遺跡出土石器群は特徴的な石器群が多い反面，従来からの器種名に相当しにくい器種も多いことから本稿では形態・二次加工及び素材（ブランク）との関係から以下のように分類した。

A類　槍先形尖頭器を一括した。素材を押圧剥離によって整形し，縁部はさらに細部調整が施される。多くは木葉形の両面調整尖頭器であるが，柳葉形，半両面調整品も認められる。

B類　主に縦長剥片を素材とし，一方の正面端部を入念に厚形の二次加工を施して尖頭状の刃部を作出しているもの。離面は第1次剥離面をそのまま残し，多くは彎曲した面となっている。この類は幅の大きい形式と細身の形式とがあるが，これは素材による差だけかもしれない。具体的な名称としては「尖頭削器」とでも呼称されようか。

C類　様々なかたちの剥片を素材とし，その一端に厚形細部調整を施して刃部を作出したもので，「掻器」と総称されるものを一括した。その形態から，細長いものと，短いもの，丸い形態のもの等多くの形式が認められる。

D類　主として縦長剥片の縁部に若干の細部調整を施したもので，「削器」の機能が考えられる。中には従来よりナイフ形石器と考えられる石器も存在するが，多くの例は素材に対する二次加工は顕著でない。

E類　その他の石器を一括した。ノッチを有する石器，未製品と考えられるもの，小剥離痕を有する剥片等を含んでいる。

A類（第52図1～7）

総数8点出土している。（1点図示し得なかったが，これは全面がヒビ割れ状に亀裂が入っており，

剥離面も全く観察できない石器であるためである。形態は遺物分布第57図を参照願いたい。完成品は少なくほとんど折損品である。形態的には木葉形が多く，ただ1点であるが柳葉形のものも認められる（5）。2は折損した石器の再生品と思われ，離面の両基部側縁を比較的急斜な二次加工を施している。そのため他の調整箇所とは異質な感じを受ける。6は全面に平坦な二次加工を施すことは行なわれず主に縁辺にのみ入念に行なっおり，そのためかやや分厚く仕上がっている。7は半両面加工品である。正面側はほぼ全面に平坦な調整が加えられるが，離面は素材のやや高まった部分にのみ加工を施し，かろうじて尖頭器状に整えている。

A′類（第52図8・9）

8は木葉形の尖頭器折損品を再加工してドリル的機能を持たせたものであろう。9は当初第1類に含めようと考えたが二次加工の仕方により除外した石器である。離面には基部側に非常に平坦な剥離が三回行なわれる以外全く無加工である。正面側は逆に入念な二次加工が施される。第1類に比較し角度を持った剥離方法であり，横断面はカマボコ形を呈する。先端部（図上部）は基部側に比較すると尖頭状となり縦断面も直線的となっている。

B類（第53図）

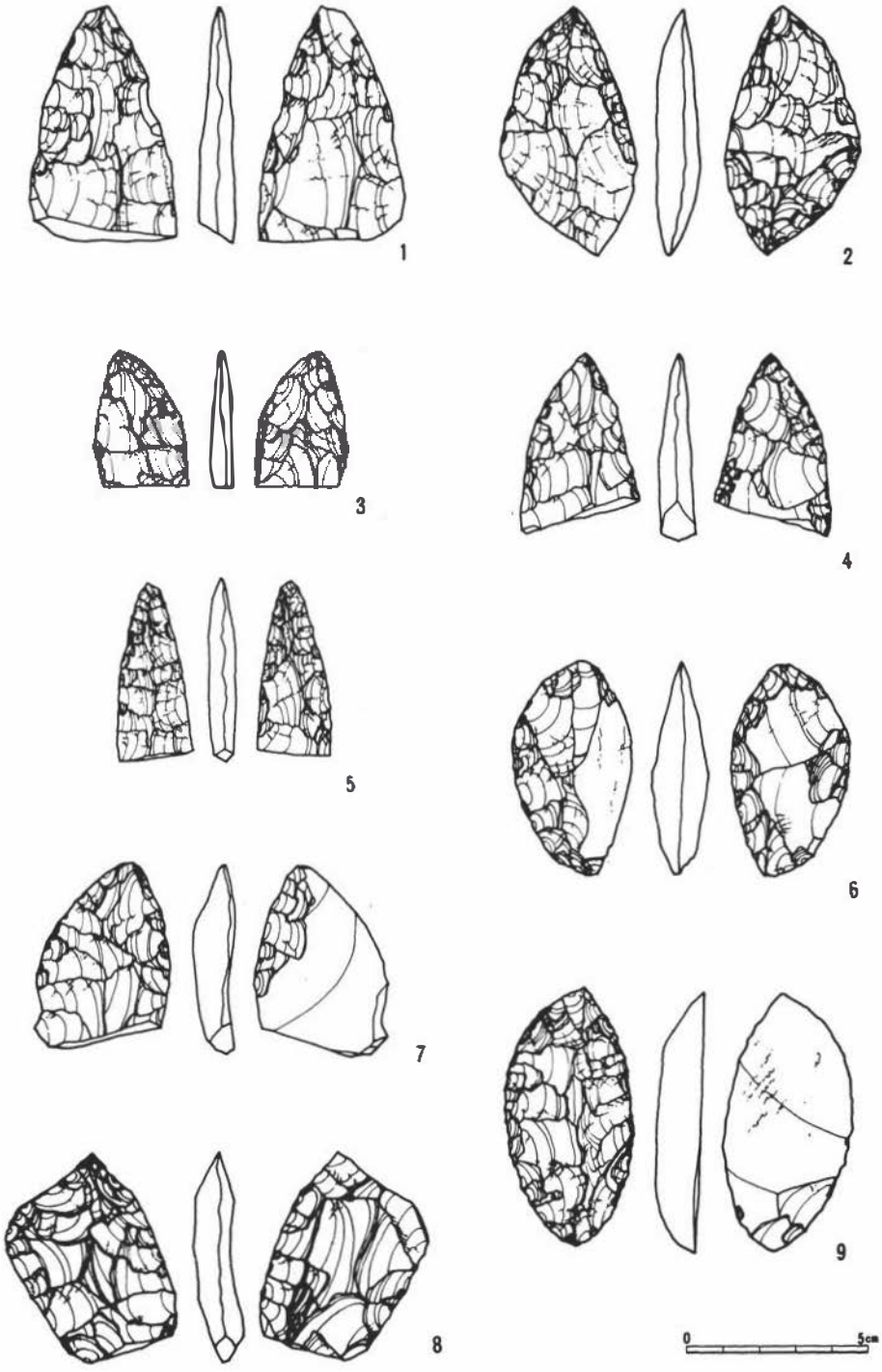
関沢石器群を特徴づける石器形式である。大別すると幅の大きい一群（10・11・12・16・17）と細身の一群（13・14・15）とがある。10は他の例とやや異なる。11は基部側にも調整が加えられ，さらに離面にも施されている。13は素材の打面側に刃部を作出したもので，唯一の例である。15は正面の稜部に自然面を残し，刃部作出加工は右縁辺のみに施される。

C類（第54図18～24）

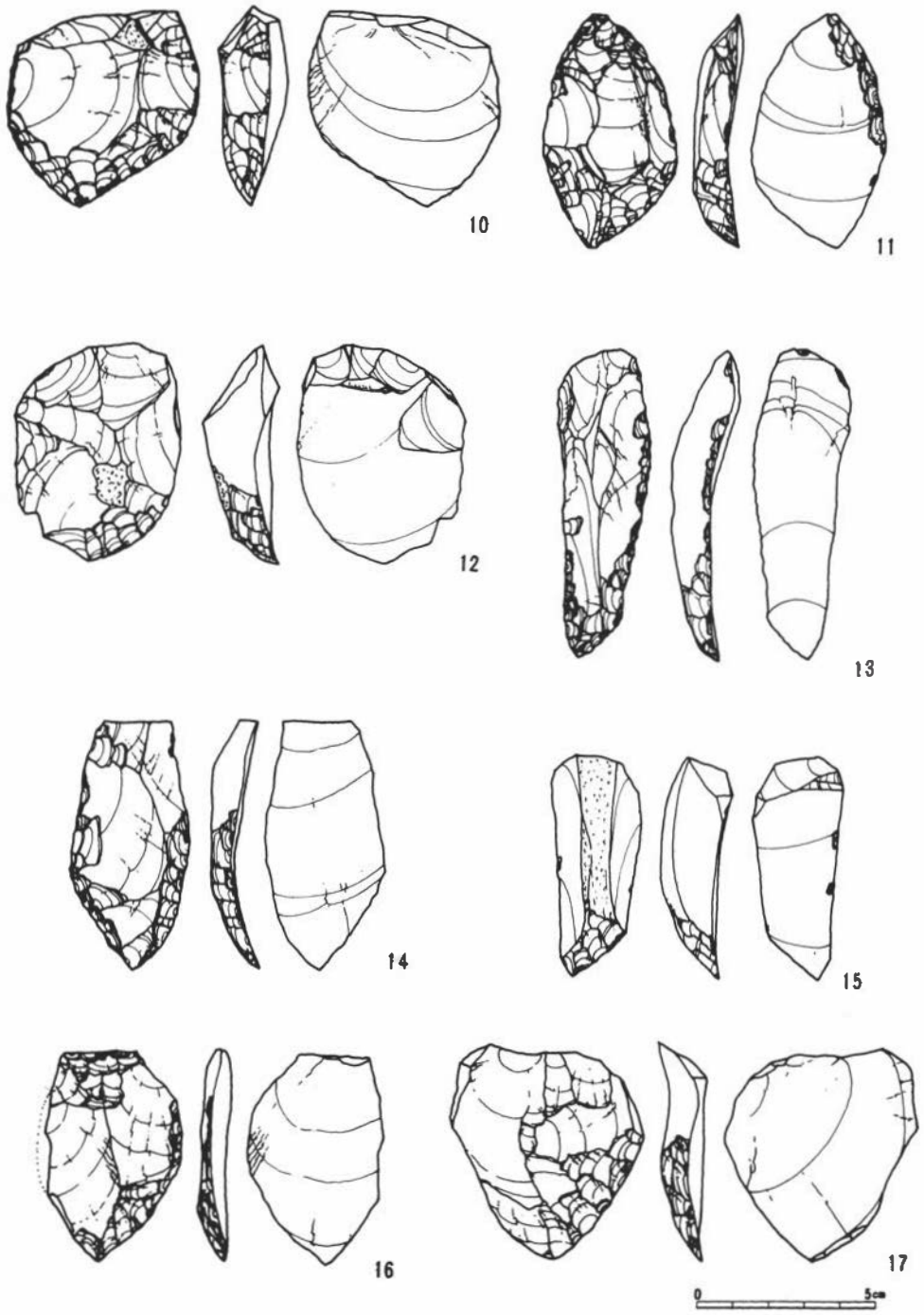
18は縦長剥片の先端部を直線的に折り取り，やや左傾した刃部を作出している。短形掻器と称すべきであろうか。19は縦長剥片の基部側に刃部を作出したものである。たぶん先端部が薄いために基部側に設けたものであろう。21はいわゆる円形掻器であるが，刃部は直線的になっている。22も21例と同形態に含めて良いだろう。ほぼ全周に細部調整が施される。23はやや形態が異なる。正面側全周に細部調整が施されるほか，裏面基部側にも平坦な加工が施される。刃部は直線的であり，やや左傾している。24は自然面を多く残し，正面右側に数回の調整剥離が施されている。

D類（第55図26～31）

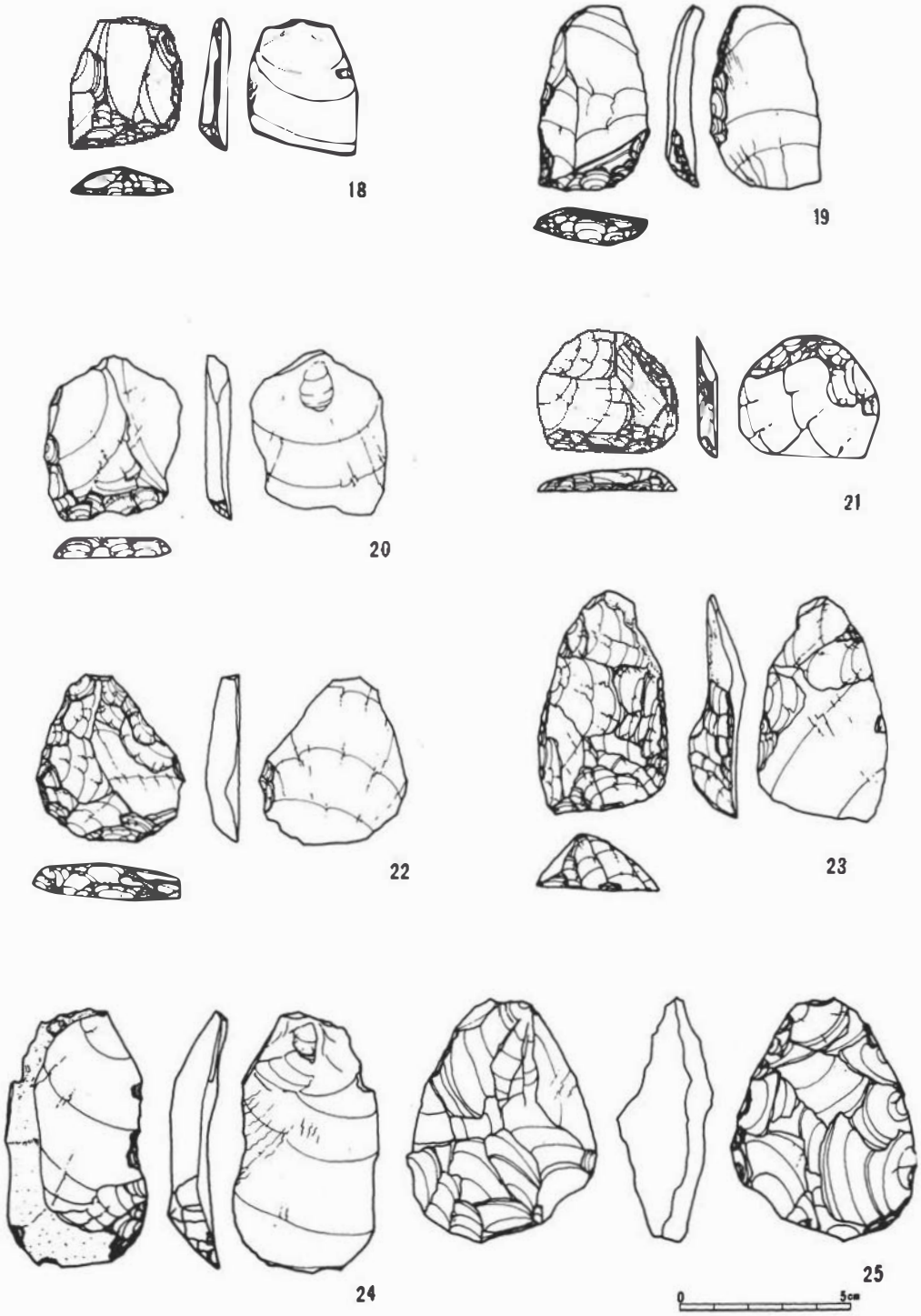
26・27はともに刃器状剥片を素材としており，縁辺に不規則な調整剥離が行なわれてい



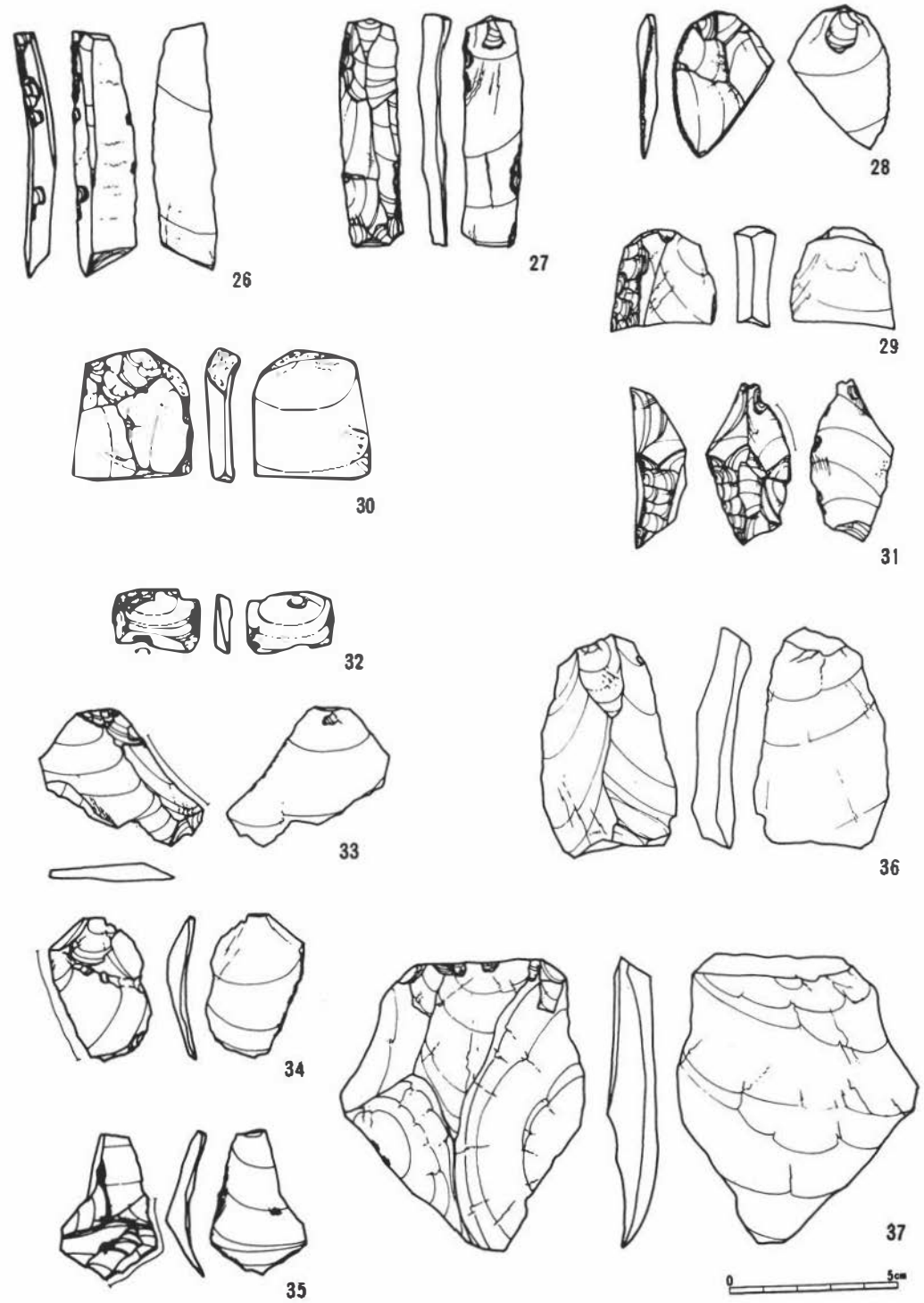
第52図　間沢・先土器時代の石器 (1)



第53図　関沢・先土器時代の石器 (2)



第54図　関沢・先土器時代の石器 (3)

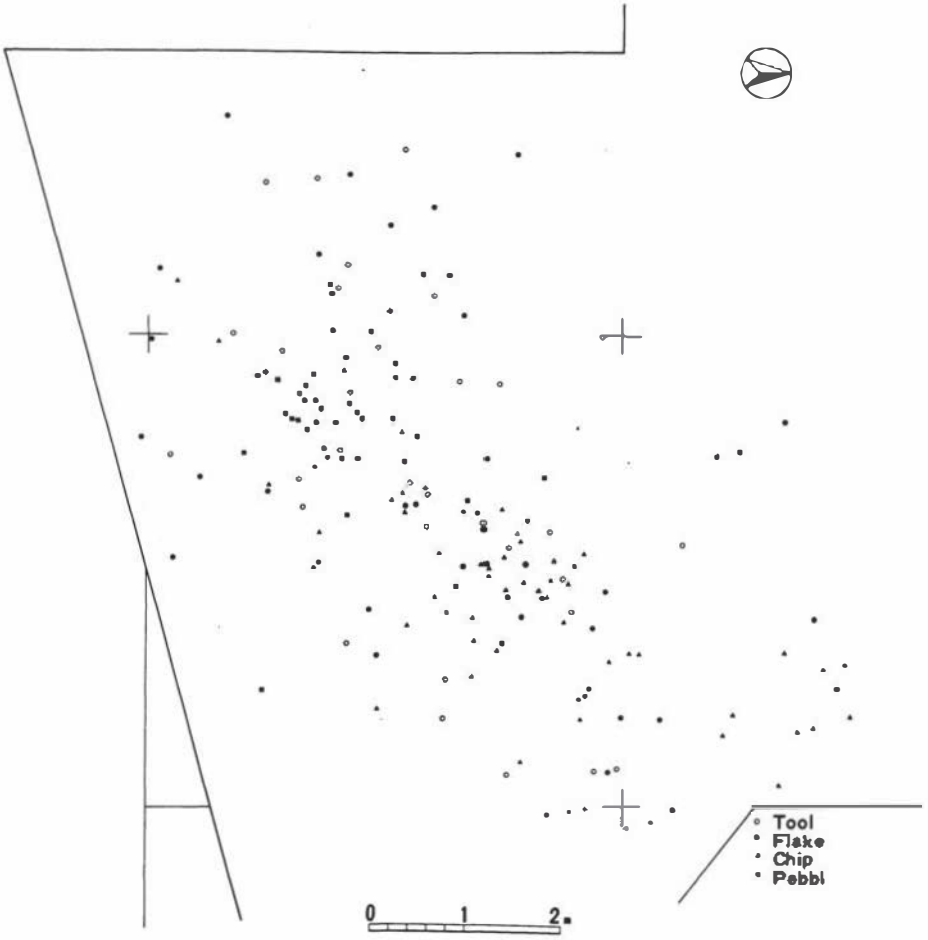


第55図　関沢・先土器時代の石器 (4)

る。両者とも第一次剥離面と 180° 逆方向からの剥離面が認められるが，これは素材作出後折り取ったものと思われる。31は正面右縁辺の基部側に入念なプランティングが施されており，いわゆるナイフ形石器と称することができる。先端部の右縁辺には小剥離痕が認められる。

E 類（第54図25，第55図32～37）

25は両面加工石器である。加工工程は正面側に荒い二次加工を施した後，裏面全面に加工が施されている。しかし，形態的には完成品とは思われず，I 類の未製品かもしれない。32は小形のノッチが認められる石器である。33～35は目的外の剥片と思われるが，それぞれ小剥離痕の認められる縁辺を有する。36，37は剥片である。ともに打面を残すが，その剥離角は45°，52° と鋭角である。



第56図　関沢・遺物分布図

第２節　遺物の遺存状態

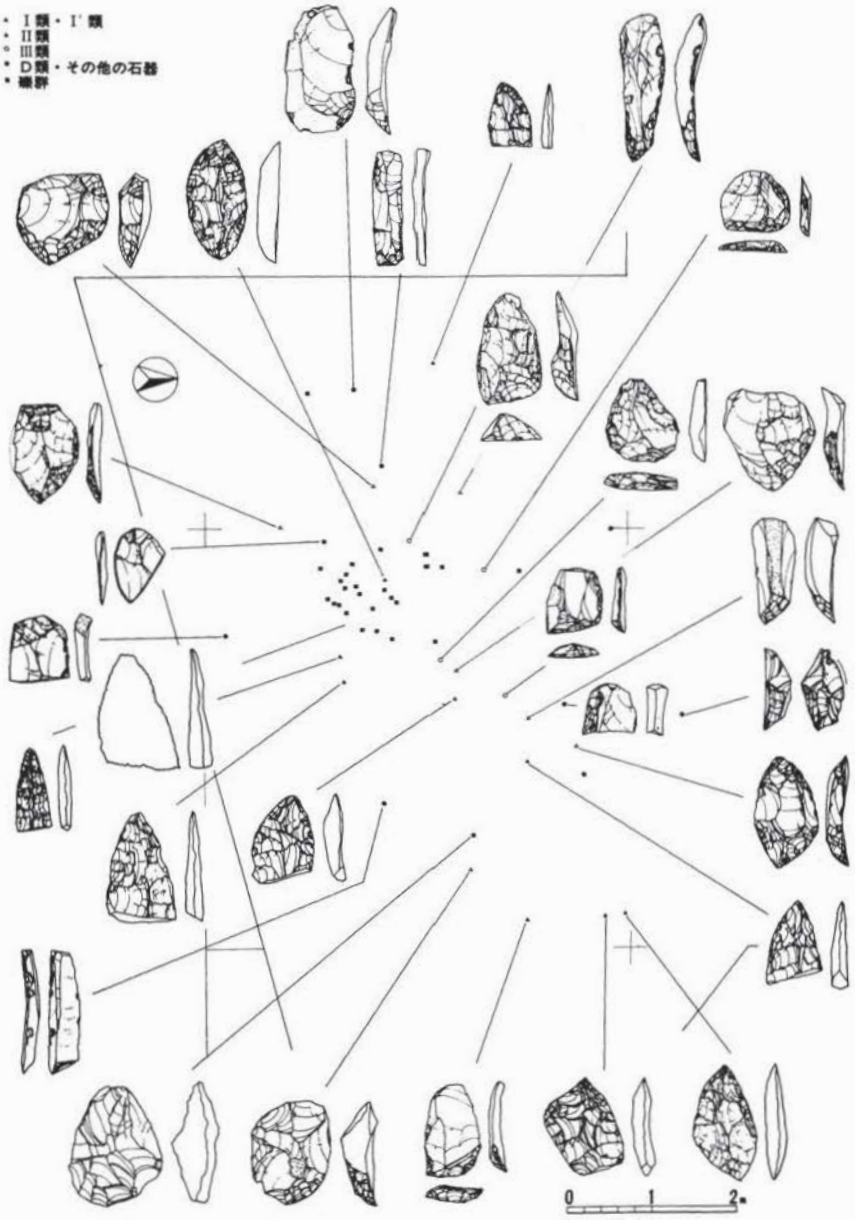
関沢遺跡における遺物分布は，約８×５ｍの範囲で集中的に出土したもので，このまとまりを「ユニット（Unit）」と呼称することにする（第56図）。ユニットは礫群，石器，剥片，砕片で構成される。以下，各構成群について説明を加えたい。

礫群　ユニットの中心よりやや南西側に位置する。大小の礫約20点によって構成されるが，大きい礫は直径約８cm，小さい礫は直径約３cmであり，比較的楕円の礫が多い。大部分の礫は赤褐色あるいは乳褐色を呈し，また火割れによって破損している例も多い。また一部の礫についてはタール状付着物が認められる。規模は100×120cmである。

石器　石器には前節に示したような多くの種類が存在する。ユニット内分布では，ほぼ全面に存在し，部分的に偏在する傾向は認められない。ただ，第59図に示したように各種類によって若干のパターンが認められるようである。これについては第Ⅴ章で触れたい。

剥片　ユニット内では偏在する傾向は認められない。剥片には石核調整剥片，目的的剥片（ブランク）があるが，本ユニットでは調整剥片と考えられるものがほとんど認めることができなかった。

砕片　ユニット東側を中心として分布する。砕片は0.5～1cmと小さく，そのため竹ベラ・竹櫛により入念に検出した。出土レベル幅は10cm以内である。ユニット東側に集中したことによって，ここで二次加工が行なわれたことを示唆する。



第57図　関沢・主要石器分布図

挿図番号	台帳番号	分類	計測値 長さ	幅	厚	重量	石質	備考
			mm	mm	mm	g		
52—1	3T 19	A	65	41	10	21	頁岩	折損品
52—2	B2 1	A	69	39	13	21	頁岩	完形品（再生）
52—3	B3 22	A	37	26	7	7	頁岩	折損品
52—4	B2 24	A	53	32	11	11	頁岩	折損品
52—5	B2 80	A	50	21	8	5	頁岩	折損品
52—6	B2 表	A	59	33	16	24	頁岩	完形品
52—7	B2 66	A	52	37	12	16	頁岩	折損品
52—8	B2 [illegible]	A′	53	38	13	27	頁岩	折損品を再加工
52—9	B2 101	A′	72	36	13	32	頁岩	完形品
53—10	B3 8	B	56	53	18	45	頁岩	完形品
53—11	B2 36	B	66	37	14	28	頁岩	完形品
53—12	3T 9	B	61	47	23	37	頁岩	完形品
53—13	B3 18	B	87	26	15	21	頁岩	完形品
53—14	B2 69	B	70	34	14	20	頁岩	折損品
53—15	B2 52	B	64	26	20	25	頁岩	完形品
53—16	B2 133	B	60	38	9	17	頁岩	一部欠損

第11表　関沢・先土器時代石器計測表(1)

挿図番号	台帳番号	分類	計測値 長さ	幅	厚	重量	石質	備考
			mm	mm	mm	g		
53—17	B2 67	B	59	55	12	28	頁岩	一部欠損
54—18	B2 57	C	40	33	9	11	頁岩	完形品
54—19	B2 9	C	54	32	12	13	頁岩	完形品
54—20	B2 81	C	48	40	8	17	頁岩	完形品
54—21	B2 73	C	36	40	7	14	安山岩	完形品
54—22	B2 74	C	49	44	10	21	安山岩	完形品
54—23	B3 1	C	65	38	16	36	安山岩	完形品
54—24	B3 13	C′	77	42	17	38	頁岩	完形品
54—25	B2	E	70	55	22	69	頁岩	未製品?
55—26	3T 13	D	74	19	11	10	頁岩	基部欠損
55—27	B3 10	D	68	17	9	9	頁岩	完形品
55—28	B2 114	D	43	31	6	6	頁岩	折損品
55—29	B2 42	D	31	30	10	10	頁岩	折損品
55—30	3T 23	D	40	36	9	11	頁岩	折損品
55—31	C2 15	D	49	25	16	12	黒曜石	小剥離痕・パンチ痕
55—32	C2 19	E	20	26	5	3	黒曜石	ノッチ?

第12表　関沢・先土器時代石器計測表(2)

挿図番号	台帳番号	分類	計測値				石質	備考
			長さ	幅	厚	重量		
			mm	mm	mm	g		
55—33	B 3 2	E	41	48	6	6	頁岩	小剝離痕
55—34	C 2 3	E	43	29	8	6	頁岩	少剝離痕
55—35	B 2 97	E	44	29	12	6	黒曜石	小剝離痕・折損品
55—36	B 3 12	E	60	40	19	29	頁岩	
55—37	3 T 21	E	87	72	15	77	砂岩	

第13表　関沢・先土器時代石器計測表(3)

第V章　成果と課題

第1節　太子林遺跡

先土器時代の遺物出土状態について

先土器時代の遺物が出土した地区は，平均斜度13度という急傾斜地での出土であり，私たちは当初よりin stiuの状態であるのか疑問であった。調査地区内で検出された三箇所のまとまりも，従来からの概念で把握して考えて良いものかどうか躊躇せざるを得なかった。すなわち，検出された遺物群の「まとまり」を「有意な」ものと考えて，〈ユニット〉・〈ブロック〉あるいは〈スポット〉の名称を与えてアプローチして差し支えない出土状態であるのかという〈まとまり〉の前提条件が問題となったのである。

そのような意味で，私たちは〈群〉という名称を与えた。これは，単に遺物の集まりという考え方であって，〈クラスター(CLUSTER)〉の概念である(E・D・Bone　1977)。

さて，この群の構成について第I群を主に分析を試みたがかなり不十分なものとなってしまった。現象的には群の分割が考えられたが，接合資料・各分割区の構成差からは証明できなかった。むしろ，接合関係から観察する限りには地形的要因，すなわち，自然営力によって動いたと考える方が首肯されそうである。ただ，第8接合資料例はほぼ原位置を保持していると考えられ，丘陵縁辺に〈ユニット〉を構成していた石器群が自然営力によって丘陵斜面に流出したという考え方もまた否定的である。

一方，三箇所に認められた石器群に技術的差異は認められず，また石材・層位的にも一致している。群間接合によって補強されるべきであるが，これら三群はほぼ同一時期の所産と考えて差し支えあるまい。

したがって，太子林遺跡に占居した集団は丘陵頂部の平坦部に占居していた事も十分に察知されるが，丘陵斜面にも占居し，かなり広範囲なセトルメントを保有して活動していたと考えられる。今まで丘陵乃至は台地の斜面に調査が及んだ例は少ないと思われる。千葉県臼井南遺跡もその少ない調査例であるが（小田ほか　1975)，このように比較的急な斜面に広範囲に占居する例を「太子林セトルメント」と呼称しておきたい。

以上，現象的な観察に終始してしまったが，今後各石器の出土状態をさらに分析して太子林遺跡の居住について明らかにしていきたいと考えている。

遺物について

二次加工を施した石器は，石器総数の僅か４％ながらナイフ形石器，掻器，彫器，錐，石斧等バラエティに富んでいる。

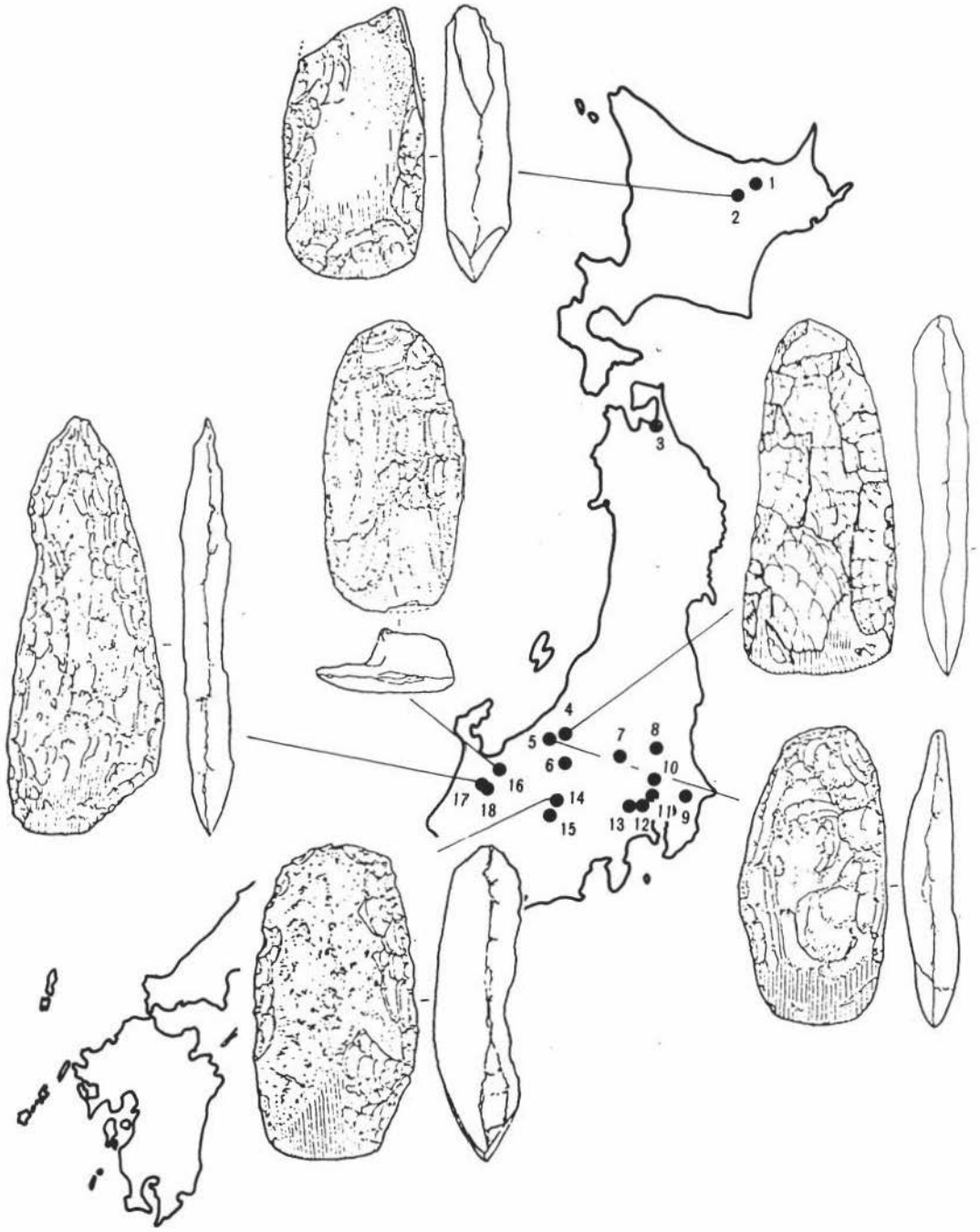
その中で６点と最も多いナイフ形石器は，ａ，ｂ形に分類した。ａ形は中形の刃器状剥片を素材として，素材を大きく変形させることなく基部・先端部にブランティングを施したものである。ｂ形は比較的小形の剥片を素材とし，素材を大きく加工して尖頭状に仕上げたものである。ナイフ形石器において，いわゆる「杉久保形」，「東山形」，「茂呂形」，「国府形」が「形」から「型」に移行したのは恐らく1960年代初期以降と思われるが，その時点における「型式」としての認定方法あるいは概念に明確さが足りなかったと思われる。確かに「国府型」ナイフ形石器は，その素材に翼状剥片を用い時間的・空間的分布・石材にも限定性があり，「型式」として認定するに首肯される点がある。しかし，「東山型」・「茂呂型」ナイフ形石器にはその設定理由が既に失なわれた感がある。

本遺跡出土ナイフ形石器の「ａ形」・「ｂ形」は従来からの型式名で言えばそれぞれ「東山型」・「茂呂型」に相当しようか。このように一遺跡一時期におけるナイフ形石器を分類するならば単一型式のみで構成されるのはむしろ例外的であろう。一遺跡一時期におけるナイフ形石器にいくつかの「型式」が認められるのは，「一型式」として成立し得ないと思われるのである。これはナイフ形石器＝一器種と誤認されているところに理由がある。ブランティング技術をもってナイフ形石器と認定するならば，これは石器製作技術上の区分であって少なくともナイフ形石器という「形式」＝「器種」は成立しないのである。

かつて，戸沢，小田両氏等はナイフ形石器の形態分類を行なったことがあるが（戸沢・1968，小田・1974），本遺跡の二分類も「型式」ではなく形態分類の概念に因る。

因に，本遺跡より約15km北方の小坂遺跡でもａ・ｂ両形態が存在する（高橋ほか 1976）。このことは，前述してきたように単に「文化系列」の「交差点」と解するよりも他の理由を求めるべきであろう。

次に刃部磨製石斧について触れておきたい。古くは長者久保遺跡・神子柴遺跡等先土器時代終末期における刃部磨製石斧が数例検出されていたのみであったが，近年に至り特に中部日本において続々と検出されており，またその出現時期も先土器時代初期に遡ることが判明した。その数は約20例にもなろうか。小田静夫，Ｃ・Ｔ・キーリー氏等はこの刃部磨製石斧について編年を行なっている（Oda・Keally　1973，小田　1976）。それによれば１～IIIのタイプとそれぞれａ・ｂ・ｃ及びａ・ｂのサブタイプに分類し，１～IIIのタイプ



第58図　先土器時代刃部磨製石斧出土遺跡とタイプII（小田ほか 1973）の刃部磨製石斧

1.吉田S地点　2.置戸安住　3.長者久保　4.太子林　5.杉久保　6.鷹沢B地点
7.岩宿　8.磯山　9.三里塚No.55　10.風早　11.栗山　12.高井戸東　13.鈴木
14.茶臼山　15.神子柴　16.直坂　17.鉄砲谷　18.ウワダイラI

は時期的に変遷し，発達していくことを示唆した。タイプⅠには東京都鈴木，同高井戸東，千葉県三里塚No.55，埼玉県風早，群馬県岩宿の5遺跡出土例を挙げ，タイプⅡには長野県茶臼山，同杉久保，富山県直坂，同鉄砲谷，北海道置戸安住の各遺跡，タイプⅢは長野県神子柴，青森県長者久保遺跡出土例を挙げている。そして，編年的にはタイプⅠを南関東の編年Phase Ⅰ・Ⅱa，タイプⅡをPhase Ⅱa・Ⅱb・Ⅲ，タイプⅢをPhase Ⅳとした。本遺跡出土例は，富山県鉄砲谷遺跡出土例に最も近似する。鉄砲谷例とは刃部形態が異なるが，報文（西井 1973）では「刃先の一部を除いて原形をとどめて」と記載されており，本来は太子林遺跡例と同形態の刃先であったと考えられる。編年的には鉄砲谷遺跡がPhase Ⅱbに位置づけられており，本遺跡も石器組成からは矛盾せずほぼ妥当とされよう。

以上，特徴的な二種類の石器について述べてきた。太子林遺跡石器群の研究は，ナイフ形石器・刃部磨製石斧を含め，本石器群の製作技術を明らかにするところからまず始めなければならない。本報告段階では時間的余裕から行なうことが出来なかったが，今後の第一課題としておきたい。

第2節　関沢遺跡

関沢ユニットについて

関沢遺跡は僅か140㎡を調査したに過ぎず，遺跡のごく一部を検出するに止まった。しかし，8×5mの範囲に礫，石器等が集中的に出土し，一単位のほぼ全体を露呈させることができたことは大きな成果であった。私たちは，この一単位を人間行動の結果を示すものとして〈関沢ユニット〉と呼称した。

ユニットの概念は東京都野川遺跡において実践され（野川遺跡調査会・1971，小林・小田・1971），行動型としてユニットタイプが提示された。さらに武蔵野公園遺跡の調査において，一時的におけるユニットタイプの総体から〈コンポーネントタイプ・遺跡の型式〉を提唱した（小田・C. T. Keally・1973）。その後，小田静夫氏は炭化物片，礫群をユニットタイプにからめた新ユニットタイプを1～7分類している（小田・1977）。一方，埼玉県砂川遺跡では個体別資料を通して人間行動の痕跡を辿る，いわゆる構造的な分析を行なっている。また東京都多摩蘭坂遺跡では，個々の遺物の綿密な分析により多くの成果を挙げた（永峰・安孫子・堀井編・1980）。

このような状況下で，本遺跡の調査は一部を検出したのみで，遺跡の全体像を暴くには

至らなかったため関沢遺跡の情報量はごく少ない。本稿では〈ユニット〉と称した集中箇所について分析を行ない，関沢遺跡の総体を解明する一歩にしたいと思う。

関沢ユニットは，南北に5m，東西に8mの規模で，その構成は礫群を中心として，A～D類の石器，剥片，砕片よりなる。礫群は1ヶ所で，中央部分よりやや南西側に位置する。分類別遺物分布は，第59図に示すように礫群とすべて関係するような配置にあり，ユニットの分割は認められない。その意味では，このユニットは一単位として見做して差し支えないと思われる。器種的には，B・C類が礫の周辺に出土しているのに対し，A類は東西の両端より出土する傾向を見せている。

礫群は，東京都野川遺跡以来科学分析を通して厨房跡と推定している。ただその出土状態については幾つかの状況が考えられ，私たちも以前に触れたことがあった（高橋ほか・1976)。関沢遺跡例については，破損礫が近辺ですぐ接合すること，レベルが同一であり集中的に出土すること等により，機能が行なわれた場所であると考えられる。このことは炭化物粒の検出によってさらに補強されるべきであるが，水田床土直下に包蔵されていた事と我々の注意不足により不明確となってしまった。ただ礫群のすぐ周辺から出土した黒曜石剥片（35）は，明らかに火熱を受けたと考えられるのでこの考えを支持する材料となろう。

次に，砕片の分布はユニット東側に認められる。石質は頁岩がほとんどを占める。一方，石器A～C類の作出にかかる第一次工程の剥片類が極めて少量である。また石核も見当たらない。したがって，これらの石器製作は素材（ブランク）作出までは他の地区で行なわれ，本ユニットへ持ち運ばれたと考えられるのである。このような現象は，新潟県月岡遺跡出土の月岡ユニットにも見受けられる（中村・小林・1976)。なお，剥片，砕片に見当らない石質を母岩とする石器は，他地点より製品として持ち運ばれたと考えられる。たとえば，A類の1・2・5・6，B類の10・13・14などがこれに該当する。

いずれにしても，本ユニットが恒常的な生活の場と考えるのが妥当と思われ，そのユニット内で，石器製作（主に二次加工),厨房施設などが一空間として占居したと推定される。

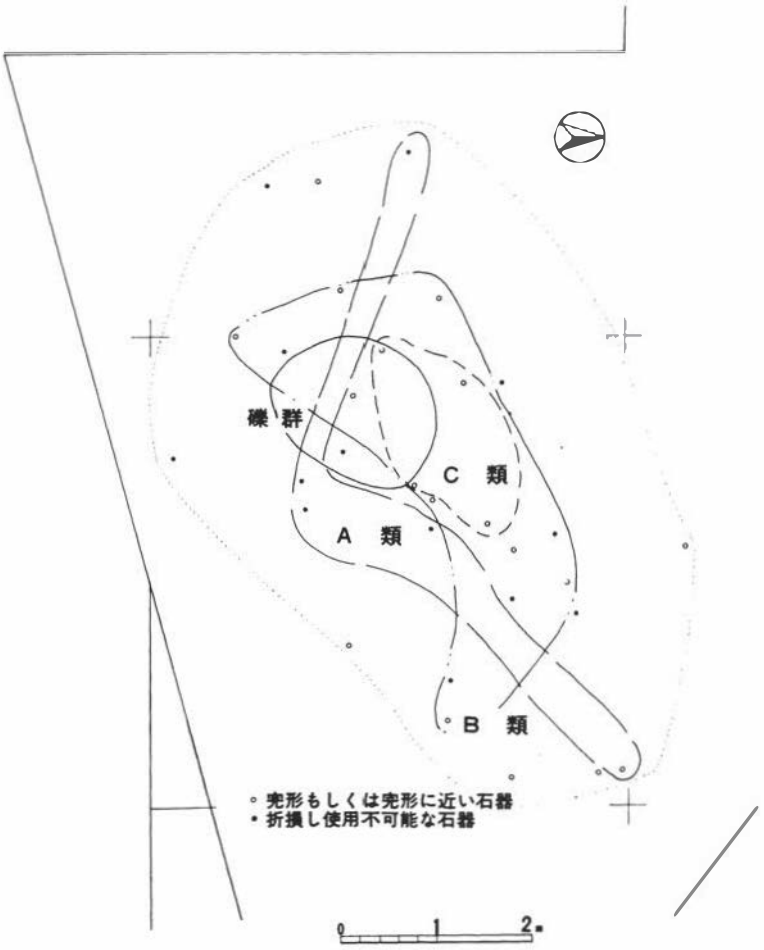
遺物について

本遺跡の石器群は，第B類，C類にみられるように縦長剥片を素材としており，また刃器状剥片と思われる石器も認められるところから，技術基盤はいわゆる刃器技法に基づいているものと思われる。ただ，A類等の一部には横長剥片を用いている石器も存在すると

ころから，刃器技法のみに基盤をおいているとは思われず，他の技術も所有していたことが窺える。むしろ，刃器技法の崩壊と新技術の出現と表現した方が妥当かもしれない。

D類の石器はほとんど素材を変形させることなく加工を施して石器とし，C・B→Aと順次二次加工の度合いが大きくなり，A類はほぼ全面が二次加工によって覆われる。すなわち，D類はほとんど素材によって「かたち」が決定するのに対し，A類に至ってはその剥片（ブランク）の大きさのみによって素材が選択されることを示している。

さて，遺物は槍先形尖頭器を特徴的な組成としており，ナイフ形石器の盛行以後に位置づけられることは了解されよう。槍先形尖頭器は，最大幅が胴部中央部にある菱形の尖頭器を主体としており，細身の柳葉形の尖頭器も認められる。尖頭器としてはほぼ完成され



第59図　関沢ユニット・類別分布概念図

た姿である。また「尖頭削器」としたB類は従来「尖頭器」・「ナイフ形石器」の分類に含められていたものであるが，明らかに異なった形態と二次加工を施しており，一器種と見做せる石器類である。

本石器群はこのA，B両類，およびC類を主体とする石器群として位置づけられる。そして，編年的にはナイフ形石器の盛行以後と考えておきたい。

太子林・関沢両遺跡は，野川編年（小林・小田　1973）では，太子林が野川II期，関沢が野川III期に位置づけられる。ただ，関沢遺跡石器群については，III期のどの時期に位置づけられるか，若干の見通しはあるが今後の課題としておきたい。

第Ⅵ章　ま　と　め

奥信濃先土器文化の究明は，昭和30年代初頭神田五六・永峯光一両氏によって開拓された。先土器文化研究略史の中で望月静雄が触れているように，それは下水内郡栄村横倉・小坂両遺跡の発掘調査であった。その後，飯山北高等学校地歴部諸君に引継がれ，続々として先土器文化の遺跡が発見されるにいたった。それは，先土器文化地名表に明らかなとおりである。発見された先土器文化の遺跡は，当地方を貫流する千曲川の段丘や近接する低丘陵上にほとんどが立地している。このことは新潟県中越地方と全く規を一にしている。

飯山市瑞穂地区はその中にあって先土器文化の宝庫といえよう。地理的環境の項で触れているように瑞穂地区の千曲川辺りはかつては河岸段丘面であり，三国山脈より流出する小河川によって浸食されあたかも残丘状の地形が千曲川辺りに認められるにいたったといえよう。

関沢丘陵・太子林丘陵・宮中丘陵もかつては連続して千曲川の段丘面であったと考えられる。さて，太子林遺跡は地元の小中学生によって石器類が採集されており，縄文時代の遺跡として把握されていた。ただ今回調査した地域の南方で先土器文化所産と考えられる石器が数点採集されているところから，あるいは先土器文化の遺跡が存在するのではないかとの予測も若干私達の意識の中には存在した。

調査の結果は私達の予測をはるかに上廻る先土器文化の成果が得られた。太子林遺跡についてみれば，「成果と課題」の項で指摘しているように遺物は相当の傾斜面から出土しており，プライマリーな状態とは考え難い。従ってユニットとするよりここでは「群」として把握するのが適当であろう。その理由は，恐らく何等かの外因的作用によって移動したものと考えられるからに他ならない。ただ，個々にそれぞれが移動したものでなく，まとまりを持って移動したものと思われる。それは遺物の分布範囲が限定されているところからもいえるであろう。くどいようだが，これほどの傾斜面では人間の居住空間とするには無理であると考えられるからである。以上のような観点から一般的に認容されているユニットの概念にあてはめるには無理があり「群」として把握しておいた訳である。将来このような傾斜面の出土例をまって再検討する必要があると考えている。

出土石器の接合関係から観察すると，各群の縦の接合関係は認められるけれども，横の接合関係が全く認められないことも遺物が移動したといえるであろう。次に太子林遺跡の

特徴的な成果と問題点について触れておこう。

まず何といっても刃部磨製石斧の検出であろう。刃部磨製石斧については近時その資料が増加しており，編年的研究もなされている。従って先土器文化の中においてどのような石器群と組み合わされているのか今後の資料の集積と分析に大きな興味を抱くところである。次にナイフ形石器についてみよう。千曲川下流域に分布するナイフ形石器は杉久保型とか東山型とかいわれ，その形態によってあたかも文化的内容が異なるかのように解釈されてきた。私達は今回の調査を通じて，従来のタイプによって分類すれば「東山型」，「茂呂型」に該当するナイフ形石器が共伴する事実を確認した。従ってこの事実を謙虚に受取め，従来いわれてきたような「型」による相異が即文化的相異に基づくとか，交流によるとかというがごとき単一的な考え方を捨て去ってもっと広い意味で石器組成を見直す必要を痛感している。

ところで太子林遺跡の発掘調査で私達がまず反省しなければならない点は，遺物の出土，礫の存在と位置，地質の性格との問題であろう。先土器時代の石器のほとんどは黄褐色土層に若干喰い込んで出土した。しかし，はっきりいって太子林を中心とした地域では黄褐色土の堆積は認められるけれどもこれが果してローム層とよぶことができるかどうか甚だ疑問である。また同時に太子林遺跡では多くの礫が認められた。まさに累々とした礫群といった方がよいかもしれない。そしてこの礫は果してこの黄褐色土といかなる関係であるのか解明できなかったことである。この点については今後の研究課題としておきたい。

次に縄文時代前期の有尾式土器についてである。発掘地域の各地から破片だけが点々と出土した。この点から考えれば，有尾式土器を担った人々の占居地は発掘地域上方と考えてよいであろう。破片の中には重要な意味を持つものもあるが，今回は先土器文化に視点を置いたために出土土器のほんの一部のみ紹介するにとどめた。今後機会をみて発表したいと考えている。

次に関沢遺跡について触れよう。「成果と課題」の項で触れているようにここはまさに従来指摘されているように「ユニット」と認定されてよいものであろう。そういう点では当に成功した発掘であった。そして出土した石器も問題となるものばかりである。この遺跡出土の石器が果して編年的にどの位置に属するかは今後の課題としてもナイフ形石器に後続することは確かであろう。しかし，それはそれとしても関沢遺跡出土の槍先形尖頭器をどのように年代的に位置づけされ，日本の先土器文化の中でどのような意味をもつもの

かは今後の研究にかかっているといえよう。更に石器製作上の問題も今後の重要な課題といえよう。

なお，関沢遺跡は遺跡全体からながめた場合調査地域はごく限られたものであった。このようにごく限定された地域から問題のある石器が出土したことから考えて，近辺の未発掘地域にどのような遺物が眠っているのか非常に興味と期待がもたれるところである。具体的には工事が施行される段階では更に調査を施行する必要があることを指摘して関沢遺跡の項を終りにしたいと思う。

いつものことながら，調査を終了してみると不備だらけのことに気がつく。あれもしておけばよかった，これもすべきであったと考えるのであるが後悔先に立たずである。これは緊急発掘調査という時間的，予算的制約に基づいているといえばいいすぎであろうか。一度でいい，時間的制約・予算的制約にとらわれず充分に納得いく発掘調査を行ないたいと考えるのは筆者等のわがままであろうか。

末尾ながら発掘調査に御協力頂いた作業員の皆さん，地元の区長さん，あたたかい励ましと差し入れをして下さった地元市議の阿部武義氏，その他調査に関与された関係諸氏・諸機関に対し心からなる謝意を捧げたいと思う。

引用・参考文献

ア　安蒜政男　1979　「石器の形態と機能」　日本考古学を学ぶ (2)

イ　稲田耕司　1969　「尖頭器文化の出現と旧石器石器製作の解体」　考古学研究15—13

オ　小田静夫・C.T.keally　1973　「武蔵野公園Ⅰ」　野川遺跡調査会

Shizuo Oda and C.T.keally　1973　「EDGE-GROUND STONE TOOLS FROM THE JAPANESE PRECRMIC CULTURE」　物質文化22

小田静夫・宮崎博・C.T.keally　1974「調布市仙川遺跡」　東京都埋蔵文化財調査報告第2集

小田静夫　1975　「石神第1地点」　臼井南所有

小田静夫　1976　「日本最古の磨製石斧」　どるめん11

小野勝年　1953　「下高井地方の考古学的調査」　下高井所有　長野県教育委員会

織笠　昭　1979　「ナイフ形石器と切出形石器—東京都武蔵野台地第Ⅳ層の例から」　神奈川考古　第9号

カ　加藤　稔　1973　「東北地方の旧石器文化」　山形中央高等学校研究紀要3

神田五六・永峯光一　1958　「奥信濃横倉遺跡」　石器時代5

コ　小泉武栄　1980　「瑞穂の地形分類」　新編瑞穂村誌所有　瑞穂村誌刊行会

小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男　1971　「野川先土器時代遺跡研究」　第四紀研究10—4

シ　白石浩之　1973　「茂呂系ナイフ形石器の細分と変遷に関する一試論」　物質文化　第21号

白石浩之　1979　「尖頭器石器群研究の現状と展望」　神奈川考古第9号

ス　鈴木道之助・清藤一順・大原正義　1978　「佐倉市星谷津遺跡」　千葉県文化財センター

タ　高橋　桂　1962　「北信濃小坂遺跡の調査」　考古学雑誌48—3

高橋桂ほか　1976　「栄村小坂遺跡緊急発掘調査報告書」　栄村教育委員会

高橋桂・中島庄一・金井正三　1976　「北信濃大倉崎遺跡発掘調査報告」　信濃28—4

高橋桂・大原正義編　1977　「遺跡分布調査報告Ⅰ」　飯山北高等学校地歴部ＯＢ会

高橋　桂　1979　「縄文後期の集団墓地があった」　日本の屋根10

高橋　桂　1980　「瑞穂のあけぼの」　新編瑞穂村誌所有　瑞穂村誌刊行会

高橋　桂　1980　「宮中遺跡発掘調査—石棺状遺構を中心として—」　新編瑞穂村誌補遺　瑞穂村誌刊行会

竹岡俊樹　1980　「石器研究の方法とその見通し」　考古学基礎論2

田中英司ほか　1979　「風早遺跡」　庄和町教育委員会

ナ　永峯光一・安孫子昭二・堀井昌子編　1980　「多摩蘭坂遺跡」　国分寺市教育委員会・恋ヶ窪遺跡調査会

中村二郎　1962　「飯山地方周辺の地質」　信濃教育第907号

ニ　西井龍儀・山本正敏　1973　「鉄砲谷・向山島・是ヶ谷遺跡」　富山県教育委員会

ハ　橋本　正　1977　「直坂II遺跡第5ユニットから」　どるめん15

ヒ　樋口昇一・大久保知己ほか　1970　「有明山社」　長野県考古学会研究報告書9

ホ　E.D.Bono　1977「An Illustrated Dictionary of Vital Words」European Services Ltd.

図版二　太子林遺跡

▲ 調査風景（南より）

▼ 層　序（E — 10）

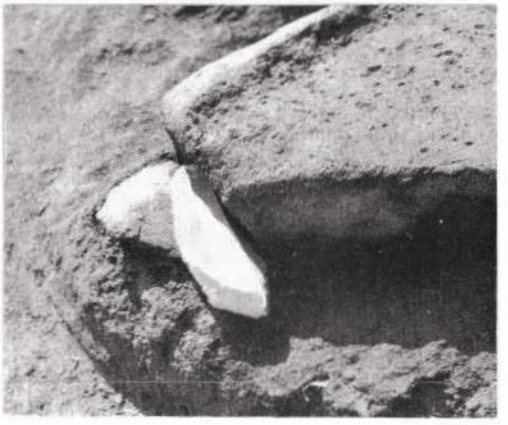
図版三　太子林遺跡（調査風景）

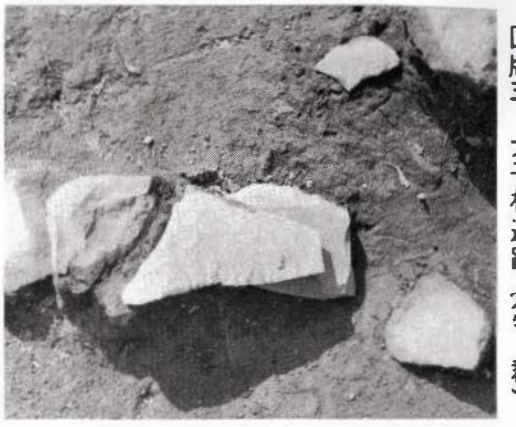
図版四　太子林遺跡

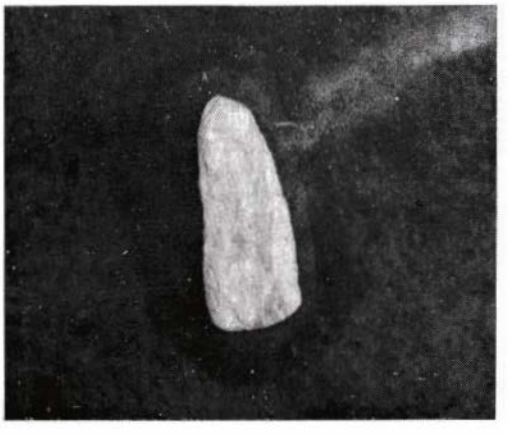
▲第Ⅰ群（B－2）

▼第Ⅰ群（B－2）南より

図版五　太子林遺跡（第Ⅰ群）



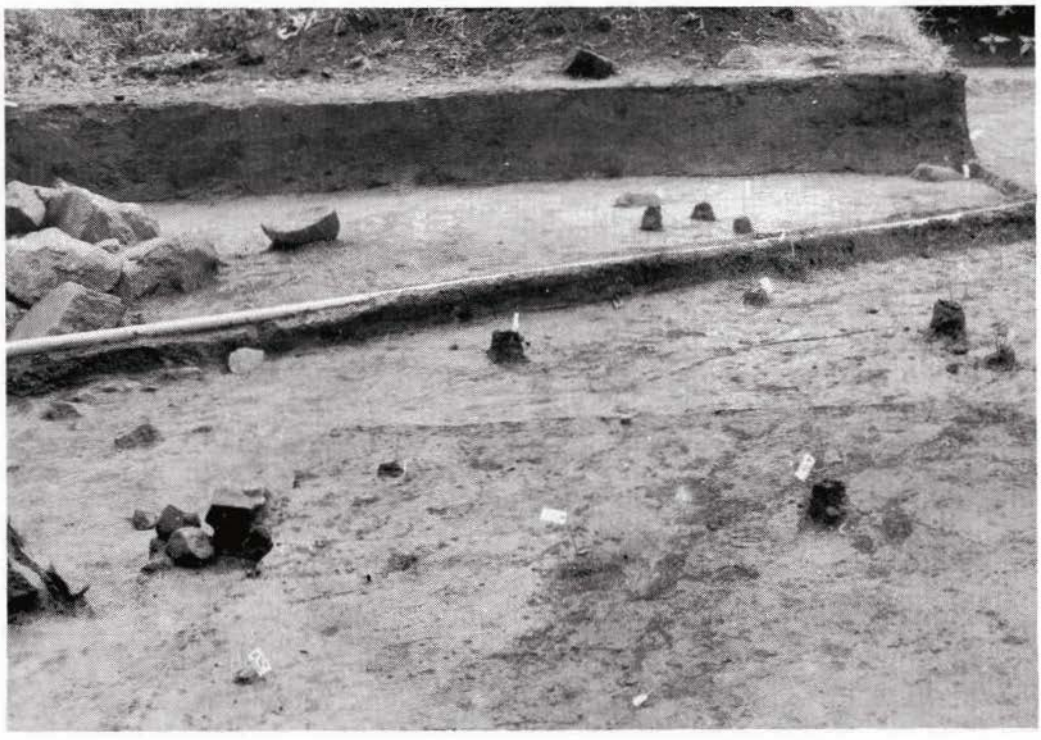




図版六　太子林遺跡

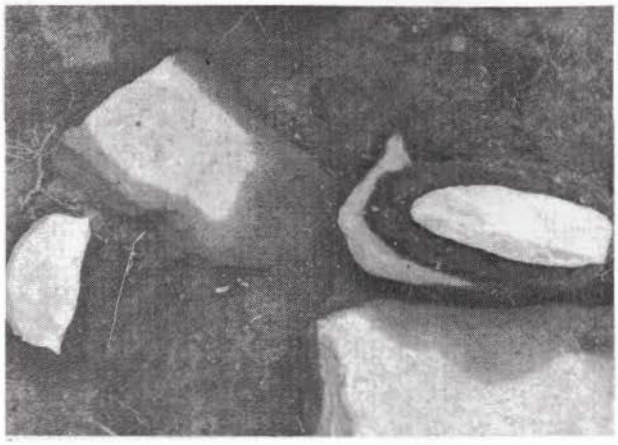
▲ 第 II 群

▼ 第 III 群

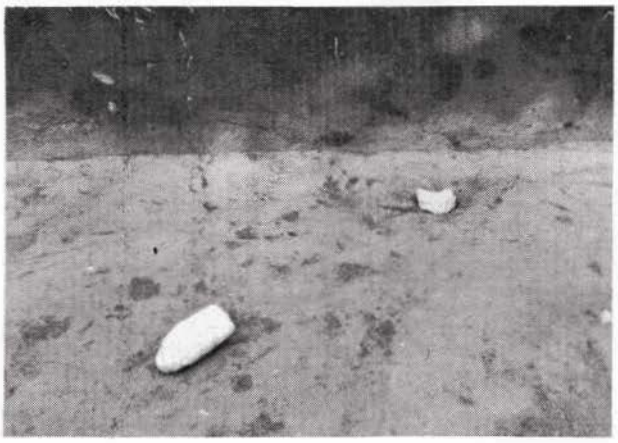


図版七　太子林遺跡

第 I 群



第 II 群

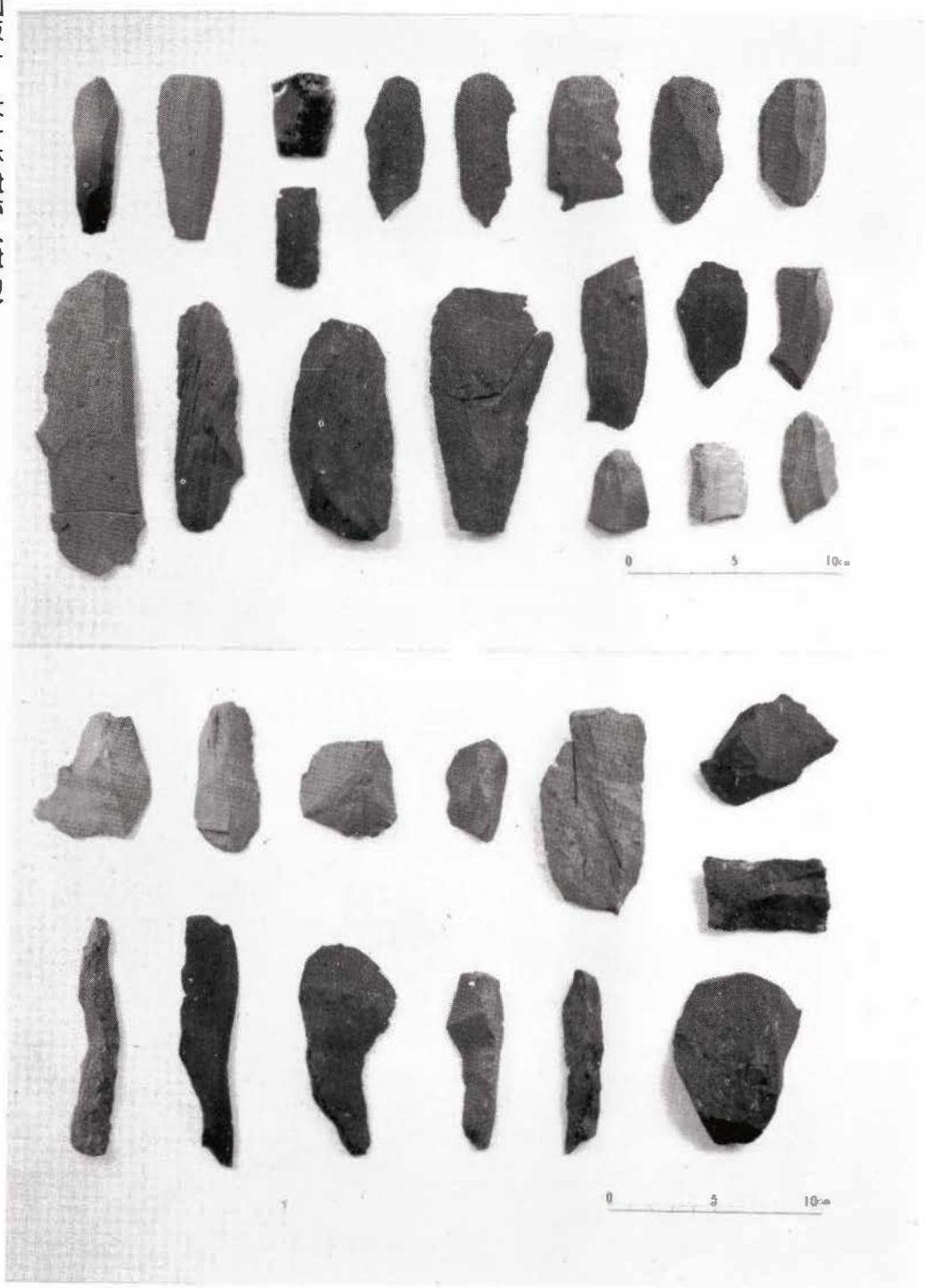


第 III 群

図版八　太子林遺跡（遺物）

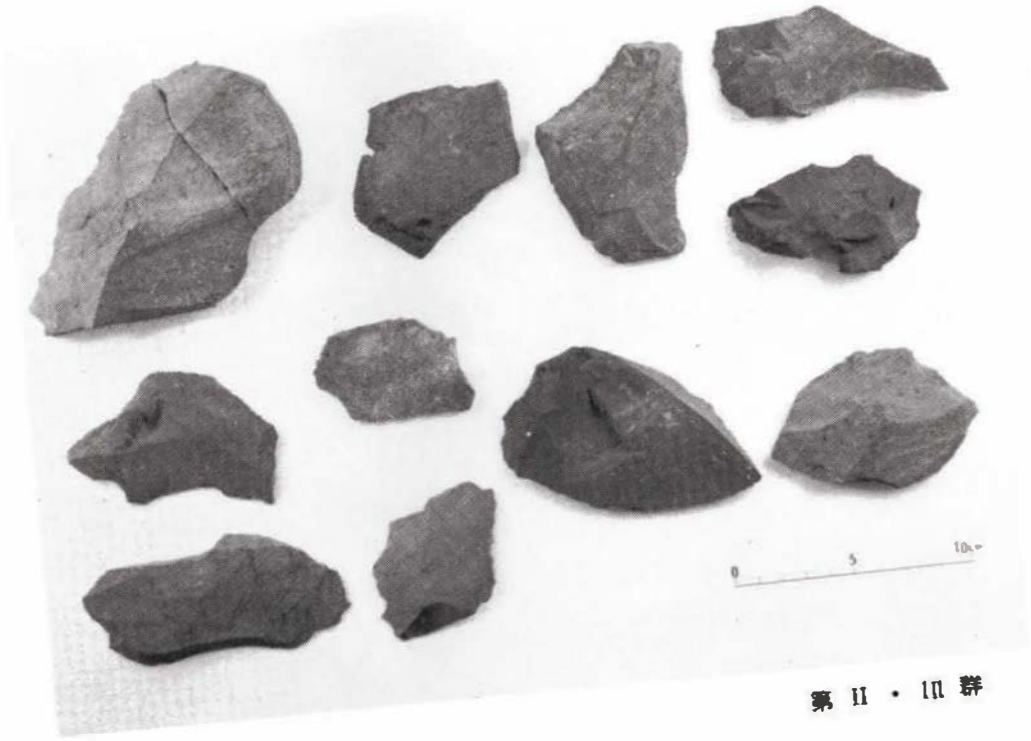
図版九　太子林遺跡（遺物）

図版十　太子林遺跡（遺物）



第Ⅰ群

図版十一　太子林遺跡（遺物）



第 II ・ III 群

▲ 遺跡近景（南より）

▼ 調査風景（西より）

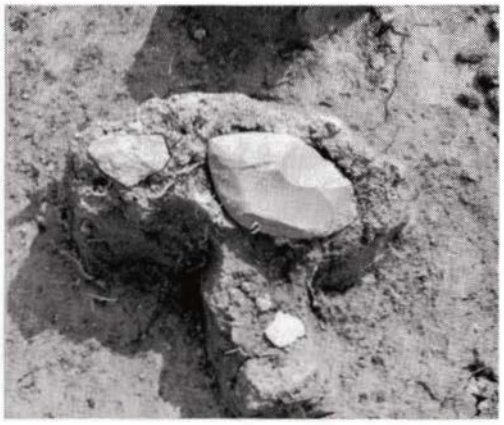
図版十三　関沢遺跡

調査風景

調査風景

A類石器出土状態

A類石器出土状態



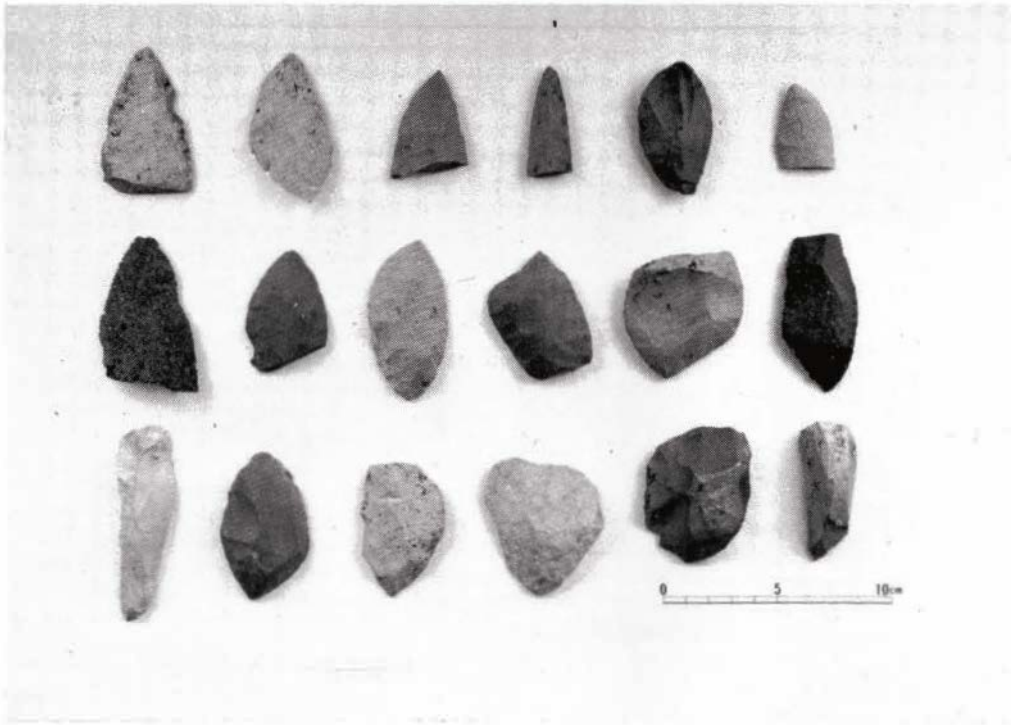
B類石器出土状態

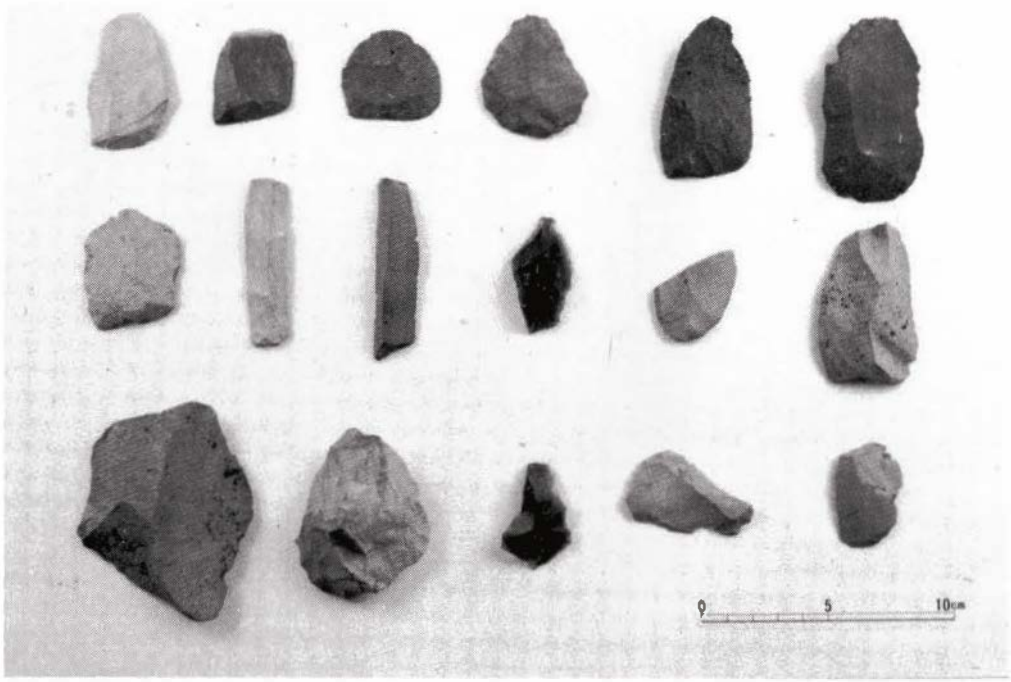
礫群出土状態

図版十四　関沢遺跡

▲▼関沢ユニット遺物出土状態

図版十五　関沢遺跡（遺物）





飯山市埋蔵文化財調査報告書

第 1 集	飯山市田草川尻遺跡緊急発掘調査報告書	1973・2
第 2 集	宮中遺跡 一分布確認調査報告書一	1979・2
第 3 集	北 原 遺 跡	1979・2
第 4 集	北原遺跡調査報告書	1980・6
第 5 集	鍛 冶 田	1980・6
第 6 集	北 原 遺 跡 Ⅲ	1981・2

飯山市埋蔵文化財調査報告　第7集

太子林・関沢遺跡

昭和56年3月5日印刷

昭和56年3月10日発行

編集　高橋　桂・望月静雄

発行　飯山市教育委員会

長野県飯山市大字飯山1110～1

印刷　小山印刷所

長野県飯山市南町20－1